

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業
用地内埋蔵文化財発掘調査概報 (2)

便木山遺跡発掘調査報告
惣図遺跡発掘調査概報
岩田第3・5号墳発掘調査概報



1971年7月

山陽団地埋蔵文化財発掘調査団

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業
用地内埋蔵文化財発掘調査概報 (2)

便木山遺跡発掘調査報告
惣図遺跡発掘調査概報
岩田第3・5号墳発掘調査概報

1971年7月

山陽団地埋蔵文化財発掘調査団

序

本町を北から南へ貫流する砂川は本郡北部に源を發し瀬戸内海に注ぐ。その中流には豊かな沖積平野を形成し、まわりを圍む山々には祖先の残した数多くの遺跡が埋もれています。

南方前池遺跡をはじめ、西宮山古墳に代表される西高月古墳群、角木古墳群、備前圓分寺址、さらにここに報告す慾図遺跡、便木山墳墓群等々あります。

最近の急激な地域開発は、大規模な工業用地・住宅団地造成・道路建設工事等、相ついで行なわれ、そのために貴重な文化財がうしなわれていることはまことに残念です。

このたび山陽町においても、岡山県営山陽新市街地開発事業による、住宅団地造成が行なわれることになり、当教育委員会は、この地域における埋蔵文化財の取扱いについて、県当局関係機関と慎重に協議し、文化財保護の立場からできるだけ遺跡の現状保存に努めました。しかし団地造成技術上保存困難な遺跡については、発掘調査による記録保存の措置をとることにいたしました。

ここに調査の概要を報告する、慾図遺跡、便木山墳墓群により、弥生時代中期から後期におよぶ集落の問題、古墳発生期における研究に多くの資料を得ることができました。

きわめて不備な調査態勢のもとに、団地造成の期限に追われながらの発掘であって、十分満足すべき結果ではありませんが、今日では、すでにその姿を再び見ることのできないこれらの遺跡を、この報告書によって、学問の研究にその活用を図っていただければ幸いと思います。

おわりに、この調査にあたって、終始理解ある御協力をいただいた県当局ならびに関係各機関の方々、さらに多くの助言と御指導を賜った研究者の各位、またこの調査に直接あられた調査團の皆様に厚く御礼申し上げます。

山陽町教育長

中 永 五 --

例　　言

1. 本書は、岡山県の委託により、山陽町教育委員会が実施した、岡山県當山陽新住宅市街地開発事業造成予定地内の、埋蔵文化財発掘調査概報第2集である。
2. 今回調査した地区は、山陽新住宅市街地中央幹線道路（都市計画街路岩田・下市線）の道路敷およびその縁辺部に所在する、便木山遺跡、惣國遺跡、岩田第3号墳、岩田第5号墳の4か所である。
3. 調査は、昭和45年10月1日から、昭和46年7月31日までの期間実施し、その経費は岡山県の負担による。
4. 調査組織は、山陽町教育委員会が中心となって、調査委員会、および山陽町埋蔵文化財発掘調査団を構成した。
5. 本書の執筆は、調査員である則武忠直、神原英朗の討議をもとに神原が行なった。
6. 出土遺物の整理および復元作業は則武が中心となって行ない、その検討および実験では、岡山大学学生山本博利君、東郷君の助力を得た。
7. 各造構の実測は、則武、神原、岡本豊が分担してあたり、その整理・淨寫は神原が行なった。
8. 写真撮影および編集は神原が行なった。

目 次

序 説.....	1
1. 調査の契機	
2. 調査の経過	
3. 考古学的環境	
便木山遺跡発掘調査報告.....	9
1. 立 地	
2. 調査前概況	
3. 遺跡の素描	
4. 出土遺物	
5. ま と め	
慈因遺跡発掘調査概報.....	60
1. 立 地	
2. 調査前概況	
3. 各遺構の素描	
4. 出土の遺物	
5. ま と め	
岩田古墳群第5号墳発掘調査概報.....	96
岩田古墳群第3号墳発掘調査概報.....	103
あとがき.....	112

挿 図 目 次

(序 説)

第1図 山陽町遺跡分布図(則武作成) 4

第2図 住居場地造成地内遺跡分布図(則武・神原作成) 5

(便木山遺跡)

第3図 便木山周辺地形図(柴土木部原図、神原作成) 10

第4図 便木山遺跡外形図(則武・神原) 11

第5図 便木山遺跡発掘区平面図(則武・神原) 12

第6図 遺構配置図(則武・神原) 13

第7図 遺跡縦横断面図(則武) 15

第8図 1~7土壤火薬測図(則武・岡本・神原) 16

第9図 8~14土壤火薬測図() 18

第10図 18~24土壤火薬測図() 21

第11図 25, 26土壤火薬測図() 23

第12図	27~31土壤実測図（則武・岡本・神原）	25
第13図	38~40土壤実測図（　　タ　　）	26
第14図	32~36土壤実測図（　　タ　　）	27
第15図	第33土壤実測図（神原）	28
第16図	A溝状遺構実測図（神原）	32
第17図	B溝状遺構実測図（神原）	33
第18図	C溝状遺構実測図（則武）	34
第19図	D溝状遺構実測図（岡本・神原）	35
第20図	土器棺（K 2 ~ K 6）（山本）	38
第21図	土器棺（K 7）（山本）	39
第22図	特殊壺、器台（東・山本）	44
第23図	特殊器台文様構成（東）	45
第24図	A溝状遺構出土、土器（山本・東）	47
第25図	B溝状遺構出土、土器（　　タ　　）	48
第26図	鼓形器台（山本）	49
第27図	C溝状遺構出土、土器（山本・東）	50
第28図	D溝状遺構出土、土器（山本・東）	51
第29図	24・26・38土塗出土の土器（山本・東）	52
第30図	鉄器・石器（神原）	53
第31図	小形仿製鏡・玉類（神原）	55
（懸 図 遺 跡）		
第32図	懸図遺跡周辺地形図（県土木部原図）	61
第33図	懸図遺跡地形図（神原・則武）	62
第34図	懸図遺跡発掘区全図（神原）	63
第35図	1号・13号住居址実測図（則武・神原）	66
第36図	2号住居址周辺部実測図（神原）	69
第37図	4号・5号住居址実測図（則武・神原）	71
第38図	6号住居址実測図（則武）	73
第39図	7号住居址実測図（則武・神原）	74
第40図	8号住居址実測図（則武）	75
第41図	10号住居址実測図（神原）	77
第42図	14号・15号住居址実測図（則武）	79
第43図	第1ピット実測図（岡本）	81
第44図	第2ピット実測図（岡本）	82
第45図	16号住居址実測図（則武）	83
第46図	17号・18号住居址実測図（則武）	84

第47図	19号住居址実測図（則武）	85
第48図	20号住居址実測図（夕）	86
第49図	21号～24号住居址実測図（則武）	87
第50図	惣図遺跡出土、土器（山本・東）	89
第51図	惣図遺跡出土、土器（山本・東）	90
第52図	惣図遺跡出土、石器（藤田）	92
第53図	惣図遺跡出土、石器（藤田）	93
第54図	惣図遺跡出土、須恵器（根本・則武）	94
(岩田第5号墳)		
第55図	岩田5号墳地形図（神原・則武）	97
第56図	岩田5号墳墳丘断面図（神原・則武）	98
第57図	石室（平面図）（神原・角田）	99
第58図	石室（側面図）（神原・則武）	100
第59図	北墳丘端列石（岡本）	101
第60図	墳丘表土土器（神原）	102
(岩田第3号墳)		
第61図	岩田第3号墳外形図（則武・神原）	104
第62図	墳丘断面図（則武・神原）	105
第63図	ハニワ（神原）	106
第64図	第1主体石室（神原）	109
第65図	第2主体石室（神原）	110
第66図	玉類（神原）	111

付 表 目 次

付表1	山陽住宅団地内埋蔵文化財一覧	6
付表2	便木山遺跡・土壤一覧	14
付表3	特殊器台・壺片出土一覧	40
付表4	各溝状遺構出土土器一覧	51
付表5	1号住居址柱穴計測値	65
付表6	5号住居址柱穴計測値	73
付表7	10号住居址柱穴計測値	76
付表8	15号住居址柱穴計測値	80

図 版 目 次

(便木山遺跡)

本文対照頁

図版1	(1) 便木山遺跡調査前外観（東南から）	9
-----	----------------------	---

(2) 便木山遺跡調査前外観（南から）	9
図版2 (1) 犀ヶ谷金城（西G3号墳から）	9
(2) 土墳群出土状況	12
図版3 (1) 1~7号土墳出土状況	11~16
(2) 9・10号土墳出土状況	17
図版4 (1) 24号土墳周辺部出土状況	22
(2) 17~20号土墳出土状況	22
図版5 (1) 25号土墳出土状況	23
(2) 26号土墳遺物出土状況	23
図版6 (1) 33号土墳出土状況（東から）	29
(2) 33号土墳出土状況（北から）	29
図版7 (1) 30・31号土墳出土状況	24
(2) 34・35号土墳出土状況	29
図版8 (1) A溝状遺構出土状況	32
(2) B溝状遺構出土状況	34
図版9 (1) C溝状遺構出土状況	34
(2) D溝状遺構出土状況	36
図版10 (1) C溝状遺構底土器片出土状況	35
(2) 24号土墳直上土器出土状況	53
(3) K1. 特殊壺出土状況	17
図版11 (1) K2. 土器棺出土状況	30
(2) K3. 土器棺出土状況	31
(3) K6. 土器棺出土状況	31
図版12 (1) K6. 土器棺壺	33
(2) K2. 土器棺壺	37
(3) K6. 土器棺鉢	39
図版13 (1) K7. 土器棺出土状況	40
(2) K7. 土器棺伴出坏	40
(3) K7. 土器棺甕	40
図版14 (1) D溝状遺構出土特殊器台片	41
(2) C溝状遺構出土鞍形器台	49
図版15 (1) 8号土墳付近出土鏡	55
(2) 26号土墳出土鉄器	54
(想図 遺跡)	
図版16 (1) 悅國遺跡遠景（西南から）	60
(2) 悅國遺跡近景（南から）	60

図版17	(1) 発掘区景観（7号住居址以南）	62
	(2) 発掘区景観（1号住居址以南）	62
図版18	(1) 1・13・15号住居址出土状況	65
	(2) 2・3号住居址出土状況	68
図版19	(1) 4号住居址出土状況	70
	(2) 5号住居址出土状況	72
図版20	(1) 6号住居址出土状況	73
	(2) 7号住居址出土状況	75
図版21	(1) 8号住居址出土状況	76
	(2) 9号住居址出土状況	76
図版22	(1) 10号住居址出土状況	76
	(2) 13・14・15号およびP1・P2出土状況	77
図版23	(1) 14・15号住居址出土状況（南から）	80
	(2) 14・15号住居址出土状況（北から）	80
図版24	(1) 第1ピット出土状況	81
	(2) 第2ピット出土状況	82
図版25	(1) 16号住居址出土状況（南から）	82
	(2) 16号住居址出土状況（東から）	82
図版26	(1) 17～20号住居址出土状況	84
	(2) 21～24号住居址出土状況	88
図版27	(1) 2号住居址付近平塗部	68
	(2) A溝状遺構	68
図版28	(1) 1号住居址土器片出土状況	65
	(2) 2号住居址土器片出土状況	68
	(3) 鋸刃石斧出土状況	70
図版29	(1) 慈岡遺跡出土石器	91
図版30	(1) 慈岡遺跡出土石器	91
	(2) 慈岡遺跡出土桃の実	95
（岩田第5号墳）		
図版31	(1) 調査前外観（東から）	96
	(2) 北墳端部列石	98
図版32	(1) 石室天井石出土状況	98
	(2) 石室出土状況	100
図版33	(1) 石室側壁構築状況（西壁）	100
	(2) 石室・列石関連状況	100

(岩田第3号墳)

図版34	(1) 岩田第3号墳全景(北から)	103
	(2) 第3号墳墳頂部発掘状況.....	105
図版35	(1) 第1主体出土状況(西から)	107
	(2) 第1主体出土状況(北から)	107
図版36	(1) 第1主体北石材散乱状況.....	107
	(2) 第2主体出土状況.....	107
図版37	(1) 豊石・ハニワ出土状況(墳丘南東隅)	105
	(2) 豊石・ハニワ出土状況(墳丘東斜面)	105
図版38	(1) ハニワ(H1)出土状況.....	105
	(2) ハニワ(H2)出土状況.....	105
	(3) 土器(H4)出土状況.....	105
図版39	(1) 出土玉類.....	110
	(2) 出土器材ハニワ(短甲草摺片)	106
図版40	(1) 器材ハニワ(キヌガサ片)	106
	(2) 器材ハニワ(短甲苞手片)	106
	(3) 器材ハニワ(三角板革縫短甲片)	106

序　　説

1. 調査の契機

岡山県倉山陽新住宅市街地開発事業にともなう住宅団地の造成工事が進められている。岡山県赤磐郡山陽町は、岡山市の北東に隣接する農村である。まわりを低い山々で囲まれ、その中央を北から南へゆるやかに貫流する砂川の流域に発達した、約30haの沖積平地を中心として成立している。

住宅団地の造成地は、こうした山々の一角にあたり、西から沖積平地中心部を見おろすなどらかな丘陵地である。同町内の和田、岩田、河本、下市、熊崎、鶴前の6部落にまたがり、東西約900m、南北約1200m、造成面積約100ヘクタールにおよぶ地域である。

この地域は、岡指定史跡阿波山古墳の後背地にもあたり、東高月遺跡群として注目されていた地域でもある。しかし、住宅団地計画が立案された当時は、現地は立木が繁り立ち入りも困難な状況で、充分な分布調査が実施できなかった。土地買収が行なわれ、立木の伐採が進むにつれ、確認される遺跡の数は増し、現在では当初の予想をはるかに上まわる、弥生時代遺跡8か所、古墳58基の存在が明らかとなった(図2、表2)。

これらの埋蔵文化財の取り扱いについて、岡山県土木部および岡山県教育委員会をはじめ関係機関で協議し、自然公園内に取り入れて、現況保存を行なうなどを重ねてきた。しかし、住宅団地造成上技術的に現況保存の困難な遺跡については、やむなく発掘調査による記録保存を行なうこととなった。記録保存となる遺跡は、弥生時代遺跡7か所、古墳30基である。発掘調査は原則として、集落遺跡を岡山県教育委員会文化課が、古墳等墳墓遺跡を、岡山県の委託を受けて、山陽町教育委員会が担当することとなった。

住宅団地造成予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を担当することとなった山陽町教育委員会では、町教育委員会、町文化財保護委員会を中心に、関係機関代表をもって、山陽住宅団地埋蔵文化財調査委員会を設置して、調査を推進することとなり、また直接調査を担当する発掘調査団は、専従調査員を中心に町内在住者で組織した。

発掘調査を必要とする遺跡が多く、また長期にわたるため、委託契約は数次に分けて締結することとし、昭和44年11月1日の用木古墳群の発掘調査を皮切りに現在におよんでいる。

ここに概報として報告する用木古墳群の調査は、第3次委託契約にもとづくもので、先に岡山県倉山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第1集として報告した、第1・2次委託契約の、用木古墳群の調査に引き続いて行なったものである。

2. 調査の経過

今回の発掘調査は、岡山県倉山陽新住宅市街地開発事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査第3次契約にもとづき、岡山県の委託を受けて、山陽町教育委員会が、昭和45年10月1日から、昭和46年7月31日までの期間実施したものである。

調査地域は、住宅地内の中央を南北に縱貫する、都市計画道路岩田・下市線の道路敷予定地、およびその縁辺部に立地する便木山遺跡（土墳墓群）、惣岡遺跡（弥生時代集落址）、岩田古墳群第3号、同5号墳の4か所である。

調査の期間は一応遺物の整理、概報の作成等の期間もみて、計10か月とかなりの巾を持っているが、住宅団地の造成工事と併行しての発掘調査のため、掘り上げが終るのを待ち構えて、すぐ次の契約を結ぶというように、きびしいものである。

○ 第1・2次契約

調査期間 昭和44年11月1日～昭和46年3月31日

調査遺跡 用木古墳群16基の内12基

○ 第3次契約

調査期間 昭和45年10月1日～昭和46年7月31日

調査遺跡 便木山遺跡、惣岡遺跡、岩田3・5号墳

○ 第4・5次契約

調査期間 昭和46年1月1日～昭和46年10月31日

調査遺跡 四辻古墳群7基、四辻土墳墓群

○ 第6次契約

調査期間 昭和46年7月1日～昭和46年10月31日

調査遺跡 惣岡遺跡第2地点

発掘調査は、まず便木山遺跡から着手したが、住宅団地造成工事と併行し、その工期の都合等によって、こま切れの調査となり、そのたびに、個々の遺跡の完掘を終らないまま、他の遺跡の発掘調査を行なうといったことの繰り返しで、時間的にも精神的にも大きな負担を余儀なくされた。個々の遺跡の調査の経過については、本書のスペースの関係もあり、省略して、各遺跡の調査を行なった期日を一覧表によって示すこととする。尚今次契約と事实上重複した第4・5次契約の四辻古墳群の調査についても併記した。

- | | |
|-----------|-------------------------|
| ① 便木山遺跡 | 昭和45年9月7日～昭和45年10月12日 |
| | 昭和45年11月11日～昭和45年11月26日 |
| | 昭和46年3月27日～昭和46年4月16日 |
| ② 岩田第3号墳 | 昭和45年10月13日～昭和45年11月10日 |
| ③ 岩田第5号墳 | 昭和45年11月27日～昭和45年12月17日 |
| ④ 惣岡遺跡 | 昭和45年12月20日～昭和46年1月2日 |
| | 昭和46年4月21日～昭和46年5月25日 |
| ⑤ 四辻2・3号墳 | 昭和46年1月19日～昭和46年1月31日 |
| ⑥ 四辻7号墳 | 昭和46年2月1日～昭和46年3月26日 |
| 同土墳墓群 | 昭和46年4月17日～昭和46年4月20日 |
| ⑦ 四辻8・9号墳 | 昭和46年5月26日～昭和46年6月16日 |
| ⑧ 四辻1号墳 | 昭和46年6月17日～昭和46年7月1日 |

以上のように、毎日が発掘調査に明けくれる連続である。調査現場のすぐ近くを、ブルドーザー やスクラバー等の重機が行き交い、平板測量の際のメーター読みの声も聞きとれないほどの響音と、写真撮影にも支障をきたすほどの土ほこりの中での作業であった。

調査体制の貧弱さもあって、調査概報をまとめるにも、遺物の整理や実測を行なう時間的な余裕がなかなか生みだせない。雨の日とか、作業員の少ない農繁期を利用したり、夜1枚ずつ製図を積み重ねるなどして、やっと調査を迫いかける現況である。本書も下記にかかげる作業員のチームワークのとれた協力と励まし、なかでも生業を犠牲にしてまで献身的な協力を屬わった、調査員則武忠直氏、作業長阿部政信氏の支えによるものが大きい。記して謝意を表したい。

調査団組織

調査主体者 山陽町教育委員会

調査責任者 小坂 寿徳（山陽町教育委員長）

調査主任 神原 英朗（山陽町教育委員会指導主事）

調査員 則武 忠直（山陽町文化財保護委員長）

調査補助員 国本 肇（赤坂町文化財保護委員）

作業長 阿部 政信（山陽町文化財保護委員）

作業員 阿部 信春 井上 政夫 岩木 竹志 入江 忠一 舟田 順

尾上 弘治 山吹 三一 山本 高男 山本 寛 阿部 敏子

阿部 茂子 阿部 春恵 阿部美枝子 阿部 労恵 石原 竹子

井上 鑑美 井上 初 遠藤 操 錦田八重子 小坂 弘江

小坂 光子 中務佐登江 藤木 竹子 社 寿子 社 百枝

社 芳江 横田可奈子

事務局長 花房 清志（山陽町教育委員会主査）

なほこの調査にあたって、岡山県教育委員会文化課ならびに関係各機関から、終始指導と協力をいたいた。また岡山理科大学教授鍛木義郎氏、岡山大学助手春成秀爾氏、瀬戸中学校教諭角田茂氏、倉敷考古館問壁忠彦氏をはじめ、多くの研究者の方々から、折りにふれ教示と励ましを賜わった。なかでも恩師岡山大学助教授近藤義郎先生、学友今井聰君には多大の助言と鞭撻をいたいた。記して深く感謝の意を表したい。

遺物の整理および実測にあたっては、岡山大学学生山本博利君、東潮君の真摯な助力と協力を賜わった。さらに便木山遺跡周辺部出土の鏡を快よく提供いただいた、岡町佐倉淳夫氏に対して、厚く感謝の意を表する。

3. 考古学的環境

砂川流域に開けた沖積平地を中心として成立する当山陽町には、数多くの埋蔵文化財が所在する。

沖積平地南縁の南方地区の山裾にある、前池という灌漑池の底から発見された、南方前池遺跡（図1-1）は、縄文晩期から弥生前期内にかけての遺跡であるが、なかでも縄文終末期の食物貯蔵



第1図 山陽町遺跡分布図

- | | |
|----------|---------------|
| 1 南方前池遺跡 | 7 東高月古墳群 |
| 2 下市遺跡 | 8 西山古墳群 |
| 3 東高月遺跡群 | 9 高陽古墳群 |
| 4 熊崎遺跡 | 10 備前國分寺址 |
| 5 鶴前遺跡 | 11 備前國分尼寺址（伝） |
| 6 蘭宮山古墳群 | |



附表1

山陽住宅団地内埋蔵文化財一覧

S 46. 3. 31

古墳群	名 称	墳 形	径 (m)	高 (m)	保存度	取扱区分		マスター・プランとの関係	備 考
						保 存	調 査		
用 木 古 墳 群	A-1	円 墳	31.0	5.0	○		○	中心施設	葺石
	2	"	(22)	(3.0)	○		○	"	"
	3	前方後方	43.0	4.0	○		○	小学校	葺石
	4	方 墳	(25.0)	(4.0)	○		○	"	"
木 古 墳 群	5	"	12.0	0.8	○		○	"	葺石
	6	前方後円	37.0	4.0	○	○		児童公園	成は円墳2
	7	"	24.0	1.2	○		○	幼稚園	
	8	円 墳	14.0	1.2	○		○	小学校	
群	9	?	(6.0)	?	△		○	"	
	10	?	(6.0)	?	△		○	"	
	11	方 墳	12.0	1.5	△		○	"	ハニワ
	12	"	16.0	1.5	○		○	"	葺石
宮 山 古 墳 群	13	?	?	?	△		○	"	
	14	?	?	?	△		○	"	
	15	円 墳	15.0	1.5	○		○	?	
	16	"	13.0	1.6	○		○	?	
野 山 古 墳 群	B-1	円 墳	17.0	2.3	△	○		綠 地	
	2	"	15.0	1.0	○	○		"	
	3	"	12.0	0.8	○	○		"	
	4	"	15.0	1.5	△		○	"	
野 山 古 墳 群	C-1	円 墳	11.0	1.2	○	○		近隣公園	
	2	"	12.0	1.0	○	○		"	
	3	"	6.0	0.5	○	○		"	
	4	"	?	?	×	○		シスト	
古 墳 群	5	"	?	?	×	○		シスト	
	6	"	?	?	×	○		シスト	
	7	"	6.0	0.5	○	○		"	
	8	"	5.0	0.8	○	○		"	
群	9	"	13.0	0.8	○	○		"	
	10	"	12.5	0.8	○	○		"	
	11	"	10.0	0.8	○	○		"	
	12	"	19.0	2.0	○	○		"	
愛古 岩墳 山群	D-1	台 状 墓	48.0	1.0	○		○	建壳分譲	弥生かも?
	2	円 墳	13.0	0.8	○		○	"	
	3	"	(10.0)	(0.5)	○		○	"	
岩 田 古 墳 群	E-1	円 墳	17.0	2.0	×		○	建壳分譲	
	2	"	16.0	1.0	×	○		児童公園	
	3	方 墳	18.0	1.5	×	○		?	ハニワ, 葺石
	4	円 墳	12.5	1.5	△	○		綠 地	
	5	方 墳	?	13.0	1.5	○		道路	列石, 墓穴石室
四 辻 古 墳 群	F-1	円 墳	16.0	2.0	○		○	分譲宅地	
	2	"	7.0	1.2	×		○	"	
	3	"	13.0	2.0	×		○	"	
	4	"	7.0	1.0	×		○	"	組合石榴

古墳群	名 種	填 形	径 (m)	高 (m)	保存度	取 扱 区 分		マスター・プランとの関係	備 考
						保 存	調 査		
四 社 古 墳 群	F-5	円 墳	14.0	1.5	○		○	分譲宅地	
	6	"	15.0	1.2	○		○	"	
	7	"	15.0	1.2	○		○	"	
	G-1	円 墳	9.5	1.0	○	○	○	兒童公園	
	2	"	15.0	1.5	○	○	○	"	
	3	"	16.0	2.0	○	○	○	"	組合石楠
	4	"	8.0	0.8	○	○	○	集合住宅	
	5	"	12.0	1.0	○	○	○	"	
	6	"	8.4	0.8	○	○	○	"	
	7	"	12.0	2.0	△	○	○	"	ハニワ
	8	前方後円	16.0	1.0	○	○	○	"	
古 墳 群	9	円 墳	11.0	0.8	△	○	○	"	
	10	"	13.0	1.2	○	○	○	道 路	土壤墓41.
	11	"	?	?	×	×	×	?	横穴式石室

遺 跡	立 地	備 考
Y-1	丘 陵 端	弥生聚落址
2	"	弥生～古墳時代集落址(堅穴住居址)
3	舌状丘陵・谷	同上
4	丘 陵 谷 頸	弥生包含層、弥生土器散布
5	丘 陵 斜 面	弥生墓地?
6	丘 陵 尾 根	同上
7	"	弥生聚落址(堅穴住居址検出)
8	丘 陵 轴 部	弥生土壞墓群(71土壙)

穴が検出され著名となっている。沖積平地のほぼ中央部、砂川自然堤防の東にあたる山陽小学校敷地からは、遠賀川式土器を伴なう弥生前期の集落址が存在する（図1-2）。

また平地を取り囲む丘陵の緩斜面から山裾にかけて、広い範囲にわたって、弥生後期から奈良、平安期にかけての土器の散布が見られる。中でも今回住宅団地に造成されている岩田・下市・熊崎にかけては頗著（図1-3.4.5）である。

古墳をはじめ墳墓の分布も密度が高い。平地の一角と、まわりを取り囲む山々の麓や、そこからのびる小丘陵の上に大小多数の古墳が分布する。

平地の南西部には、国指定史跡で水をたえた周濠をめぐらす全長192mの前方後円墳である両宮山古墳を中心、森山古墳、朱千穂古墳、彌り山古墳、小山古墳等、大型古墳を特色とする高月古墳群（図1-6）がある。

両宮山古墳の後背地でもあり、今次住宅団地の造成が行なわれている、東高月遺跡群には、四辻土墳墓群（弥生中期・71土墳）、便木山遺跡（酒津併行跡・41土墳）等土墳墓を中心とした墳墓遺跡と、それに引き継ぐ用木古墳群をはじめ、前半期古墳を中心とした58基の古墳（図1-7）が所在する。

町内北西部西山地区を中心とした地域には前方後円墳・方墳・円墳および大小の横穴式石室・箱式石棺とバラエティーに富んだ約40基の西山古墳群（図1-8）があり、中東部には、約20基の小型円墳からなる高陽古墳群（図1-9）が所在する。

当山陽町内ではないが、西山古墳群に隣接する島取上高塚は前方後円墳で、巨大な横穴式石室を有し、両宮山古墳の西南約3kmの岡山市半佐にも全長18mの横穴式石室をもつ、半佐の大塚古墳が立地している。

この地域は、旧山陽道の通過地でもあり、西の総社市周辺とともに、かつての吉備の國の中心の一つでもあった。両宮山古墳のすぐ西に接して、備前国分寺址（図1-10）がある。現在は水田となっているが、今でも瓦の小片が散見される。国分寺址の南約200mの山裾に近い仁王堂池付近に国分尼寺（図1-11）があったであろうと伝えられ、池中に礎石が残り、瓦も発見されている。条里制の遺構も、高月、西山、高陽地区に残り、今日でも往時の姿をしのぶことができる。

以上簡単に、山陽町内の埋蔵文化財関係の概要を述べた。住宅団地内の遺跡の特徴などについては、先の調査概報第1集『用木古墳群発掘調査概報』に記しているので参照されたい。遺跡分布図⁽¹⁾および遺跡一覧表を再録してこれに替える。

註

- 1) 第1集において、四辻古墳群第5号墳および第6号墳としてあつかった地点は、同第7号墳と合せて、弥生中期の土墳墓であったため、取り消し欠番とし、新たにY8として取り扱ったので御了承願いたい。

便木山遺跡発掘調査報告

1. 立地

便木山遺跡（略記号G10）は、岡山県赤磐郡山陽町大字河本字便木山に所在する。

西方の山塊高倉山（標高458.3m）の東面する急斜面が、四辻峰（標高89.6m）と呼ばれる地点で鞍部を作り、そこからいくつかの谷によって開析されながら、ゆるやかな起伏をもって下降する丘陵を形成している。

本遺跡は、この丘陵支脈の一画尾根平坦部に立地する（図3）。門前池・中池を含む谷水田の北西に沿って伸びる丘陵尾根が、中池堤防付近で下降傾斜をゆるめ、やや平坦な広がりをみせ、そこから更に尾根支脈を北へ分岐している。この尾根支脈の分岐する平坦部が遺跡で、南北約35m、東西約45mの範囲にわたっている。標高は中心部で52.5m、眼下の谷水田との比高は約20mである。

この丘陵周辺は、本遺跡の他に、多くの遺跡が集中している（図3）。本遺跡の西に接して、丘陵尾根稜線に便木山1～3号墳、東に4～6号墳、北に8号墳と、あたかも本遺跡をとり囲むような形で、便木山古墳群が立地している。谷水田1つをへだてた南には、先に報告した用木古墳群⁽¹⁾16基が指呼の間に望見できる。また北東眼下の用木谷をはじめ、これら丘陵鞍部および谷頭一帯から、弥生後期を中心とした集落遺跡が広がっている。

2. 調査前概況

当地は、調査前までは松林であった。平坦地とはいっても、巾狭な馬の背尾根のことでもあり、北西および北東の谷頭に向う斜面と南側斜面は、かなりの傾斜をみせている（図4、図版1・2）。ことに南側は中池堤防の直上部にあたり、護岸工事の採土場となって大きく切り崩されていた。遺跡内で、尾根稜線に沿う林道と、丘陵を南北にわたる林道とが交差し、かつての灌漑水路の分岐点ともなっている。更に猪垣用の土塁が南北に横断して構築されており、原地形はかなり乱れており、当初の分布調査では、遺跡であることに気づかなかった。

その後、造成工事に先立つ立木の伐採と、それを撤出するための仮設道路がブルドーザーによつてつけられた時点で、再度歩きなおした結果、径10m前後、高さ1m弱の低平な高まりと、切り通し道断面から若干の弥生式土器片を検出した。この地が、住宅団地中央幹線道路の通る予定地にあたり、前述の便木山古墳群、および用木谷の集落遺跡との関連から、外表観察ではその遺跡の性格が判然としないまでも、何らかの遺構の存在する可能性が強く、発掘調査をおこなうこととした。

3. 遺跡の素描

調査の結果、この遺跡は土壙墓群を中心とした墳墓遺跡であることがわかった。当地は花崗岩の風化土、いわゆるマサ土で形成され、流土も著しく、塙棺上方は現地表上に露呈風化した状態をみ



第3図 便木山周辺部地形図

せている。更に加えて、前述もした
ような後世の作偽もあって、遺跡の
保存状況は良好であるとはいえない
が、下記のとおりの遺構が残存した
(図5～7、図版2)。

1. 土壙墓状遺構 (1～41) 41
2. 土器棺 (K2～K7) 6
3. 溝状遺構 (A～D) 4

今回の調査範囲は、当遺跡の東西
に立地する便木山古墳が保存地区と
なっていることもあって、幹線道路
敷予定地内のみに限られたが、地形
その他の状況からみて、遺跡東部の
仮設道路によって切断された部分の
他は、一応完結した遺構群であると
推定される。

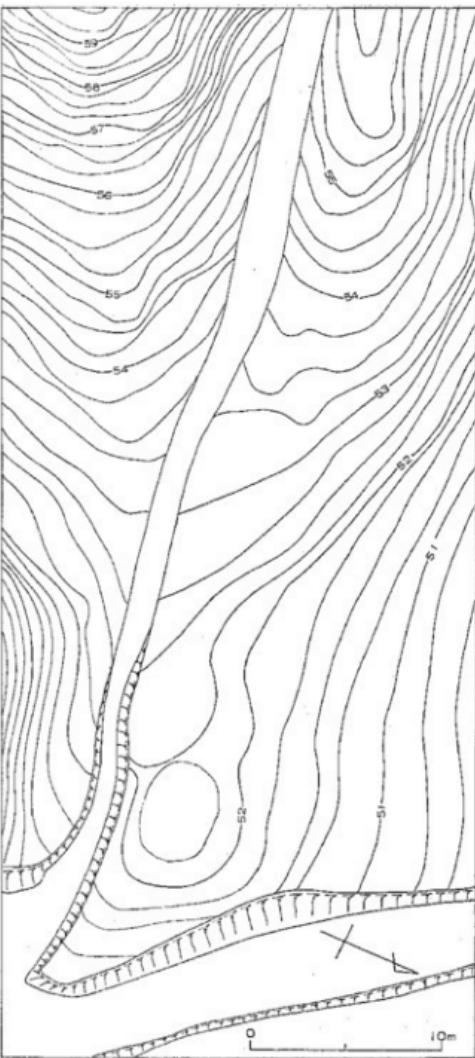
[1. 土壙墓状遺構]

第1土壙

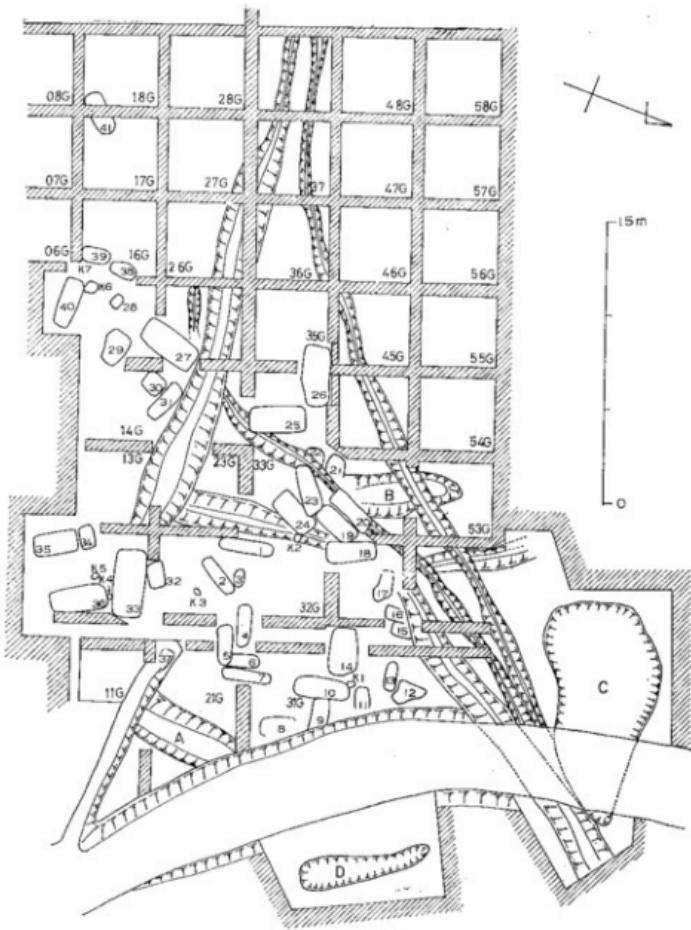
本遺跡のはば中心部、丘陵尾根稜
線がやや高まり、調査前の外観で低
平な墳丘状を呈する地域に、第1土
壙から第7土壙までの7土壙が、1
つのグループをなして掘り込まれて
いる(図8、図版3)。

第1土壙は、そのいちばん西に位
置し、尾根が隆起する直前の浅い谷
状となったところに、尾根と直交し
て長軸をば南北につくられている。
掘り込み上面の長さ280cm、巾85cm、
床面の長さ272cm、巾65cm、
地山掘り込みの深さは現状で7cmの
陽丸長方形土壙である。(以下各土
壙深さの計測値については、現存す

る地山上面での土壤掘り方の切り込みが確認できる部分から床面までの数値とする。)この土壙直上
には後世の猪塀の土塁が築かれ、上方はかなりカットされているものと推定される。床面はほぼ水



第4図 便木山遺跡外観図



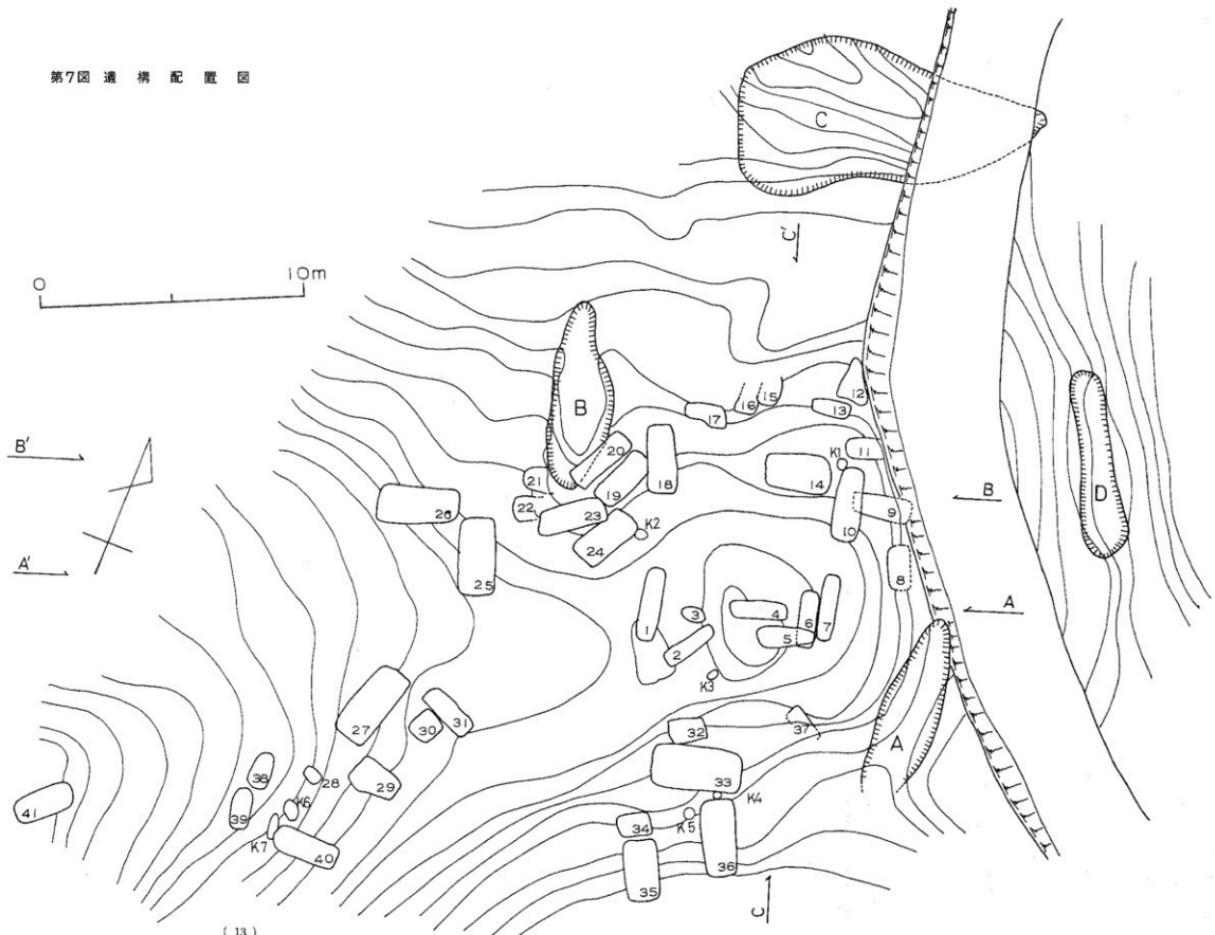
第5図 便木山遺跡発掘区

平で部分的に赤色顔料が認められた。土壙内の北小口部に人頭大の山石2個と、西方端近くにやや小型の山石1個が置かれていた。土壙内に意識的に埋納したと考えられる遺物はなにも検出されなかった。

第2土壤

第1土壤の南東隅より約70cm南東によったところに一つの角をおいて、第1土壤とほぼ45度の角度を開いた形で第2土壤が存在する。したがって長軸線は東北方向を示し 尾根稜線とは斜交す

第7図 遺構配置図

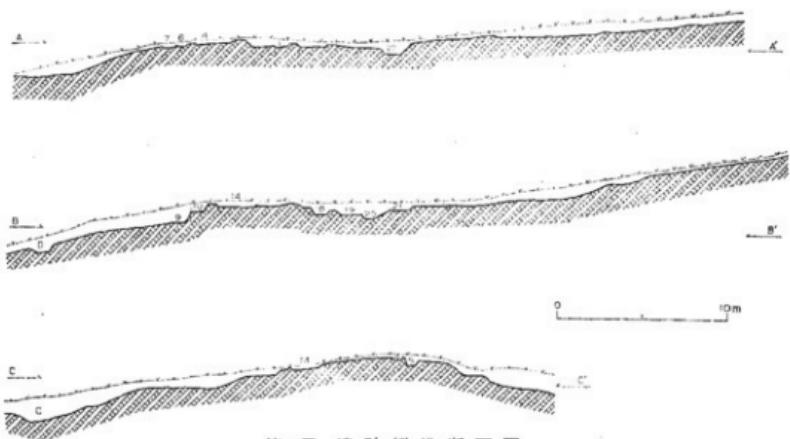


付表2

便木遺跡内部主体一覧表

(単位cm)

組	番号	主体種別	掘り込み上面		床面		床面高	備考
			長さ	巾	長さ	巾		
I	1	土 壁	280	85	272	65	0	
	2	"	230	99	189	53	-16	
	3	"	95	54	70	25	-26	
	4	"	235	75	209	63	0	
	5	"	250	67	186	50	-40	
	6	"	205	67	(200)	65	-12	
	7	"	237	88	230	87	-24	
II	8	"	175	(100)	140	(75)	-110	ガラス玉1 杓石1封
	9	"	(240)	100	192	76	-132	
	10	"	275	95	245	62	-97	小口に石積み 小戸型2
	11	"	?	80	?	70	-109	
	12	"	175	77	160	50	-140	
	13	"	215	108	150	65	-109	
	14	"	245	155	230	145	-73	杭石2封
	15	"	?	81	?	70	-127	杭石1封
	16	"	?	75	?	60	-116	杭石1封
	17	"	170	98	165	94	-100	杭石1封
III	18	"	280	110	226	69	-103	杭石2封
	19	"	232	109	215	55	-104	杭石2封
	20	"	252	92	235	80	-123	杭石2封
	21	"	?	?	110	90	-69	
	22	"	?	?	96	60	-58	
	23	"	269	95	246	84	-90	杭石1封 2段掘り方 砂上土層
	24	"	265	118	224	74	-103	杭石1封 2段掘り方 砂上土
	25	"	220	90	195	65	-59	杭石2封 2重掘り方 砂上土
	26	"	296	133	264	108	-32	杭石2封 2重掘り方 砂上
	27	"	315	138	284	121	+ 13	杭石2封
IV	28	"	64	48	55	33	+ 76	
	29	"	200	115	186	100	+ 14	杭石1封 2段掘り方
	30	"	124	100	75	65	+ 27	杭石1封 2段掘り方
	31	"	(215)	65	205	75	+ 20	杭石1封
	32	"	144	96	144	54	-105	
V	33	"	365	160	336	136	-161	配石壁 杭石1封
	34	"	72	35	68	30	-177	杭石1封 2段掘り方
	35	"	?	116	185	101	-196	杭石1封
	36	"	213	65	206	65	-200	2段掘り方 ガラス玉 青瓦 杭石3封
	37	"	?	?	(108)	40	-68	
VI	38	"	146	80	119	43	+113	
	39	"	163	77	136	46	+118	
	40	"	230	110	222	78	+ 14	杭石1封
	41	"	230	104	192	72	+284	
	K2	土器箱					- 25	漆+2体
-	K3	"					- 17	漆
	K4	"					-105	漆
	K5	"					-144	漆 青瓦
	K6	"					+ 73	漆+2体
	K7	"					+ 90	漆3個体



第7図 遺跡縦横断面図

る。地山掘り込み面での長さ 230cm,巾59cm,床面での長さ 189cm,巾53cm,深さ32cmの開丸長方形の土壙で、床面は水平である。床面において若干の朱が検出された他は、遺物・施設等皆無である。

第3土壙

第2土壙の北西隅に接して、第1土壙に直交方向につくられた小型の土壙である。地山掘り方上面では長径85cm,短径54cmの楕円形を呈するが、床面においては、長辺70cm,巾27cmの開丸長方形を示す。深さ27cm,床面は水平である。

第4土壙

第3土壙の東約90cmから東方へ、尾根稜線上につくられている。そこは壇丘状に高まった頂にあたる。地山掘り方上面で長さ 235cm,巾75cm,床面の長さ 209cm,巾63cm,深さ17cmを測る。床面は長方形を呈し水平である。土壙内東南隅に小石材が検出されたが、床面から若干浮いており、土壙内埋葬施設を構成するものかどうかは不明である。

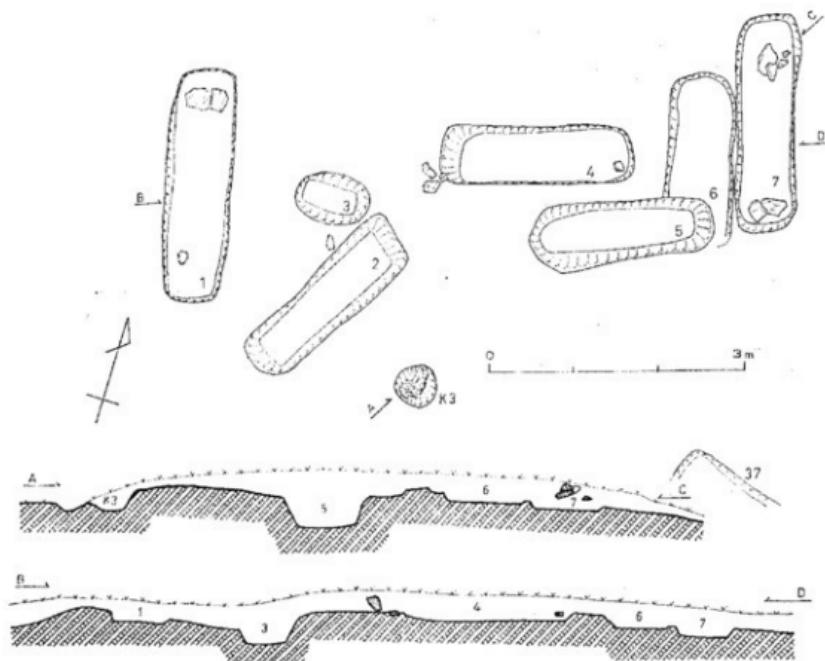
第5土壙

第4土壙の南側約20cm離れて、東へ約1mのずれをもって、第4土壙と平行に位置する。地山掘り方上面で長さ 250cm,巾67cm,床面の長さ 185cm,巾50cm,深さ35cmを測る。小口部における上下長はかなりの開きをみせ、壁は斜向する。床面はほぼ水平であるが、形状は長楕円形を呈する。この土壙は東端部で第6土壙と切り合っている。

第6土壙

第5土壙の東端部と、第6土壙の南端部が切り合った形で、かぎのてに直交してつくられている。地山掘り込み上面での長さ 205cm,巾67cm,床面の長さ推定 200cm,巾65cm,深さ7cmを測る。床面は水平で開丸長方形である。

第5土壙との先後関係は、第5土壙の方が深く掘り込まれ、完形を保つため、一見して第6土壙



第8回 1~7 土 壤 実 測 図

を切って後から構築されたようにみえるが、本遺跡の場合現状での各土壤の掘り込みが浅く、遺跡上部が、傍造時の地山部分も含めてかなり風化流失していることが予想される。したがって調査時においては、土壤掘り込みは、現地山生き土になって初めて確認できるのであって、その上端は知ることができなかった。また地質がマサ土であるため埋めもどされた土をまた掘って床にした場合、そこに枕石とか朱、あるいは遺物の残存等が検出されないと土壤の先後関係は確認できない状態である。この点は以後の切り合った土壤についても、検討を試みたが、明らかにすることはできなかった。

第7土壤

第6土壤のすぐ東側に隣接して平行に掘り込まれた土壤である。したがって長軸をほぼ南北におき、尾根稜線と直交する。掘り込み上面での長さ 237cm、巾 52cm、床面の長さ 230cm、巾 57cm、床面の長さ 230cm、巾 57cm、深さ現存 7cm を測る。床面は水平で隅丸長方形である。第6土壤にくらべて、斜面低位に立地するため、床面比高は 12cm あり、より深く感じられる。

土壤床面の両小口部に、南に 2 個、北に 4 個の山石が対象的に検出された。石材の出土状況から

みて、明らかに本土墳葬跡に際して用いられたものであるが、当初から意識的に床面に配したものか、あるいは、棺上または土壙上に置いたものが陥没したものかは不明である。

第8土壤

前記グループの東北方、数m離れたゆるやかな傾斜面に、第8土壤から第14土壤までの7土壤がグループをなして存在する(図9)。本遺跡土壤群の東端部にもあたり、A~Dの4溝状造構に取り囲まれた場所でもある。ここは工事に伴なう仮設道路敷設によって、南北に巾約4.5mにわたって削平され、その崖部断面に、第8、9、11、12土壤が切断された形で検出されたことから、あるいは更に数基の土壤が潜なまれた可能性をもつ地区である。

第8土壤は、第7土壤の東約2m、このグループの南端に立地する。傾斜面に沿って長軸を南北につくられた両丸方形のプランをもつ。その東半を道路によって削り取られ、その全貌を知ることができないが、掘り込み上面で長さ175cm、巾推定100cm、床面の長さ140cm、巾推定75cmである。深さは傾斜面のため一定でないが、最深部40cm、平均35cmを測る。

床面は水平で部分的に朱が残存し、南小口部から西側にかけて、6個の山石が検出された。床面中央線から西へ15cmのところからガラス玉1個を発見した。またこの道路敷設工事の際に発見された、山陽町熊崎に住まわれる、佐倉淳夫氏がこの附近から頸鏡1面を発見されたと伝えられているが、はたしてこの土壤もしくは本遺跡に伴なうものかどうかは、現段階ではわからない。

第9土壤

第8土壤の北約1mで第8土壤に直交した形で立地し、その西端は第10土壤と切り合っている。東半部を道路によって切断されている。掘り込み上面の長さは推定240cm、巾100cm、床面の長さ192cm、巾76cm、深さ平均35cmを測る。中心やや西よりから西方にかけて数個の石材が検出されたが床面よりは遮蔽した状態であった。

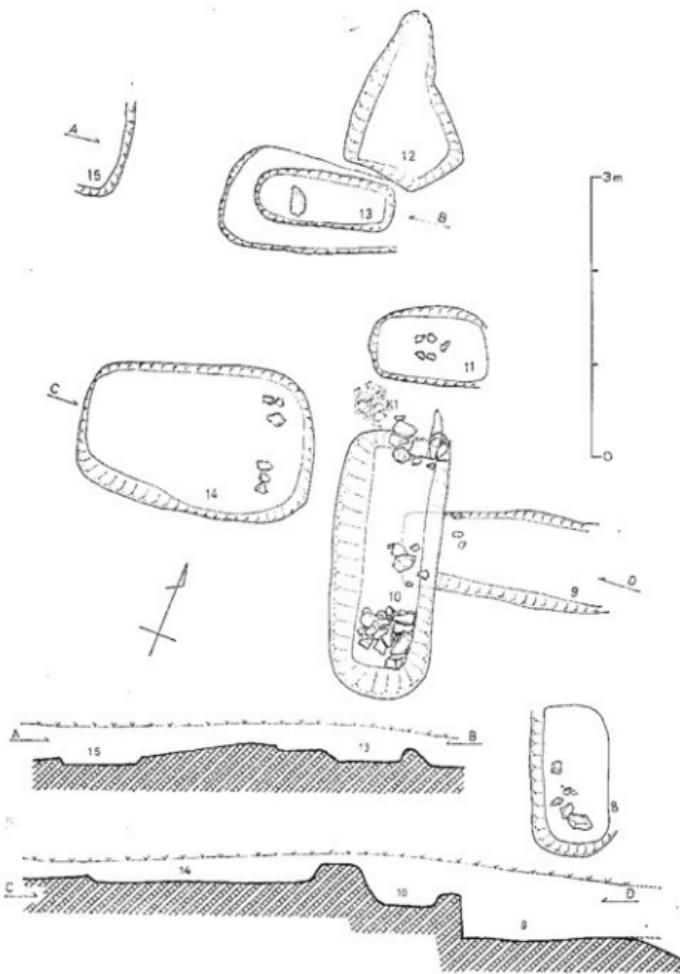
第10土壤

第9土壤とT字形に切り合った土壤で長軸をほぼ南北にもつ。この土壤は南北両小口部を、床面から地山掘り方上面まで、人頭大の山石をもって積みあげ、第33土壤の配石と共に、本遺跡内の他の土壤とは異なった特徴をもつ(図版3)。

土壤の掘り込み上面の長さ275cm、巾95cm、床面の長さ245cm、巾162cm、小口石積み内法距離160cm、深さ平均34cmを測る。床面はほぼ水平で、長方形につけられた部分的にはあるが、ほぼ全城にわたって朱が塗められた。この床面上から、小鉄器片2が発見された。一つは床面北小口石材端から約40cmの中心線上、他の一つは南西小口部石材に接しての出土である。

この土壤では、両小口部の石材の間に、中心部においても4個の石材が検出されたが、これは床面から約27cm上位に浮いた位置にあるため、強いていえば土壤埋土の上方に置かれた可能性もある。

土壤掘り方西北端に接して、地山上面に突起を有する特殊窓が土圧によって破損された状況で一



第9図 8~14 土壌実測図

括して検出されたことが特筆される。切り合った第9土壤との先後関係は、第10土壤床面で検出される朱の広がりが、第9土壤の上部でも認められることから第9土壤の方が先行するものと考えられる。

第11土壤

第10土壤の北側約50cmのところに、第9土壤と平行方向につくられた土壤である。第9土壤と同

様道路によってその東半を削り取られているため、その長さは不明である。巾は掘り込み上面で80cm、床面で70cm、深さ21cmを測る。床は水平で隅丸長方形である。床面中央よりやや西にいたところに枕石状に5個の拳大の平石が検出された。

第12土壤

このグループ北端に立地する。南側部を第13土壤とL字形に切り合っている。土壤の東側を道路によって削り取られているが、それでもかなり不整形な土壤で、平面プランで三角形状をなしている。床面も他の土壤に比して、水平とはいえない。あるいは、たがいに切り合った2つの土壤とも考えられるが、現状では確かめることができなかった。掘り込み上面での長さ175cm、巾最大130cm、平均77cm、床面の長さ160cm、巾最大102cm、平均50cm、深さ平均21cmを測る。

第13土壤

第12土壤の南で僅かな切り合いをみせ、長軸をほぼ東西におき、二重の掘り方をもった土壤である。掘り込み上面で外側長215cm、巾108cm、内側長150cm、巾65cm、深さは最深部で14cmを測る。床面は地山の傾斜に従ってかなり傾斜し、ややおうとつもみせ、形状も、東小口部は角形西小口部は半円形と不規則である。この土壤直上、中央よりやや西寄りの中心線上に、30cm×20cm大の板石が検出されたが、床面から約21cmの上位表土層にあるため、当土壤との直接の関連性は不明である。

第14土壤

第10土壤の北西隅から西に向けて立地する巾広の土壤である。掘り込み上面で長さ245cm、巾155cm、床面の長さ230cm、巾145cm、深さ10cmを測る。床面は平らであるが、長軸線にそってやや西に下降する。西小口部が丸味をもつ長方形を呈する。床面東壁から約30cmのところに、長軸中軸線をはさんで左右に夫々3個の山石を用いた枕石が置かれ、その部分に朱の広がりが認められた。

用木古墳群第4号墳の例もあり、この石を枕として、遺体を安置したとすれば、この土壤では、2遺体を並列して埋葬したものと考えられる。本遺跡の場合、一つの土壤内に、西小口部に夫々頭を置き、差し違えた形での複数埋葬の例は数例認められたが、このような2体並列埋葬は、本土土壤のみである。

第15土壤

第13土壤の西端から約1.3m西に第15土壤がつくられ、そこから西へC溝状遺構に向けて、北面する傾斜面の同一等高線上に3基の土壤が立地している。

第15土壤は、地山の傾斜する方向に長軸をもって掘り込まれているが、斜面低位にあたる北半部は床面まで流失の影響がおよんでいる。したがって、その全長は計測できなかった。現存長は床面で75cm、巾70cm、深さは南壁部で25cmを測る。床面はほぼ平らであるが、北に向けてやや下降を示

す。形状は開丸長方形と推察されるが明らかでない。土壙内において奈大の山石1個を検出したが床面から約8cm上位に浮いているため、この土壙に伴なうものかどうかは不明である。

第16土壙

第15土壙の西に少し南にずれてはいるがほぼ平行につくられた土壙で、これまた北半は床面まで流失している。床面現長で約60cm、巾60cm、深さは南壁部で16cmを測る。床面は北に向って下降するが全体として不整然である。形状については第15土壙と同巧のものである。

第17土壙

第16土壙の南西側から、長軸をほぼ東西において掘り込まれたものである。掘り込み上面の長さ170cm、巾95cm、床面長165cm、巾94cm、深さ7cmを測る。床面はほぼ平らであるが、西に少し下降する。形状は不整形な長椭円である。床面近くに3個の石材が検出されたが、若干浮きあがっていた。

第18土壙

B遺構の南端部、丘陵尾根から北にゆるやかに下降する傾斜面に、第18土壙から第24土壙の7基が集中してグループを形成している(図10、図版4)。このグループは規模および形状とともに共通した特徴をもつ。

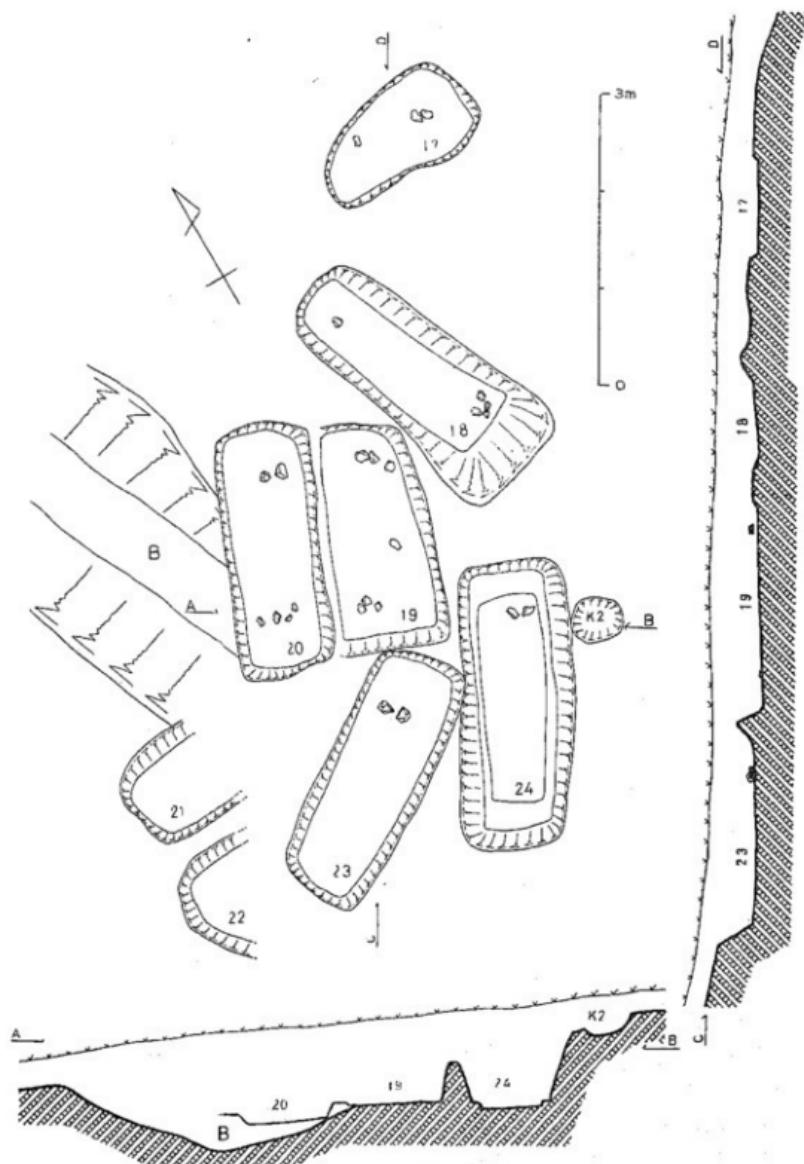
第18土壙は、このグループ最高部に位置し、先の第14土壙との距離約3.4mである。尾根に対し直交し、長軸は約30度西にふっているが、ほぼ南北につくられている。地山掘り込み上面長280cm、巾110cm、床面長226cm、巾69cm、深さは斜面につくられているため一定でなく、斜面高位にあたる南端で55cm、北端では殆ど深さはなく、からうじてその輪郭を確認できる状況である。床面は水平で長方形を呈する。床面の両小口部に、長軸線を左右にふりわけた形で夫々枕石が1対置かれ、共にその周辺部床上に朱の広がりが検出された。この石材を枕として遺体を安置したと考えた場合、本土壙には、南と北に夫々頭を置き、差し違えた形で二遺体が埋葬された可能性が強い。

第19土壙

第18土壙の西側壁のはば中央部に北東隅を僅かに切り合い、約45度の方向に長軸線をおき、第20土壙と並列して存在する。この2土壙の床面は、第20土壙の方が約20cm低位にあって、第19土壙の西壁を切っているため、一見して階段状を呈している。

土壙掘り込み上面の長さ232cm、巾108cm、床面の長さ215cm、巾95cm、深さは最深部33cm、平均25cmを測る。床面は水平、やや不整形ではあるが長方形である。床面両小口部に、夫々3個の山石からなる枕石が、中心線の左右に差し造えて置かれ、部分的ではあるが朱の広がりも認められる。枕石間の距離は中心点で150cmである。本土壙床面からは、鉄製錐1点が出土した。

第20土壙



第10図 18~24 土 壤 実 測 図

第19土壙の西側壁部を切りながら、それと平行して掘り込まれた土壙で、前者とはほぼ同巧同大である。床面西南部は、B造構掘り方直上におよんでいるが、床に朱が認められB造構がある程度埋もってから後につくられたものと推考される。掘り込み上面の長さ252cm、巾92cm、床面の長さ235cm、巾80cm、深さは最深部で16cmを測る。床面は水平で長方形、枕石は差し違えた形で両小口に各1対を置き、その中心点距離は140cmである。床面ほぼ中央部、長軸線よりやや東に上ったところに鉄製錐1点と、土壙掘り方理土中より石錐1点が出土した。

第21土壙

第20土壙の南西隅から、地山傾斜面に沿って、長軸をほぼ東西にもって第22土壙と並列して存在する。ここはB造構の南端部にあたり、後世の水路とも重なって、土壙東半は流失して、かろうじてその存在を確認できる程度である。したがってB造構との先後関係等はつかみ得なかった。

土壙の長さは不明で、巾は掘り込み上面で110cm、床面で90cm、深さ20cmを測る。

第22土壙

第21土壙の南に平行につくられている。第21土壙と同様、東半部は消失している。本来は第23土壙と切り合うと考えられる位置をしめている。長さは不明。掘り込み上面の巾は96cm、床面で80cm、深さ20cmを測る。

第23土壙

東端部を第19土壙および第24土壙と僅かに切り合い、約30度の角度をもって存在する。掘り込み上面での長さ259cm、巾95cm、床面の長さ248cm、巾84cm、深さ23cmである。床面は水平で長方形を呈する。枕石は東小口部、長軸線上に1対を置き、部分的に朱が認められる。切り合った土壙との先後関係は不明である。

第24土壙

このグループの最南、丘陵尾根近くに立地する。第19土壙の南東隅に北西端をおき、第19土壙と同方位を示している。そこは第1土壙の西1.5mもある。

他の土壙にくらべて深く掘り込まれ、壁も垂直に近い。底部も二重掘り方となって、四周に段をもっている。最深部で83cm、現表土からは約100cmとなる。本土壙の東北に接して、地山に掘り込まれた壺棺(K2)がその出土状況からみて、本来なら現地表より10数cm高いことから推して、本土壙はもと120cm内外の深さであったろうと考えられる。

掘り込み上面での長さは285cm、巾118cm、段部上面の長さ224cm、巾74cm、床面の長さ210cm、巾56cm、段上面からの深さ6cmを測る。床面は水平で長方形に掘られ、床面には朱の広がりと、枕石1対が北小口部東よりにおかれている。更に土壙掘り方直上、ほぼその中央に窓坏、増等数個体の土器が一括して置かれている。遺物の項でふれるように酒津式併行のものであることから第24土壙の時期は自から明らかである。

第25土壤

第22土壤の西に少し離れて、第26土壤とL字形に並んで立地する(図11)。この2基は本遺跡中ではやや大型で、地山を掘り込んだ土壤の中に枕石をわき、そのまわりを更に地山マサ土で埋め戻した状態の二重掘り方をもつ。

第25土壤は尾根稜線に直交し長軸をほぼ南北においている(図版5)。地山掘り込み上面で長さ220cm、巾90cm、床面の長さ195cm、巾62cmを測り、床は平面で長方形を呈する。深さは平均38cmである。床面小口部に各1対の枕石を長軸線の西に片寄せておき、床一面に朱が認められた。枕石中心間の距離は165cmである。

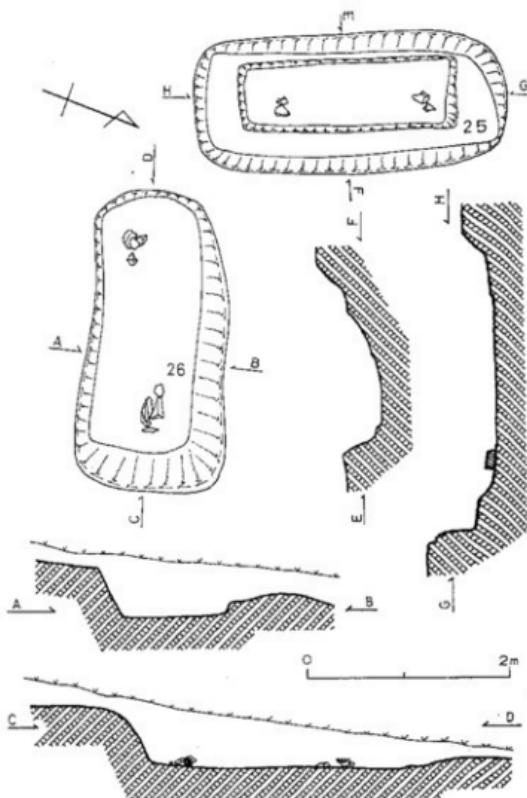
第26土壤

第25土壤の北西側から、直交して西方に存在する。形状は第25土壤とほぼ同様同大である。地山掘り込み上面の長さ296cm巾138cm、床面の長さ264cm、巾108cm、深さ平均48cmを割る。床面は水平で長方形を呈し、東西の小口部に夫々1対の枕石を置いている。枕石は西部は長軸線上、東部は長軸線よりやや北にずれ、いわゆる差し違いの形となっている。中心点間の距離は155cmである。床面には部分的に朱が認められ、西枕石に接してその西方に鉄製の短剣(または槍先)が、長軸線に直交した形で副葬されている(図版5)。

第27土壤

第26土壤から南へ尾根稜線を越えて、南西する斜面に、第27土壤～第31土壤、第38土壤～第40土壤の8土壤がグループをなして立地している(図12)。

第27土壤は、このグループではいちばん尾根稜線に近く、尾根に直交して長軸をほぼ南北におい



第11図 25.26 土壤実測図

でつくられている。掘り込みの上面および床面とも整然とした長方形に掘り込まれ、第33土壇の配石基を除いては、本遺跡中で最大の規模をもつ。

掘り込み上面の長さ 315cm,巾 136cm, 床面の長さ 284cm,巾 121cm, 深さ48cmを測り、かなり垂直に掘られている。床面は水平で部分的に朱の殘存が認められ、土壇長軸線の南北にそれぞれ1対の枕石が置かれている。その中心点距離は 150cmである。

第28土壇

第27土壇の南約 1.7mに掘られた小土壇である。長軸をほぼ東西におき、掘り込み上面の長さ64cm,巾48cm, 床面の長さ55cm,巾33cm, 深さ平均19cmを測る。床面は水平で開丸長方形を示し、枕石等その他の遺構はもない。

第29土壇

第27土壇の南東隅約50cmに北西隅をおいて、第27土壇と直交する方向につくられている。斜面に掘られ、西部に広く、東方に狭い掘り方平面を示す。掘り込み上面の長さ 200cm, 中心部で 115cm, 床面の長さ 186cm, 中は中心部で 100cm, 深さ最深部で35cm, 平均20cmを測る。床は水平につくられ、ほぼ中心線上四小口に近く、枕石 1 対が置かれている。

第30土壇

第27土壇の東側壁北寄りのところから、約80cmに掘り込みをもち、第31土壇と隣接してつくられている小型の土壇である。長軸線は第27土壇と平行し、開丸長方形の平面形を示す。掘り込みは二重掘り方で、床面のまわりに浅い段をもっている。掘り方上面の長さ 124cm, 中 100cm, 段部掘り込み上面の長さ81cm, 中72cm, 床面の長さ75cm, 中65cm, 深さ平均17cmを測る。

床面は平らにつくられ、その長軸線上北小口部に、掌大的山石 2 個を用いた枕石 1 対が置かれているが、更にその長軸線上中心部に 3 個の石材が枕石状、前者に直交する形で検出される。これは二重掘り込み段状にみえるが、あるいは、二基の土壇が直交して切り合ったものかも知れない。

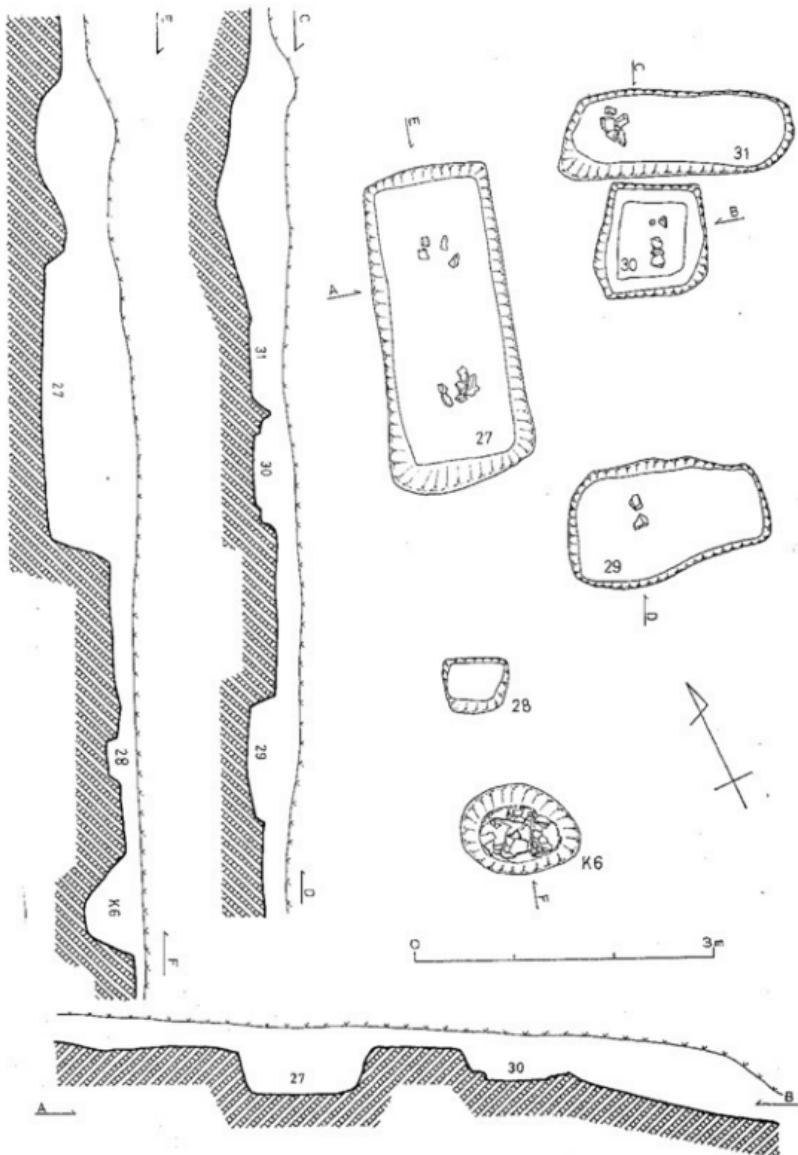
第31土壇

第27土壇の北東隅から東へ約50cmに西南角をおいて、第30土壇と並んで存在する。丘陵傾斜面低位にあたる東端部は若干流失しているが、原形はほぼ推定できる。掘り込み上面の長さ推定 215cm, 中85cm, 床面の長さ 205cm, 中75cm, 深さ平均12cmを測る。床面は水平、開丸長方形につくられ、長軸線上小口部に枕石 1 対が置かれている（図版 7）。

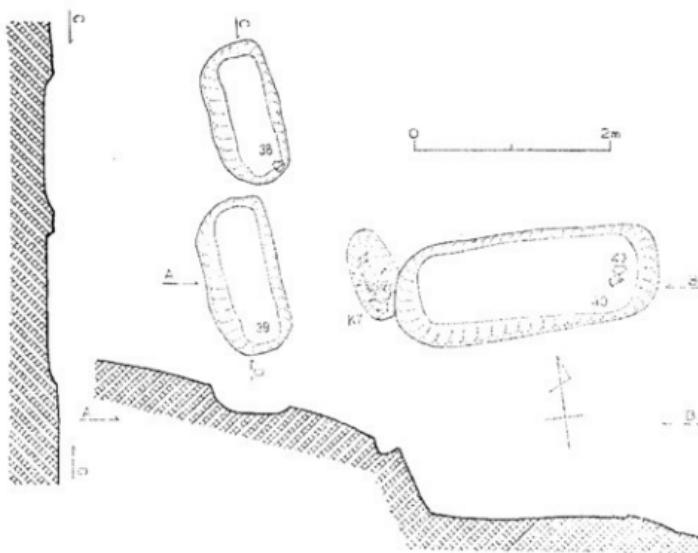
第38土壇

このグループの西南隅、丘陵尾根がやや傾斜を増したところに、第39土壇と直列状に存在する（図版 13）。

長軸を斜面に沿って南北におき、掘り込み上面の長さ 146cm, 中80cm, 床面の長さ 119cm, 中43



第12図 27~31 土 壤 実 測 図



第13図 38~40 土 墓 実 測 図

m, 深さ平均18cmを測る。掘り込みの平面形はやや不整形な凹丸長方形, 床面の長軸部はほぼ水平であるが, 横断面は中心が深い円弧状を呈する。床面南東隅に2片の土器片, および北東掘り方地面上に1個体の土器が一括破砕した状態で検出された。

第39土壙

第38土壙の南に直列状に位置する。形状はかなり不整形な長椭円形を呈する。掘り込み上面の長さ 163cm, 深さ平均15cmを測る。床面の長軸線はほぼ水平であるが, 横断面はゆるい舟底形を示す。

第40土壙

第39土壙の東方約2mに西端部をおき, そこから東へ長軸を有する土壙である。掘り込み上面の長さ 230cm, 幅 110cm, 床面の長さ 227cm, 幅78cm, 深さ最深部は西小口壁で65cm, 平均44cmを測る。床面はほぼ水平につくられ, 小口部が丸味をもった長方形である。東小口部長軸中心線上に3つの山石からなる, 枕石が1対置かれている。

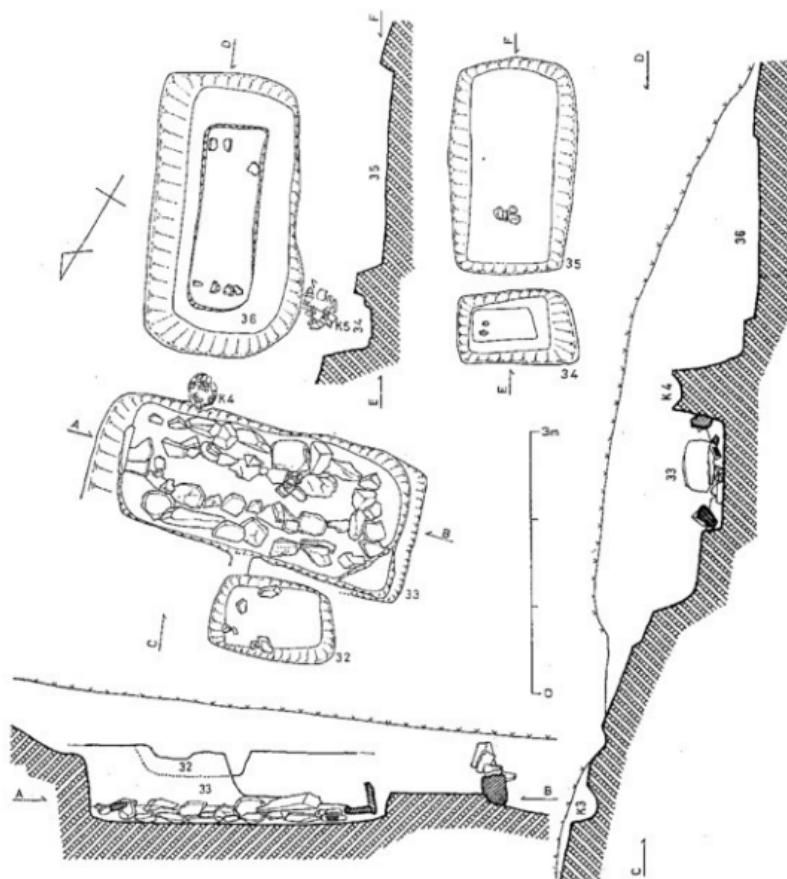
第32土壙

本遺跡の中心部, 第2土壙から南に傾斜する斜面に第32土壙から第36土壙までの5基がグループ

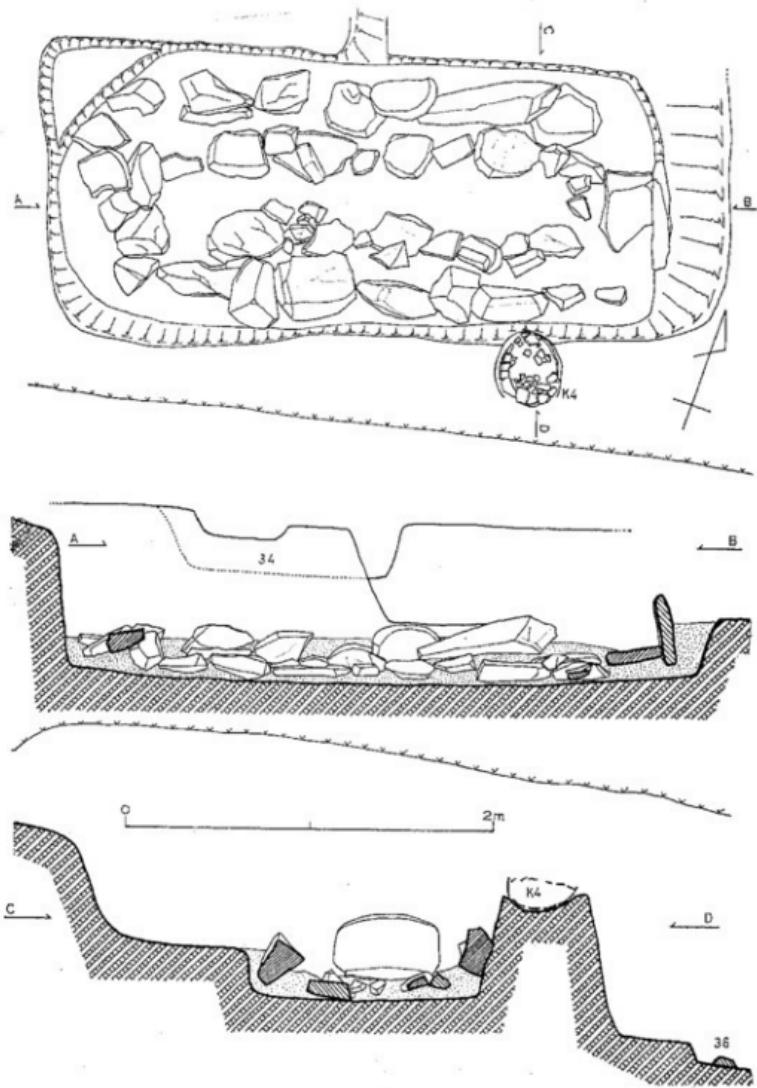
をつくって存在する(図14)。第32土壤は、その北端斜面上位にあり、第33土壤と並列する。長軸は地山斜面に沿ってほぼ東西におき、掘り込み上面の長さ144cm、巾95cm、床面の長さ144cm、巾54cm、深さ平均38cmを測る。

床面は水平で長方形を呈する。掘り込み埋土中から床面にかけて数個の石材が検出されたが、枕石等の床面施設ではないという他は、その用途については不明である。

第33土壤



第14図 32~36 土 壤 実 测 図



第15図 第33 土 壤 実 测 図

第32土壇のすぐ南に立地し、一部で第32土壇と切り合っている。掘り込み上面で長さ365cm、巾160cmと本遺跡中最大のものである。土壇底部は扁平な山石を用いた配石基となっている。すなわち、長軸中心線にあたる部分を約15~25cmあけて、左右に各1列の石を敷き、その外側1段高いところに更に各1列、計4条の石列をおき、両小口部の東は平石を立てかけ、西は側壁部と同様、2段に石を配した形態である。いわゆる石室の石積みとは異なる構成を示し、長側壁の構築法は構造的には堅穴式石室の祖形ともいいうるものである（図15、図版6）。

土壇底部は、長さ336cm、巾136cmの長方形を呈し、壁部はかなり深く垂直に掘り込まれ、地山掘り込み上面から91cm、現地表面から中心部で約140cmを測る。配石内法の長さ321cm、巾86cmである。床面東小口部の中心線上に2個の石材からなる枕石が置かれていた。

第34土壇

第33土壇の南西端から約1mに東北端をおき、地山等高線と直交して、第35土壇と直列状に存在する小型の土壇である。長軸をほぼ東西におき、第35土壇と直交するように感じられるが、この長軸と第35土壇の横巾が等しく、2基の土壇が接する部分の壁は共用して掘り込まれた形跡があり、この両者の関係の近さを暗示しているかのようである（図版7）。本土壇は小型ながら底部で二重の掘り方をもち、床面のまわりに段が認められる。掘り込み上面の長さ72cm、巾35cm、床面の長さ68cm、巾30cm、深さは掘り込み上面から床まで、最深部55cm、中心部37cm、段上から床の深さ5cmを測る。床面は水平につくられ、隅丸長方形を呈し、東小口部中心線上に土壇規模に合せて、小さな枕石1対が置かれ、部分的に朱の残存が認められた。

第35土壇

第34土壇の南に接して平行に小口をおき、南に長軸線をもった土壇である。第34土壇と掘り込み上面の地山巾は21cmである。当地の地形が南面するかなりの傾斜をもっているため、北に深く南に浅い掘り方を示し、南端部の一部は床面まで流失している。床面推定長185cm、掘り込み上面巾116cm、床面巾101cm、北小口壁部の深さ34cm、中心部の深さ23cmを測る。床面は水平で長方形を呈し、北小口寄りの中心線上に4個の石材を用いた枕石1対が置かれ、部分的に朱の残存が認められた。

第36土壇

第33土壇南東隅に北東角をおき、それと長軸線を直交する方向、すなわち南北に向けて存在する。掘り込み上面の長さ322cm、巾130cmと大型の土壇の底部に更に掘り込みを有する二重掘り方の土壇である。段部掘り込み上面の長さ213cm、巾65cm、床面の長さ206cm、巾65cm、深さは北小口壁掘り込み上面から床面までが最大95cm、中心部で60cm、段上と床面の深さ中心部で13cmを測る。床面は水平で長方形。南北の両小口部に尖々1対の枕石が、対角線上に差し違えた形で置かれ、更に北小口に整然としないが1対と考えられる石材も存在している他、部分的に朱の残存が認められる。床面中央付近から管玉、南枕石付近からガラス小玉の各1点が検出された。

第37土壤

第32土壤の東 3.2m, 第6土壤の南 2.3mに西小口壁をおき, そこから東南東に長軸線をもって存在する。当地は, 丘陵尾根に沿って, 西上する林道掘り割りの北崖部にあたり, 土壌南北部は切り取られている。床面推定長 108cm, 幅40cm, 程度の土壤であったと考えられる。深さは中心部現存で16cmである。床面は水平で長方形であったらしい。形状から推して, 第1~第7土壤の第1グループに近いが, 現況では不明である。

第41土壤

第39土壤から約 5.5m西に離れたかなり急傾斜の丘陵尾根稜線上に一基だけ独立して存在する。本遺跡土壤群中西端である。長軸線をほぼ北東におき, 地山に掘り込まれている。平面形, 断面形共かなりでこぼこがあり, 他の土壤ほど整然としていない。掘り込み上面の長さ 230cm, 幅 104cm, 床面の長さ 192cm, 幅72cm, 中心部の深さ17cmを測る。

[2. 土器棺]

当遺跡からは, 先に述べた土壤群のほかにK 2からK 7まで, 6基の土器を利用した埋葬施設を発見した。個々の土器の特徴については, 後章の出土遺物の項で記述するので, ここでは, それらの出土状況についてのみ記すこととする。

K2. (図版11-1)

第24土壤の, 東側壁掘り込み線の北東隅に近い土被掘り方外東方に位置する。壺と鉢, 各1個の土器を合せ口に組み合せて棺としている。棺身部にあたる壺の口縁部を水平より約35度上向きとなるように安置し, それに鉢形の土器を蓋として用いたものである。棺の長軸線は東30度南で, 身部口縁が尾根稜線上に向っている。

この土器棺は調査に先立つ立木の伐採と, 清掃作業の段階で, 熊手の先にかかって発見したものである。発見において, すでに上面する壺肩部および蓋となっていた鉢の底部は, 現地表より上位となり, 破碎散逸しており, その割れ口が現地表面にリング状の輪郭をみせていた。本来こうした壺棺の類は, すべて地下に埋没葬送したものであり, 当遺跡の表土層が, 営造時にくらべてかなり流失して, その高まりを失なっていることが想定される。

土器棺を納める施設としては, 地山に土器棺の形状に合せた, 縦42cm, 横35cm, 深さ12cmの楕円形の小土壤と, 壺棺内に16×13×9cmの山石1個が検出された他は, 何も認められなかった。

棺を納めた小土壤は, 現状では, 棺身部となる壺の底面から約3分の1を納めた形態を示しているが, 掘り込み線は現存地山生き土の上面になって, 初めて確認できるのであって, 表土層の流土のことなどもあり, 明らかにできなかった。このことは土壤掘り方と棺との関係については, 以下の土器棺についても共通していえることである。

K3. (図版11-2)

第2土壙と第32土壙の東隅を、直線で結んだほぼ巾詫の丘陵尾根稜線に近い南西した傾斜面に位置している。棺は平底の甕1個で構成され、地山掘り込み上面で52cm×45cm、深さ約18cmの、いわゆる鶴卵を模に半裁した形状をもつ小土壙内に納められていた。甕は完形のものがその場で土圧等によって破砕押しつぶされた形状をもって発見された。長軸を傾斜面等高線に直交し、口縁部を尾根稜線に向けている。発見時の現状から推して、ほぼ水平に横倒しにした形で埋納されていたものと考えられる。

K4.

第33土壙と第36土壙がL字形に接して掘り込まれているが、その面上地山掘り込みは、地山上面で約30cmのベルト状に残されている。K4はこの堤状に残された地山面に、僅かな掘り込みをもって位置していた。第33土壙は大型土壙内に配石をもち、また第36土壙は二重掘り方で底部に段をもつ。更にK4の位置は、第36土壙の長軸中心線上にあたり、第33土壙の掘り方と一部切り合うなど、あるいは、このいずれかの土壙の葬送祭祀に伴なう土器としての可能性ももっている。しかし当土器と等質のK5が、管玉を出していること、および当土器を納めるために地山面にまで達する掘り込みを、意識的におこなっていることなどから、土器棺として扱うこととした。

土器は土圧等によって復元不能の状態に破砕していたが、底部を下に直立した形で置かれた平底の壺である。

K5.

第36土壙の北西隅に接して、地山斜面の上面に僅かの掘り込みと共に位置する。すでに破碎散逸が著しく、調査時においては、底部にあたる部分のみが10数片の一括破片となって見出された。平底の壺または甕と想定されるが、その形状は不明である。この上器底部から、碧玉製の管玉1個を発見した。

K6. (図版11-3)

本遺跡の西南端に近い第40土壙の西北隅から、僅かに北寄りの東西する傾斜面に位置する。大型の壺の口縁部を削って棺身とし、それに鉢型土器を蓋として合せ口にかぶせたものである。壺と合せた約40cmの深さの小土壙を掘り、口縁部を水平面から約20度上向きに置いていた。土圧等によって押しつぶされていたが、調査時、現地表に露呈散逸していた鉢型土器の底部を除いて、ほぼ完全に復元できた。

K7.

第40土壙の西小口部に接して、その外法地山間に、長楕円形の小土壙を掘り込み、その中に土師器甕3個を直列状に組み合せて作った棺である。両端に合い向く形で甕をおき中央にあたる甕の底を抜いて連結している。長軸線を等高線と平行にはば南北におき、ほとんど水平に置かれていた(図13、図版13)。

この土器棺の中央部に須恵器坏が1個、ふせた形で置かれていたのが注目された。K2～K6の土器棺は酒津式併行期のものを中心としているのに対して、本棺は、群集墳盛行期のものである。本遺跡が本棺の時期まで継続的に埋葬が行なわれたとするよりも、G3号墳との関連において、後世の埋葬として考えた方がより妥当のようである。

〔3. 溝状遺構〕

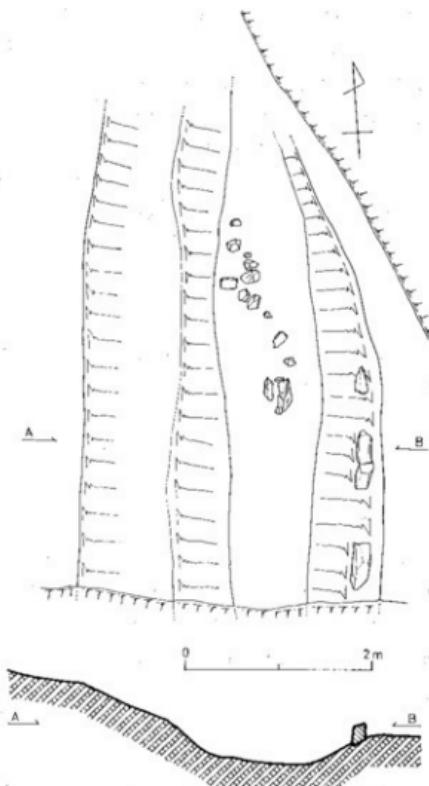
当遺跡の土墳墓群の外縁部を取り囲むように、4つの溝状遺構がある。これらは溝状とはいってもいわゆる溝ではなく、抛物線状の断面をもつ長大で夫々が完結した掘り込みである。

A溝状遺構

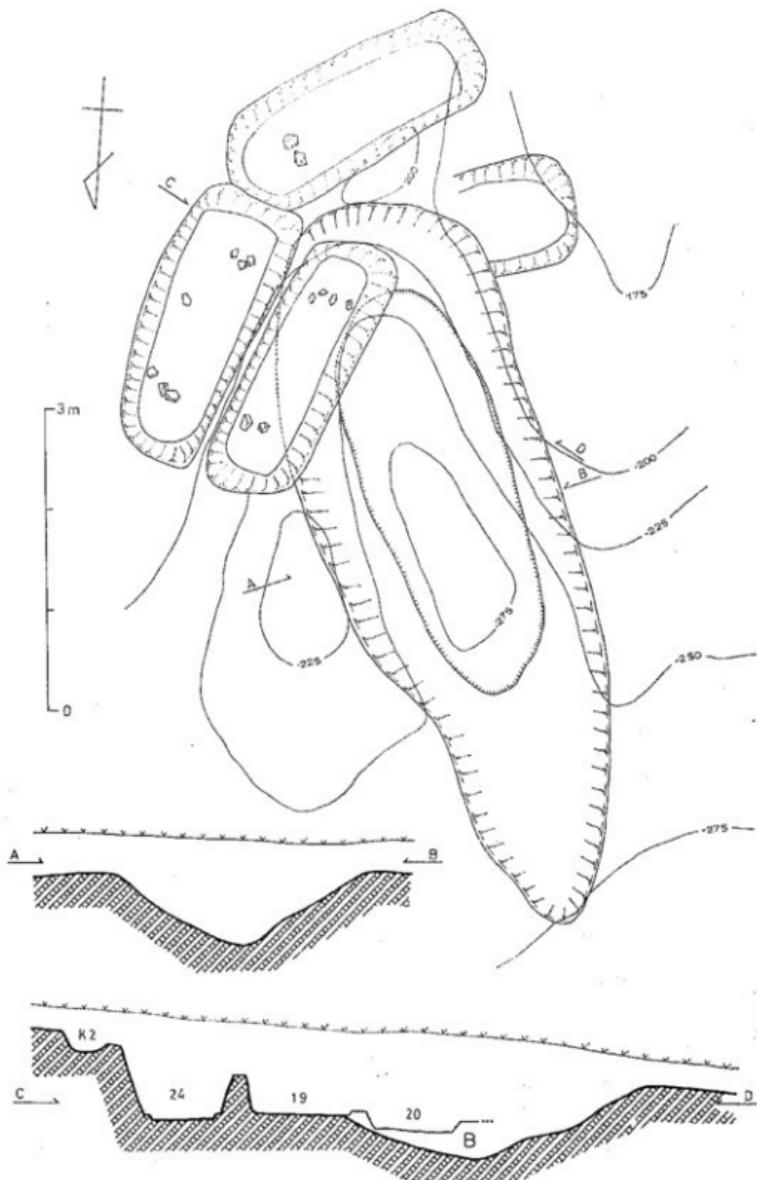
当遺跡の南東部に位置し、東へ延びる丘陵尾根棱線を、それと直交して南北に切り込んだ遺構である。そこは西から東へゆるやかに下降してきた尾根が、また高まりを増して更に東方に伸びて鞍部をつくる接点でもある。

遺構は長軸線をほぼ南北にして、細長い楕円形の平面を示すが、夫々南北両端を林道によって若干部切斷され、完形を残していない。地山掘り込み上面での推定長約7m、中心部の巾3.32m、中心部の深さ55cmを測る。掘り込みの断面はゆるやかな抛物線状を呈し、底面部中央に巾1m、長さ4.5mの帯状の平坦部をもっている。(図16、図版8-1)

各土壇の埋土が、有機質を含まない地山マサ土で埋め戻されているのに対して、この溝状遺構は、いわゆる弥生包含層特有の灰黒色をした有機土で埋土していた。遺構内では、かなり上層からも土器片が散見されたが、溝底部に最も多く、土器縮り状をなして土器片が発見された。これらの土器片は細片となっているものが多く、互いに接合しあえるものは極めて少量であった。したがって、完形品がこの遺構内において、土圧等の自然的影響によってこわれたものではなく、すでに破片となった土器片が、この遺構内にはいったものと考えられる。弥



第16図 A溝状遺構実測図



第17図 B 溝状遺構実測図

種類した土器片を各器形毎に分類、検討した結果、当遺構内には少なくとも、高壺22、台付直口壺2、特殊壺1、特殊器台2、鉢1、壺4、甌4を含む壺または甌11、須恵器壺1の計45個体以上の土器が埋没していたこととなる。

この溝状遺構には、土器片の他に人頭大の山石が約20個見出された。この地域は花崗岩の風化土で、この石材を伴なわないと、意識的に当遺構まで持ち運んだものである。これらの石材の便益については明らかにできなかったが、溝状遺構東側の地山掘り方の肩部に直列状に5個が検出された他はすべて、底部に不規則に落ち込んだ形状を呈していた。

B溝状遺構

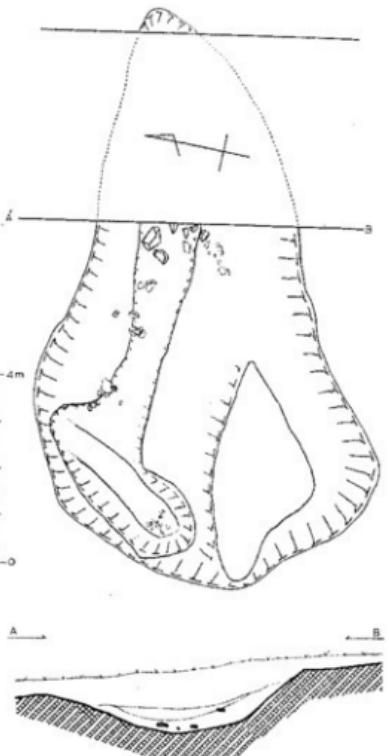
第19土壇を中心とした土壤支群からほぼ北に長く掘り込まれた遺構である（図17、図版8-2）。北面する傾斜面の等高線に対して、直交する形でつくられている。遺構南東部隅で第20土壤と切り合い二重となっているが、第20土壤の床面およびその直上の朱の広がりが、当遺構の上にまで延びていることから明らかなように、第20土壤に先行し、土壤が菅造される段階ではすでに埋没していたことを示している。

地山掘り込み上面の平面形は、やや直線ではあるが長楕円形を示し、長さ7.2m、最大巾2.4m、深さは傾斜面に掘られているため一定でないが、中心部で約70cmを測る。断面形は縦横断とも抛物線状を示し、舟底形の底面をもつ。

遺構内の状況は、ほぼA遺構と同様であるが、埋土の中に僅かではあるが朱が広がって面をもつ列が、順序的に3例確認されたこと、埋土中に多量の炭を見出したこと、枕石状やコの字状に組みえたと推察できる石組みが、2例検出されたことなどが注目された。

出土土器を検討の結果、高壺6、壺または甌7、壺1、鉢1、甌1の個体数を確認できた。他の3溝状遺構にくらべて、後世の土器を伴なわず、ほとんど単一時期の土器で構成されていること、特殊器台、特殊壺を伴なわない特徴をもっている。

C溝状遺構



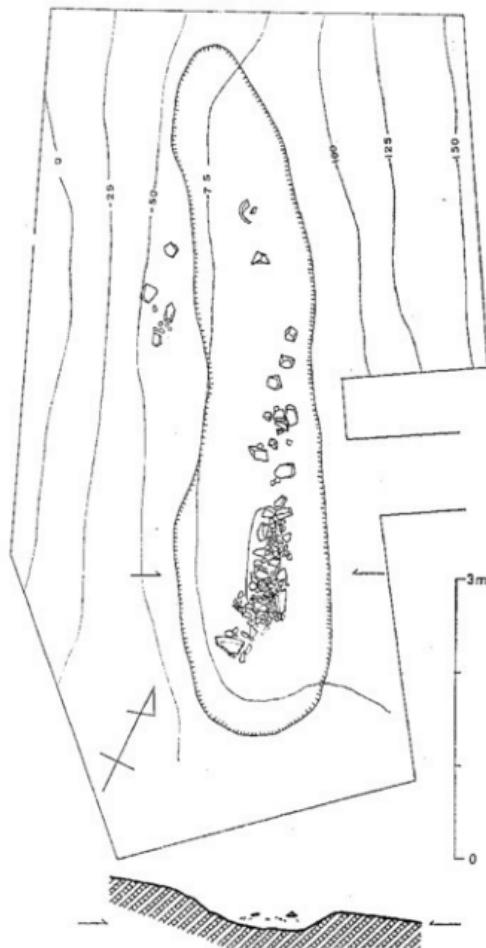
第18図・C溝状遺構実測図

当遺跡の東端部を画する位置にあり、北に向って延びる丘陵尾根稜線と東西に直交して、大きく掘り込んだ遺構である（図18、図版9—1）。遺構東部上面に、南北に通る仮設道路があつて、全掘はできなかつたが、道路東方においてその末端部がおさえられ、ほぼその全容を知ることができた。

C遺構は当遺跡で発見した4溝状遺構の中では最大の規模をもつが、その形状は、他とくらべてかなり不整形である。地山掘り込み上面で最大長12m、巾6mを測る。溝状底部は、かなりのおうとつをもち、部分的には更に溝状に深くなっているところなどもあって、整然とはしていないが全体としては、地山斜面の最低位にもあたる西端部にかけて、より深くなり、横断面はほぼ抛物線を示す。最深部で現地表下2.8m、掘り込み上面から1.08mを測る。

掘り込み内の埋土状況は、底面部から約40cmは、黒味の強い暗灰黑色の有機土層、その上方に約20cm巾でベルト状に暗灰色有機土層となり、地山マサ土の黄褐色土層約80cmが最上層となっていた。

遺物は、上層部からも土器片が散見されたが、最も多く出土したのは、最下層の暗灰黑色有機土層から底面にかけてであり、底面には土器埋り状を示していた。土器片は酒津式併行期のものが圧倒的に多いが、中には群集墳盛行期の須恵器片若干を含む。仮設道路敷を掘り廻しているため、この溝状遺構の土器のすべてを検討することができなかつたが、高环66、特殊壺2、特殊器台3、鼓形器台1、小器台4、壺または壺14、瓶2の他、須恵器环2、回窓2、壺1、と少なくとも总数89



第19図 D溝状遺構実測図

個体以上の土器が検出され、4溝状遺構中最多量である。中でも遺構西端部底部から、ほぼ完形に復元できる鼓形器台1個体が、一括破片となって発見されたこと、および他の個体にくらべて、高壊の多いことが注目された。

土器片の他に当遺構底部およびそれから数cm上方から約20数個、人頭大から拳大にかけての山石による石材が検出されたが、これらは規則性を示さず、その使用目的は明らかにできなかった。

D溝状遺構

当遺跡の東端部、丘陵平坦部が谷に向って斜面角度を増す肩部に位置する。そこは東と北に夫々分岐して延びる、丘陵尾根によってつくられた谷頭頂にあたり、距離にして約30mの直下の谷には、弥生後期（上東）、古墳時代（5世紀）の土器を伴とする堅穴住居址群が存在する。

遺構は地山等高線と平行に長軸をもった細長で、北-30°一西に掘られている（図19、図版9-2）。地山掘り込み上面で長さ6.3m、巾1.8m、深さは中心部で約50cmを測り、船底の底面をもっている。現地表面から地山掘り込み上面まで約80cmは地山マサ土で埋土していた。

遺構内底面部は、他の遺構とほぼ同様に帯状の土器溜りと、石材が検出された。出土土器片内に、須恵器など含まないこと、および特殊壺、特殊器台の破片をかなり多く含んでいることが注目された。土器片を分類検討した結果、壺環12、台付壺1、特殊壺2、特殊器台3、壺または甕5、の最底数23個体以上の土器が埋まっていたと考えられる。

〔4. その他の遺構〕

本遺跡内発見の遺構のうち、今までふれていないが、これとほぼ同時期のものと考えられた石材を用いた遺構が2か所見出されている。

一つは、A溝状遺構の南、第33土壙の東にあたる部分に、角礫を用いて約1.2m、列石状に並べられた石材である。第33土壙の東小口部の掘り込み線から東へ55cmの距離にあり、面を東に向け、第33土壙の長軸線と直交に組まれていることから、あるいは第33土壙に伴なう施設とも考えられるが、現状ではその用途については不明である。

いま一つは、第1土壙と第2土壙の南および南北小口部近くの地山面に、約20個の人頭大の山石を径1m位、高さ20cmくらいの規模で無雑作に積みあげた状態で置いていた。何らかの作意を持って置かれたのではあろうが、これについてもその目的は明らかにできなかった。

4. 出土遺物

本遺跡出土の遺物は、直接土壤内に埋納されていた小鉄器および玉類、土器柄、特殊壺、器台等の土器片、そのほか遊離出土の石器、古錢等である。

各遺構の年代決定のきめてとなる土器について、その出土状況による遺構との相互関係をつかもうと努力したが、本遺跡の場合先にも述べたように流土が薄しく、若干の例を除いた他の多くは磨耗した細片となって、表土層中に遊離した状態で発見された。土器片は各発掘区とも平均して散見され、表土層出土土器片総数は約750片をかぞえたが、各溝状遺構出土の土器片および、24・26・

38土壇上出土の土器と積極的な差異は見いだせなかった。

したがって本稿では、記述の便宜上、土器柄、特殊蓋、器台、各構造出土の土器、土壇上の土器に分類して、その概要について述べることとする。

[土 器 柄]

K2. (図20, 図版11)

第24土壇の東に接した地山層の小土壇内に納められ、壺と鉢を組み合せて柄としたものである。いずれも酒津式土器と併行する時期と考えられる。

柄身部である壺は、現存高49.2cm、推定高50cm～51cm、腹部径44cm、底部径11cm、頸部径18cm、口縁部径推定28.4cmを測る。口縁部および頸部はやや内傾し、腹部の最大径は中心よりやや上有る。底部は中心部が少し突出した平底である。

口縁部にへら彫きによる鋸歯文、頸部から肩にかけて、横方向のへら彫きがされている。肩下部は巾5mm、長さ5cmの大荒いたたき目の後、巾約2mmの刷毛目調査を施している。内面は口縁部から肩にかけて横なで、腹部は外面より細かい刷毛目、底部は捺压による整形がなされている。

焼成は良好で胎土には石英粒および雲母を含む。色調は焼成の際に生じた黒色のすすけた跡がある。

蓋として用いられた鉢は、底部を欠損して全体を知ることができない。口径33.6cm、高さ推定約20cmである。外面は巾約1.5mmの刷毛目、内面はへら削りによる調査を施している。焼成は良好で明赤褐色を呈する。胎土は壺と同質で砂粒、雲母を多量に含む。

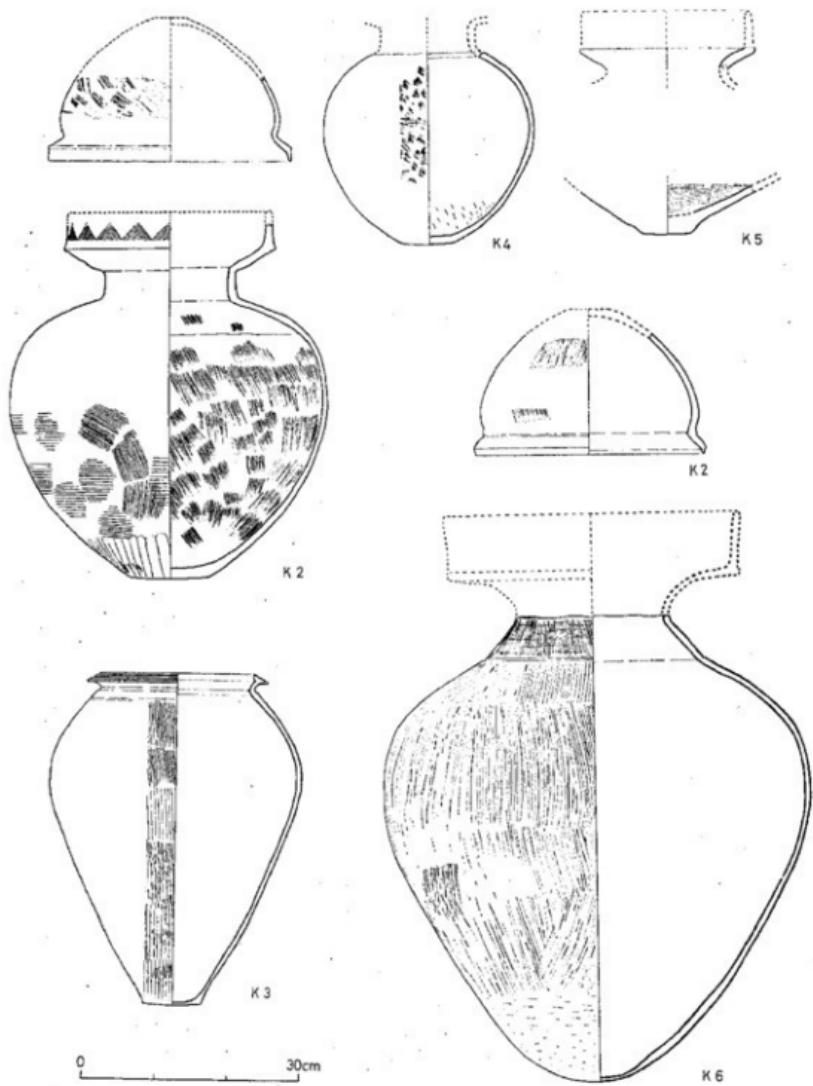
K3. (図20, 図版11)

第2土壇の南斜面の小土壇内で検出された器壁の薄い壺である。器高46cm、口縁径21.2cm、腹部最大径34.8cm、底部径8cmを測る。口辺部に5本の沈鉢を有し、肩最大径は高い位置を占め、底部は平底である。

肩の上半は縱方向の刷毛目、下半はへら彫きに近いへら削りを施している。内面の上半は横方向へのへら削り、最大径付近から下半は縱方向へのへら削りで調査している。口縁部の手法からみると中期末、内面のへら削りの方向からみると後期前半の、いわゆる両時期の手法を合せもっているが、いずれにしても、本遺跡出土の土器の内では最も古い形態のものである。焼成は良く、色調は赤褐色を呈するが、底部から肩下部にかけて墨斑を有する。土器内部は暗褐色である。胎土には砂粒および雲母を多く含む。

K4. (図20)

第33土壇と第36土壇の間で、第33土壇と切り合い関係をもって置かれていた壺である。頸部を意識的に打ち欠いたものらしく、欠損して腹部のみ見出された。腹部高26.5cm、腹部径29.5cmを測り球形化したものである。底部は平底と丸底の中間の形状を呈する。外面は巾約1mm位の刷毛目、内面は上半は上へら削りの後削りでなく削り、中央部は横方向へのへら削り、底部はへら彫を押しつ



第20図 土器 棺

けたような跡がある。胎土に砂粒、雲母を含み、色調は肌色で、内外とも腹下半部から底部にかけて黒斑がある。

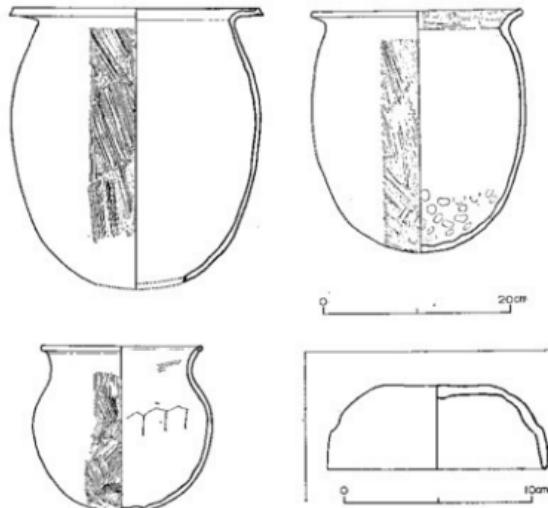
K5. (図20)

第36土壙の西斜面より発見の壺である。中に管玉を内蔵することから槍として扱った。破損流失が多く、底部と頸部の一部のみしか確認されず、計測はできなかった。胎土に砂粒を含み、雲母が多い。色調は外表は肌色で部分的には黒斑を有する。内面は黒色である。また破片によっては、丹塗りの痕跡が残っている。底部の感じからみて、酒津後半か、または正治6年と併行するものと考えられる。

K6. (図20)

第40土壙の西北、東面する傾斜面の小土壤内に納められた、大形の壺と鉢からなる壺棺である。壺は頸部を意識的に打ち欠いていた。頸部までの現存高64cm、推高78cm前後の壺と考えられる。頸部の最大径は底部から約3分の2の位置にあり59cmを測る。底部は中央部が突出し、平底と丸底の中間的様相を示す。肩部は刷毛目以後、あまり顯著ではないが指か何かで横なでして調整している。胴部は縦方向に荒い刷毛目、底部近くは横方向へのへら削りの跡がうかがえる。内面はへら削り等の顯著な痕跡は認められず、指によるなで程度である。焼成はややぐすい感はあるが良好。胎土に雲母を若干含んでいるが砂粒はほとんど認められない。色調は全体として暗褐色であるが、頸部に焼成時の焼きむらのためか、黒っぽい部分が2か所に存在する。酒津併行期のものと考えられる。

鉢はK2のものとほぼ同じ大きさである。底部を欠損しているが、発見時地表に露呈していた部分にあたるため、後世の破砕と考えられる。口縁径32cm、推定器高約20cmを測る。外面は刷毛目による調整が施されているが、内面では顯著な調整跡は認められない。胎土中の砂粒はわずかで、雲母を多く含んでいる。色調は身の壺よりも明るい肌色を呈するが、焼成むらの黒色部が頸部に2か所見出され焼成は良い。



第21図 K7 土器棺

K7. (図22, 図版13)

第40土壇の西、K6に近いところに、3個の壺を直列状に接合して用いた棺で、その中央に須恵器坏がおかれていた。器形の形状および大きさに差異は認められるが、いずれも圓巧のものである。

①の胸部はほぼ球状を呈し、胸下部に若干のひずみをもつ。表面は刷毛目、内面はなでおよび指圧による整形を施している。器高17.5cm、口縁径17.2cm、胴部径19.4cmを測る。胎土に石英粒を含み、色調は明褐色、焼成はよい。

②は中央に用いられたもので、底部を欠損しているが、3個体中では最も大きく、器高推定約29.5cm、口縁径26cm、胴部径26.4cmを測る。表面は1.5mm～2mm巾の刷毛目、内面は指圧による調整を行なっている。胎土に砂粒を多く含み、色調は薄茶～薄墨色を呈し、焼成はよい。

③は、器高25.5cm、口縁径22.6cm、胴部径22.7cm、やや継長の壺である。表面は頸部以下は全面刷毛目、内面は口縁部は横方向刷毛目、胸部上方はへら削り後、横方向になで、底部は指圧による調整を施している。胎土に砂粒を多く含み、色調は赤っぽい部分もある薄茶色、内面は暗淡赤褐色を呈し、焼成良好。

須恵器坏は、器高4.5cm、口縁径11.8cmを測る。胎土に石英砂を多く含み、整形底面をもたない。焼成は良好で、ねずみ色を呈する。いずれも群集墳盛行期（6世紀後半）の所産と考えられる。

〔溝状遺構内の土器〕

本遺跡で出土した特殊器台形土器・特殊壺形土器出土上破片数は、付表3にかかげた通りであり、A・C・D溝から約280片、21・24・31・41グリット内で數片発見されている。B溝からは1片も検出されていない。個体数は、特殊器台4～5個体、特殊壺は4～5個体ほどと推定される。

付表3 特殊器台・壺片出土一覧

	特殊器台					特殊壺					器台・壺	
	計	口縁部	頸部	基底部	刻部		計	口縁部	頸部	基底部		
					文様帶部	その他						
A 溝	23	15	2	—	A類 3 C類 2	1	16	1	13	2	9	
C 溝	28	8	—	3	A類 5 B類 10	A類 4 B類 1	15	—	3	12	23	
D 溝	124	10	2	7	A類 35 B類 24	A類 28 B類 18	15	1	4	10	24	
グリット	3										10	

特殊器台形土器

特殊器台の胴部は、径30~40cmのほぼ垂直の円筒形をなす。その上下はかなり急なカーブで、朝顔花状にひらき、二重口縁とラッパ状にひらいた下縁部をもつ。高さは70~80cmと推定される。

口縁部は、いずれも二重口縁をなすが、くの字形に屈折し、やや外反ぎみに立ちあがり、胴部上端から口縁上縁端まで短いもの（図22-7-C）、胴部から急に稜線（内面）をもって屈折し、ほぼ垂直に立ちあがり、胴部上端に鉈齒文が描かれ、口縁下端までやや長いもの（図22-9-A）、胴部からややゆるやかに屈折し、内傾ぎみに立ちあがり、胴部上端に鉈齒文（逆鉈齒文で、複合鉈齒文が描かれている破片もある）が施こされ、口縁下端までやや長いもの（図22-10-A）、上縁部の欠けた破片であるが、胴部上端から口縁上縁端まで長く、ほぼ垂直に立ちあがると思われるもの（図22-11-A）とがある。口縁部の内外面は原則として丹塗りされている。基底部から胴部の境にタガ状凸帯をもつが、すべての器台に存したかどうかは不明である。胴部から口縁部の境に凸帯をもつ破片はみられなかった。胴部は、凸帯で区画され、基底部から退化した凹線文帯と文様帯とが対となって、最上段は凹線文帯となり、そこから屈折すると考えられる。前述のように胴部上端に鉈齒文が描かれるものもある。基底部は、肩に凸帯がはりつけられ、その上方に凹線がみられるもの（図22-13-C）と、鉈齒文と数条の細い沈線が組み合わされるもの（図22-12-D）とがある。口縁部でもみられたが、輪づみ痕にそって丹がはみ出している部分が観察される。口縁部の内外面、胴部、基底部の外面は丹塗りされ、下縁部内面にも施こされているものもある。以下文様構成・凸帯の形状・器型の薄厚・施文具の相違等から3類型化した。その指標をのべてみる。

1) A類型（図23-D1~D9、模式図A）

文様は、横S字型に交互に組み合わされた2条の曲線が基本構図であり、その間は斜線でうめられ、2条の曲線の両側にそって連続しない曲線が描かれている。凸帯にそって正三角形に近い透孔がみられるが、横S字形曲線と凸帯とに囲まれた三角透孔の部分は、斜線あるいは複合鉈齒文がほどこされている。その部分は各文様構成によって異なり、また同一文様帶においても一定していないと思われるが、図示したようにほぼ3種類（図23-D1~D7~D9）に分けられる（圓の破片はいずれも同一文様帶に属さない）。模式図A類のものが基本的だと考えられる。また巴形の透孔も、横S字形曲線にそってみられる。

文様は先端の細い施文具で、浅く鉛く描かれている。凸帯で区画された文様帯と文様帯の間には退化した凹線文帯がほどこされている。

胴部の凸帯ははりつけられ、その断面は、三角形状に近い拵物線状を呈し、凸帯の上下端は横なで調整され、凸帯間の器壁は文様の有無にもかかわらず、ふくらみ気味である。内面は横方向にへら削りされ、胎土には砂粒、雲母をかなり含む。丁寧な調整であるが、砂粒の動きは明瞭であり、口縁部分は、砂粒の動き痕もほとんどみられず、きめ細かに調整されている。器壁は薄く仕上げられている。外面全体は丹塗りで赤褐色、内面は暗灰褐色を呈する。

基底部は、外面に部分的に斜方向に刷毛目痕がみられ、凸帯の上方には、胴部の退化した凹線と明瞭に区別しうる細い刷毛目状沈線が8条（時計廻り）描かれている。器壁は厚く、内面は荒くへら削りされ、胴部の部分では右方向（時計廻り）であるが、基底部では下から上への斜め方向である。下

縁部はほぼ垂直であり、その内面に指なで痕がみられる。基底部から肩部にかけては、ほぼ直立し、その境には太い凸帯がはりつけられている。丹塗りは基底部下端までみられる。この種破片はD溝から出土が圧倒的に多く破片も大形のものがある。

2) B類型(図23-D10～D20, C1～C4, 模式図1)

文様は、1条の横S字形曲線が横S字の一方と組みあわるのが謎本模図であり、その両側の曲線との間を斜線でうめられるもの(模式図B類)と、片側のみの曲線との間を斜線でうめられるもの(破片が少ないので模式図は作成せず)がある。つまり1帯と2帯の斜線文帯がみられる。この類型は曲線文が主体であり、その文様構成に応じて一回四の三角形透孔と凹形(円形の場合の可能性もある)透孔がある。一回四の三角形透孔にそう文様は、4種類に分けられる。すなわち横方向の直線文が描かれるもの(図23-D-10), 直線文が省略され、無文のもの(図23-D-13), 1本の曲線が描かれるもの、さらに文様帯の下半部をほとんど占めると考えられる、2本以上の曲線がそって描かれるもの(図23-C1, C11, D12, D19)がある。(図の破片はいずれも同一文様帶に属さない)文様は、やや先の太い鉢文具が使用され難い。斜線もやや粗雑で丸味があり短く、曲線文に接しない場合が多い。肩部凸帯の断面は、台形状を呈し、その上に1条の細い凹線が残るものがある。基本的には断面の下端の方が長く、やや上向いている。かなり堅固で埴輪のタガに近くなっている。

器壁はA類よりも厚い。内面は横方向にへら削りされ、胎土には砂粒、雲母を含む。凸帯で区画された文様帯と文様帯の間には退化した凹線がほどこされている。外面は赤褐色。丹塗りで、内面は暗灰褐色を呈する。器壁の内部は明黒褐色が多い。

この類型に属すると考えられる基底部の破片がD溝、43グリット内(遮離)でみられた。その肩部には、はりつけられた凸帯を割り出すように横なでがみられ、その上に鉢文文が描かれている。下縁部はほぼ垂直であり、内面は荒いへら削りと指なで痕がみられる。この種破片は、D溝からの出土がやはり多く、C溝からも磨滅の少ない大形の破片も検出された。

3) C類型(図23-A-1, A-2)

文様は、複合鉢文文が凸帯に接して描かれている。文様帯全体が複合鉢文文でうめつくすというようなことはない。凸帯は断面台形状を呈し、その上には1条の退化した凹線がみられる。文様帯と文様帯との間には、退化した凹線がほどこされているが、ほぼ平滑である。透孔の有無は不明であるが、鉢文文がとぎれる部分にある可能性がある。C溝出土の基底部から肩部にかけての破片(図22-14-C)は、この類の凸帯の形状に近く、同一個体の可能性がある。外面とも褐色、器壁の内部は灰褐色を呈する。外面は脛減しているため丹塗り痕はみられない。この種破片は、A溝から2片検出されたのみで、模式図は作成しなかった。器台片であることは確定であり、A類とは凸帯の形状が異なる。

特殊造形土器

本遺跡の特殊造形土器は、K1(図22-K-1)を除いて他はいずれも小片である。

K1は、10号土壤の北西隅に一塊りとなって埋まっていた。表土下7～8cmまでに露呈し、口

縁部、胴下半部および頭部の一部は欠けていたが器形の大半が残存していた。掘り込みは明瞭に認められず、二次的移動があったと考えられる。K1は頭部最大径50cmの大形算盤球形の壺である。外面は丹塗りされ、赤褐色で、内面は暗灰褐色を呈している。強く張った頭部に2条の凸帯がはりつけられている。凸帯は巾が広く扁平で、上面には2条の太い凹線文があって、その間に2~3条の細い沈線がみられる。凸帯の間および下段の凸帯の下には斜方向の刷毛目がほどこされている。後者は前者よりもやや細めである。頭部から胴部にかけて斜方向の刷毛目がみられる。上側の凸帯の上方には刷毛目に近い沈線が15条横走し、上に細くなつた頭部にも退化した凹線文がみられる。

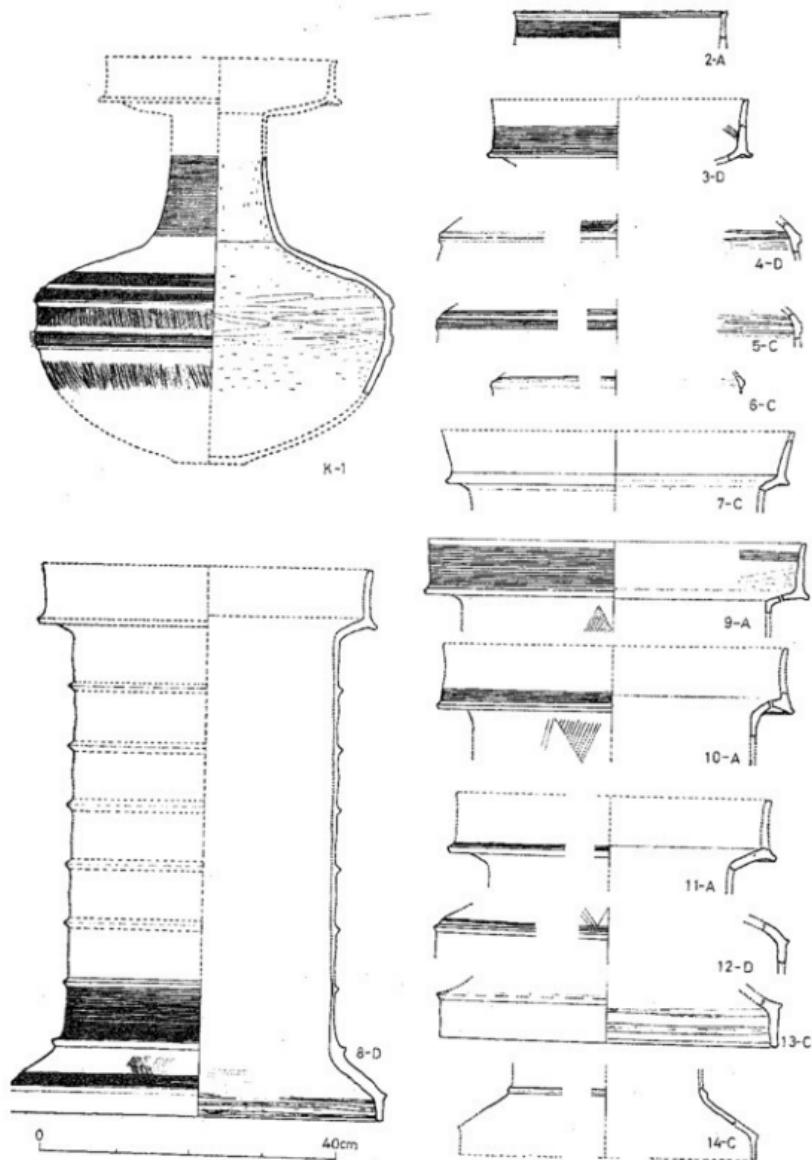
口縁部は、D溝から同一個体と考えられる破片が出土している(図22-3-D)。二重口縁で、ほとんど垂直に近くたちあがり、上縁部外面には刷毛目に近い凹線が横方向にほどこされ、内面にも同様に部分的であるが、下から上へ斜方向にみられる。内外面とも丹塗されている。

頭部内面には、横方向のへら削り、頭部には上方へ斜方向のへら削りがみられ、特に凸帯部分の内面は、荒く太い凹凸の顯著なへら削り痕がある。頭部、胴部内面に、輪づみ痕にそって丹がはみ出している。特殊器台でも同様であるが、輪づみすることにはりつけ面に丹塗りされたことがわかる。胎土には雲母・砂粒を含み、焼成は堅緻で精巧なつくりである。なおK1は特殊器台A類と組み合わさってもよい頭部直徑である。向木見跡跡の特殊壺と比較すると頭部はやや強く張り、頭部から頭部にかけてふくらみがなく、凸帯形状がより巾広く扁平になるようである。

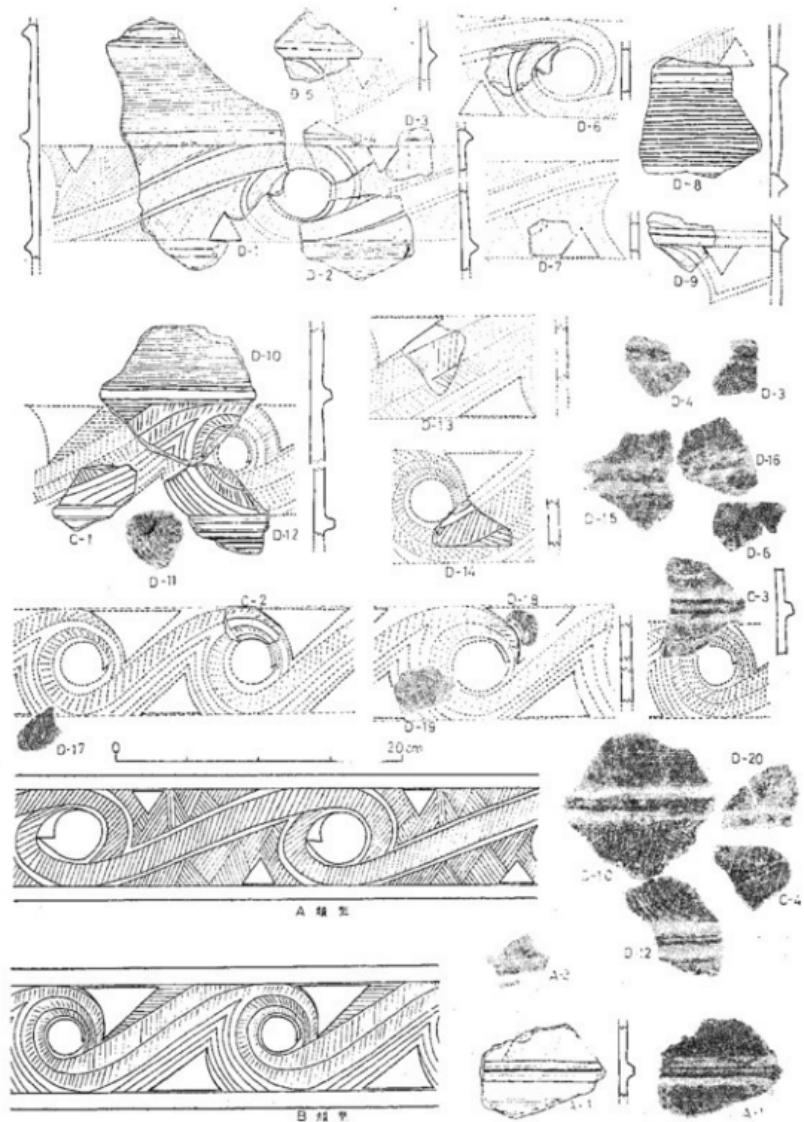
特殊壺の破片は先述のように少量(破片にして約60片)であり、K1の他にせいぜい4個体程である。特殊器台片の出土の少ないA溝では、かなり多く発見され、K1の破片もA・D溝から4~5片ずつ検出されている。これは両溝とも墳墓上におかれた特殊壺が流入する可能性のある条件に存在していたことを示すものであろう。

次にK1と別個体の特殊壺にふれてみることにする。まず頭部による分類では、図22-4-Dは比較的小形で、頭の肩部に刷毛目状の沈線が7条めぐらされ、その上に3吋大の刺突文がほどこされている。凸帯はK1のは巾約1.8cmでこれに比べ、やや厚く、狭く約1.2cm、堅固であり上面に1条の太い凹線がみられる。また内面はへら削りされ、凸帯部分のそれは荒く太いへら削り痕がみられる。胎土には砂粒・雲母を含む。外面は赤褐色で丹塗りされ、内面は暗灰褐色を呈する。この種のものは、C溝から2片、D溝から4片みられる。図22-5-Cは、頭部の凸帯がK1に比べ巾も狭く約1.5cm、やや薄い(約0.3cm)。上面に数条の細い沈線も明瞭である。胎土には砂粒・雲母を含み、器壁も薄く、焼成は軟らかい。外面は丹塗りされ、赤褐色で内面は暗灰褐色である。この種破片はC溝から3片、D溝から2片出土している。図22-6-Cは、C溝からの1片だけであるが、蹲手小形で(巾0.9cm)、頭部に凸帯をもつ。その上面は平坦で、上方に刷毛目状沈線が数条みられる。

口縁部は、K1の口縁と推定したものの他に、口径14.5cmの小形の上縁部のみの破片がある(図22-2-A)。ほぼ垂直にたちあがり、口縁上端近くでやや屈折する。外面には退化した凹線がほどこされ、内面は刷毛目状に近い横なで痕がみられ、口縁上端をわずか残して削られている。口縁縫は斜方向に平面となっている。外面は丹塗りされ、赤褐色、内面も丹塗り、器壁の内部は暗灰褐色を呈する。焼成は堅緻である。砂粒・雲母を含む。他に口縁上端に明瞭な屈折部をもたないで、ゆ



第22図 特殊壺・器台



第23図 特殊器台文様構成

るやかに外反ぎみに立ちあがる上縁部のみの細片がある。外面は丹塗りされ、退化した凹線がほどこされている。内面は暗灰褐色で磨滅のためか丹塗り痕はみられないが、輪づみ底にそって丹がにじみでている。上縁部の内面、器壁の内部は灰黒色で、へら割りがなされている。3mm大の砂粒も含む。

以上特殊器台の類型化を試みてきたわけであるが、次に各類型の関係について、若干ふれてみることにする。

A類とB類型の差違は、まず凸帯の形状にある。A類は断面三角形に近い抛物線状を呈するが、B類は台形であり、埴輪のタガに近くなっている。文様についていえば、A類は先端の細い施文具によって、対となった2条の横S字形曲線が基本で、斜線文が稍縱に描かれ、B類はやや先端の太い施文具によって、1条の横S字状曲線が基本で、斜線文は粗雑である。

C類は台形の凸帯をもち、B類に近いが、文様はあたかもA類の複合網眼文の部分に類するかのようである。

凸帯については、同一個体では、同一形状を呈すると考えられ、A・B類を比較してみるとやはりB類が新しくなると思われ、文様の基本構図の差違にも変化がみられるようである。

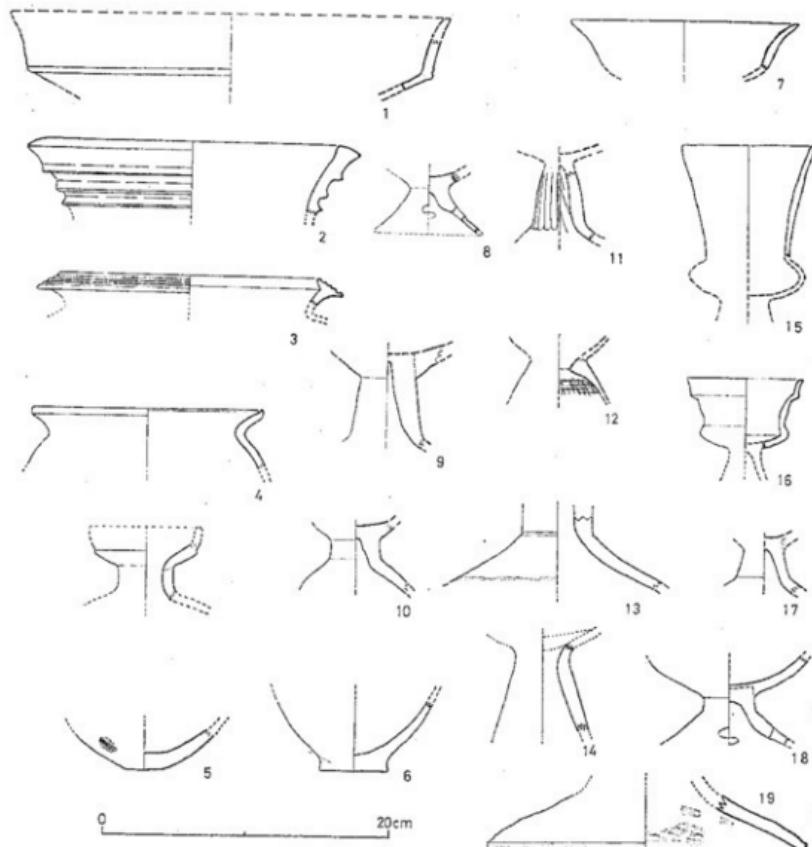
(15)
向木見遺跡出土の特殊器台は、文様の基本構図において、A類型に相当し、一返四の三角形透孔の部分の文様構成は、B類型に類似している。問題は、凸帯の形状であるが、向木見遺跡のものは抛物線状を呈している。

(16)
宮山遺跡出土のものは、透孔は円形と三角形であり、凸帯は断面方形である。
本遺跡のB類は、文様構成あるいは透孔の形状が向木見型に類するが、凸帯はむしろ宮山型に近い。A類は文様の基本構図においては向木見型に類するが、三角形透孔の部分の文様構成は独特である。以上のことから現段階では、本遺跡のものは宮山型よりは古く、立坂型よりは新しく、やや向木見型よりは新しいといえるであろう。地質的には本遺跡は、向木見遺跡より立坂、宮山遺跡に近く、B類の凸帯は、埴輪のタガに近い台形状に変化し、宮山型への傾斜の度合を強めているといえよう。同一遺跡において、特殊器台の文様変化は、土器型式の変遷より、より微細な差違を反映しているようであり、A・B類の差違は単に個体差とすることはできない。しかも器台の個体数が、きわめて少なく土器型式からいえば、一定期間があるにもかかわらず、各個体間にかなり明瞭な差異のあることは指摘できる。

しかもB溝を含めた各溝で囲まれた一定範囲内にみられることが特徴である。D溝の場合、底から20~30cm上の浮いた状態になった帶状の土器溜りから検出された。溝底から出土していないことは、溝が一部埋まるまで構築以後一定の期間存在したことが考えられる。また各溝とも土器溜り上に灰・炭化物・有機物を含む暗灰色土の流積が2~3層確認されている。溝内の他の土器も破片が多く、同様に器台・蓋の類も原位置をとどめていたとはいいがたく、やはり器台等は、埴輪上の一方に置かれていたと考えざるを得ない。そして、各溝とも尾根を切っているものの、いずれも等高線にそって掘られている。その方が合目的でもある。特にD溝のように地形的に明らかに墓域の端にあって、しかも谷に面し崖に溝によって墓域を両そうとすることは、むしろ不必要であると考えられる。つまり溝によって墓域を画するという意識があったとするより、結果的に溝によって墓域を画されていたと推定される。そこに溝の一機能があったはずであり、埴輪上の供献用土器は壊れ

て転落、流失したというより、人為的に廃棄されたと考えられる。器台片の出土状況、さらに器台A・B・C類が、酒津式併行という一定期間に存在していたにもかかわらず、文様構成、凸帯の形状等で差違のあるものが同時に製作され、墳墓上に置かれたとは考えられない。「飲食物供獻行為」において、A類の器台が使用された後、新たな「供獻行為」の必要性によって、B類あるいはC類の器台が置かれたと考えることも可能である。もちろん「儀礼」ごとに器台が製作されたものではないだろう。器台、壺の個体数の僅少なことや、輪づみ毎に丹塗りするといった精巧なつくり、胎土の選択等で、特別に製作されていることから、容易に廃棄されることはないであろうと考えられる。

そういった特殊壺・器台をもった本遺跡は、集団墓地でも特定の墓であるといえるであろう。本遺跡の葬墓群には、時期的に一定の巾があるが、特殊壺、器台は、それらの出土範囲および特殊器



第24図 A溝状造構出土土器

台とセットとなる特殊壺K1が、「供獻用」であると推定されること、この土壙墓群に、小形仿製鏡、鉄器、玉類が副葬されていること、さらに各溝に埋込まれた状態にあり特定の墓域を構成していることなどから、Ⅱ群（8～14土壙）の被葬者に対するものであったと考えられる。

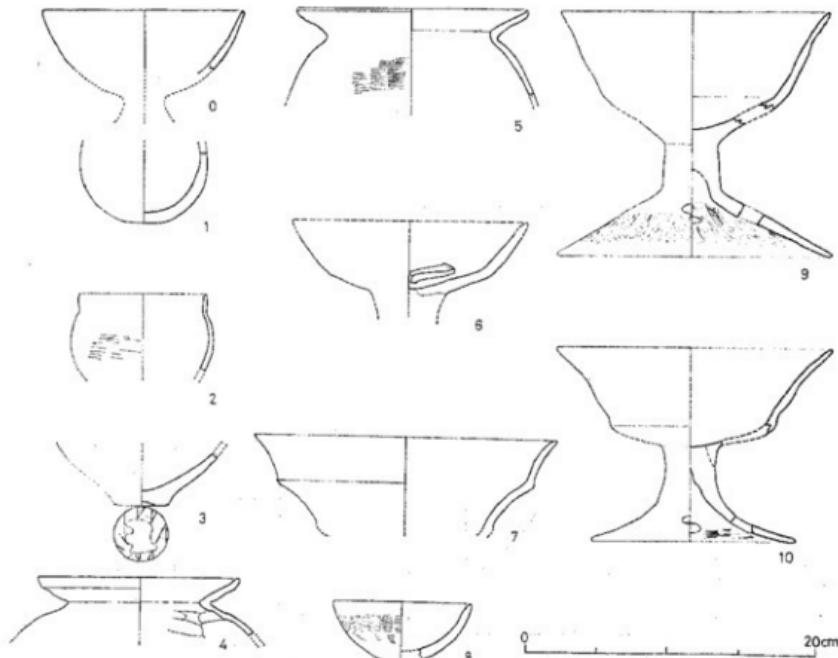
〔溝状遺構内の土器〕

A溝状遺構（図24）

A溝状遺構は、その両端部を道路によって切断されているため、出土土器片がすべてではないが採取した土器片を接合等検討した結果、高环22、ラッパ脚器台2、台付直口壺2、鉢1、壺・甕11、K1、K5の破片および須恵器壺1が少なくとも存在したことが確認された（表4）。ここではそのうち、代表的なものについて実測図を載せ概説することとする（以下各溝状遺構の記述についても同様である）。

壺の中には、中期末の特徴をもつ、表面に丹塗りされたものが含まれる（图）。また甕の中にK3と同質の後期初頭を思わせる口縁を有するものが認められる（图）が、その多くは酒津式土器とほぼ併行するものである。

台付直口壺は2個体見出されたが、いずれも口縁部のみである。内1個体即ち、酒津式2段環部



第25図 日溝状遺構出土土器

高坏の手法と類似する。即ち丹塗りが施されている。ラッパ脚器台は小形であるが丹塗りされ、陶土も砂粒を含まず、精巧なつくりである。

高坏は(1)のように口縁径が30.6cmと大形のものもあるが、多くは口縁径15cm内外のものである。脚部に丹塗りが施されたもの(8・9・18)を含む。胸部に小円孔が十字形に4個穿たれているものが多い。

B溝状造構(図25)

完掘したわりには個体数が少ない。高坏6、鉢1、壺1、小形壺1、甌1、蓋または甌6、の計16個体が確認できた。

甌(4)は外表面はへら削き、内面はへら削りが認められ、口縁部がくの字形に屈曲し、酒津式土器に類似する。(5)は口縁部を僅かにつまみあげている。壺は1個体分の底部(3)しか確認できなかったが、底面をへら削り等で削り取っておらず、不整形なくぼみと、へらによる沈線が見出される。小壺(1)は腹部が球状化し、底部は中心が突出して丸底に近くなっている。

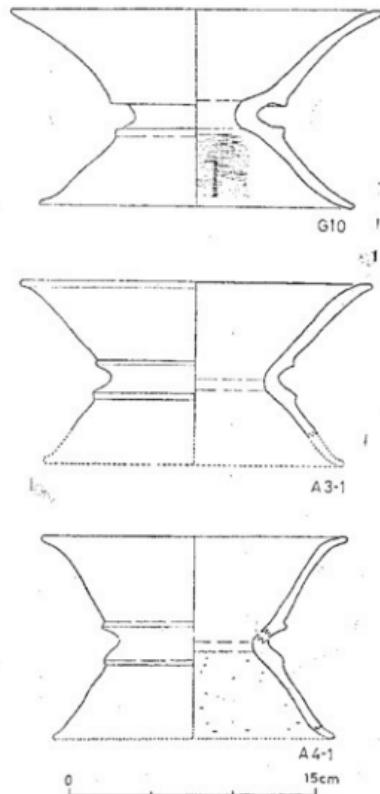
高坏は、坏部が二段になるもの(7)と、坏部にかすかに稜線が認められるもの(9・10)がある。坏部下端部の器壁が薄くなるという、いわゆる酒津式の傾向は認められないが、ほぼ酒津式の範囲に入れる考えると考える。発見した高坏片のすべては丹塗りが施されている。

C溝状造構(図26)

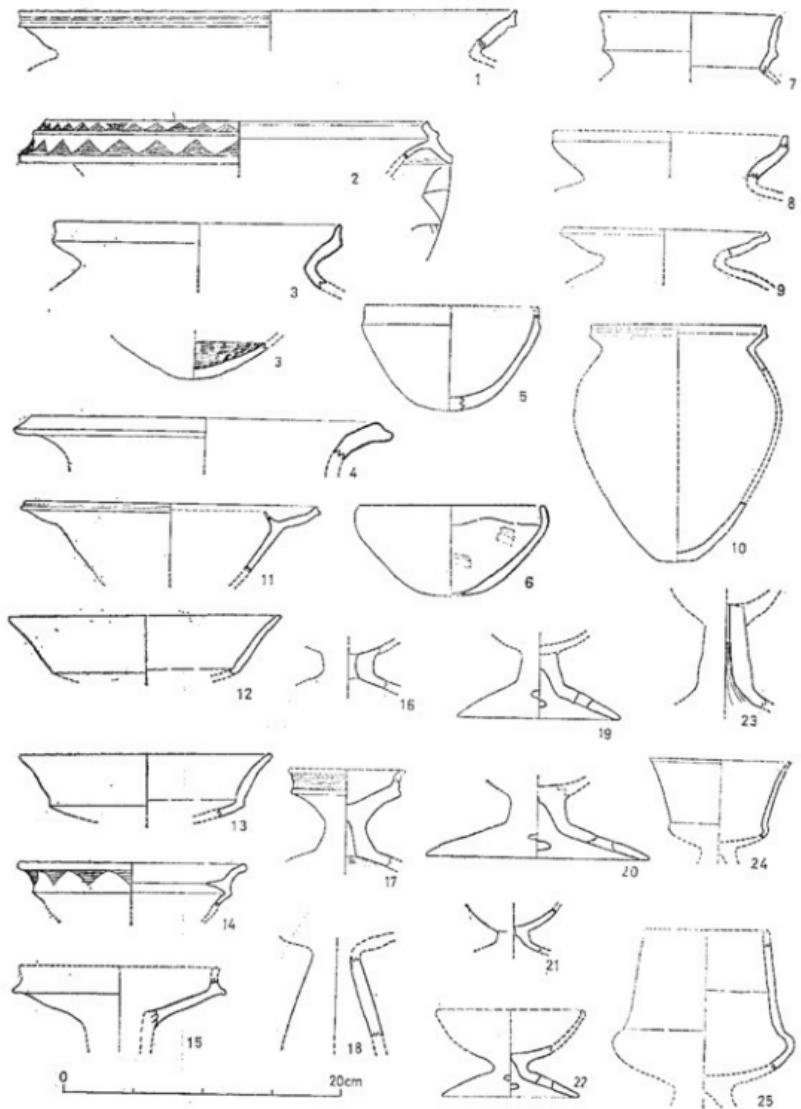
本遺跡中最大の溝状造構である。現道路敷下を巾4m掘り廻したにもかかわらず、出土土器片は底部に土器倒立状となって、最も多量である。高坏が66個体と圧倒的に多く、甌・甌14、鼓形器台1、高坏状器台、ラッパ脚器台、台付直口壺、鉢各2、その他須恵器若干を確認した。

甌・甌の類は、口縁部に凹線や沈線をほとんどもたず、底部も平底と丸底の中間的なもの、および丸底のものがみうけられる。鉢は塊状の小形のもので底部は丸底である。

ラッパ脚器台および高坏状器台は、いずれも一見して高坏と見られたが、ラッパ脚器台は柱



第26図 鼓形器台



第27図 C溝状遺構出土土器

付表4 各溝状遺構出土、土器一覧

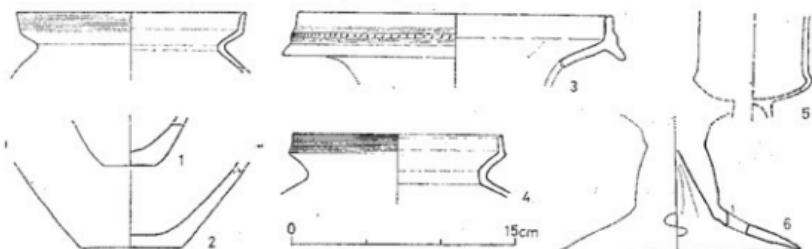
	高 坏 环 状 器 合	高 环 状 器 合	ラ フ バ 脚 器 合	故 形 器 合	台 付 直 口 辺	鉢	壇	小 形 臺	皿 (塊)	壇 ・ 壠	そ の 他
A 溝	22		2		2	1				11	須恵器壺身1 鐵器片1
B 溝	6					1	1	1	1	6	金クソ
C 溝	66	2	2	1	2	2				14	須恵器片若干
D 溝	12				1					5	
24土壤	2		1			1	1			5	
26土壤	7		2			1	1			1	
38土壤	2					1				1	

状部、高坏状器台は坏部下底部の検討の結果摘出した。

鼓形器台(図27)は、C溝底部に接してほとんどその原形を保って出土した。中央くびれ部の巾が狭く、稜線をもち上・下台とも高坏状に滑らかに外反している。器高12.2cm、上縁径22.6cm、くびれ部径7.6cm、下縁径19.2cmを測る。脚部内面以外は、平滑で丹塗りが施され、赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土も精選されており、わずかに砂粒を含む。脚部内面は刷毛目による調整がなされている。

先に報告した用木古墳群第3号墳および第4号墳から出土した鼓形器台の実測図(図27、A 3—1、A 4—1)と併載したので参考願いたい。胎土焼成は類似するが、立ち上りの角度を増すこと、および上縁端が僅かに返りをもつこと、また脚内面の調整が、刷毛目に対して横方向へのへら削りである、丹塗りがなされておらず淡黄褐色を呈する等の差異をもっている。

高坏の器形は変化に富んでいるが、⑩⑪の坏部に脚の脚がつくものが大半を占める。坏部外面下半に稜線を有し、脚台部に十字形に4個の円孔をもつ。小形低脚高坏のなかに坏底部中央に焼成前



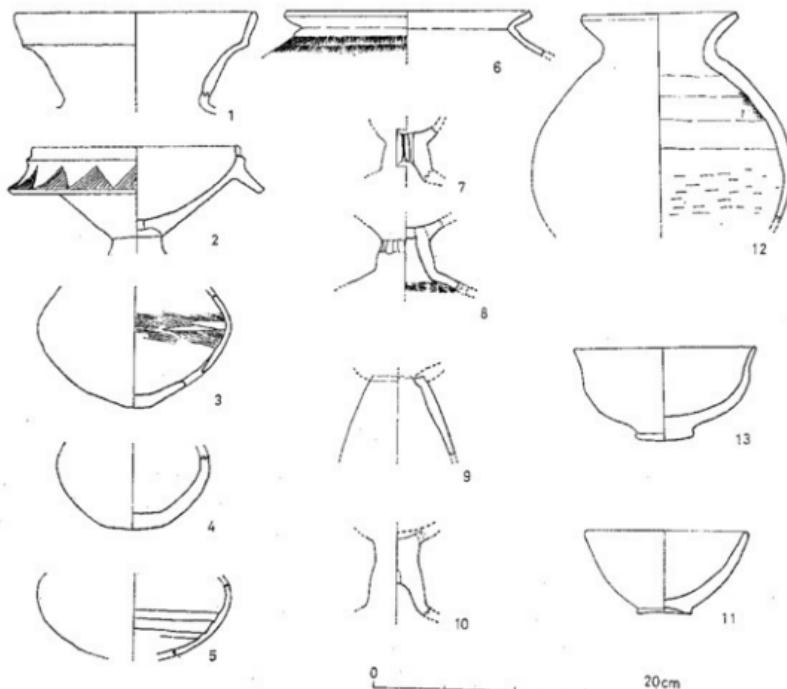
第28図 D溝状遺構出土土器

に穿孔したものが3例見出された。坏口縁部に沈線文(7), やや粗雑であるが鋸歯文(8)を施されたり、蓋受けを有するもの(11・14)も含まれるが、出土例は少ない。また検出された高坏のうち約3分の2は丹が塗られていたことが明らかである。

D溝状造構(図28)

溝底部に巾1m、長さ約3.5mにわたって帯状の土層掘りとなって検出された。これらの土器片の中には、前項で記した特殊器台・壺の破片を多く含み、須恵器片を含まない特徴をもつ。確認された土器個体数は、高坏12、台付直口壺1、壺・甌5である。

甌口縁部は、立ち上りが内傾するもの(4)と外傾するもの(0)の例が見受けられた。底部は確認される限りでは、平底であった。台付直口壺は、坏部周の破片のみであるが、器壁は薄い。特殊壺または高坏の口縁部と思われるものに爪型刺突文を有するもの(8)が検出された。総体的にみて丹塗りが施されているものが多い。高坏の多くは、C溝の場合と同様脚窪が大きく開き、4孔を有するものが多い(6)。



第29図 24.26.38 土 壤 上 の 土 器

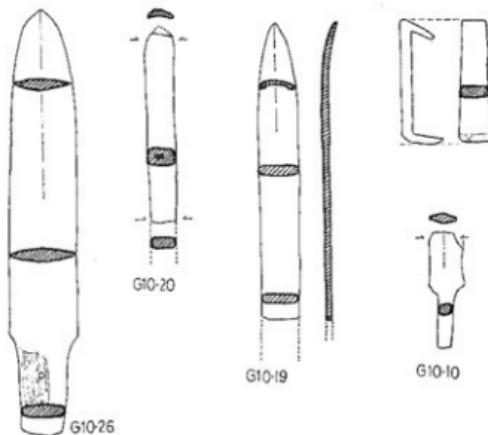
(土壤上および周辺部の土器)

土壌上およびその周辺部出土の土器片の多くは、表土中に流入遊離していたのに対し、前項で述べたK1特殊器の他に、第24土壌直上、第26土壌および第38土壌周辺部からほぼ原位置をとどめると思われる土器の出土例をみた。

第24土壌直上土器 (図29-1・5)

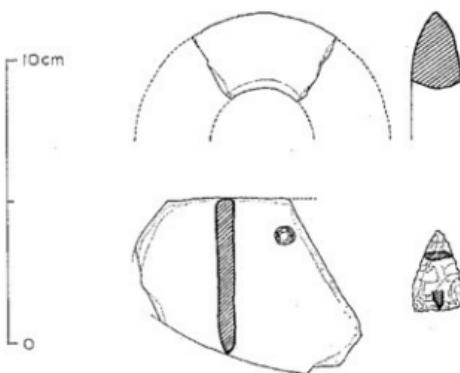
第24土壌直上からK2窓枠にかけて、第24土壌の長軸線と直交する形で、約1mの長さの帶状に見出された。高坏2、ラッパ脚器台、鉢、壺各1、壺・甕5の計10個体分である。鉢を除く他の土器にはすべて丹塗りが施されている。

壺口縁部に稜線を有し、底部は僅かに平底であることが確認される程度で丸底に近い。高坏のうち1個体は酒津式に通常みられる開脚部に4孔をもつものであるが図示したもの(2)は、坏部中央に焼成前に穿孔がされ、口縁部に鉛墨文を有し、外外面ともにへら磨きによる調整が施され、精巧な作りである。壺はやや扁平であるが前者と同様丸底に近い。



第26土壌周辺の土器 (図29-6・11)

第26土壌直上から周辺地山間に遊離して出土、高坏7、ラッパ脚器台2、鉢1、甕1の計11個体である。甕の口縁部端はつまみあげて調整されている(1), 脚部片からみて肩部以下器表全面は刷毛目、腹下半部内面は縱方向のへら削りが施されている。高坏は低脚のものが多く、内1個体(7)は焼成前に穿孔がされていた。いずれも外表面へら削りが認められ、丹塗りされている。鉢(8)は底部は平底で



第30図 鉄器・石器実測図

あるが、中央部がくぼんでいる。ラッパ脚器台⑧は、山陰福島でⅢ期後半からみられる砂時計型器台とは、脚のカーブが逆であるが、壺の口縁にはならないと思われるので、一応、ラッパ脚器台とした。

第38土壙の土器（図29-12・13）

第38土壙の北小口部の外方に接して、地山層上面に置いていた、蓋と鉢の各1個体である。蓋は肩部最大径がかなり下方にあるが、肩内面下半部は横方向にへら削り調整が施され、平底の底部がくるものと思われる。鉢は突出した平底の底部を有し、塊状のものである。いずれも酒津式の分類に入れられるものと考えられる。

以上、各遺構内の土器片について概観してきたが、K3、およびA溝内に若干数、弥生中期末期ないしは、後期初頭と思われる土器を含むが、その大半は、酒津式土器と併行するか、あるいは、やや降る時期に比定されるものである。流土等に伴なう散逸もあって、出土土器による各遺構との関連はつかみ得なかったが、本遺跡全体の年代を知るうえでは貴重な資料となるものである。

〔鉄 器〕

短劍（図30、図版15）

第26土壙出土。西枕石の西に接して土壙長軸に直交する位置の床面に置かれていた。全長14.8cm、身長11.5cm、巾2.3cm、厚さ中央部で0.5cmを測る。柄部に若干の木質痕と目釘跡が残る。

鎌

第20土壙および第19土壙から各1出土。第20土壙出土の鎌は細身のものである。現存長6.6cm、巾1.0cm、厚さは部分によって異なる。刃先の一部と、柄部を欠損している。第19土壙出土の鎌は、現存長10.3cm、巾1.3cm、厚さ0.35cmを測る。刃先部は舟底形に反を有する。

鉄 鐵

第10土壙出土。尖先部を欠損1、錫化も著しく全長の計測は不能、現存長4cm、柄長1.9cm、刃部断面はひし形を呈し、柄部断面は丸方形である。

鎌（？）

第10土壙出土。板鐵を錐状にコの字形に折り曲げた小鐵器である。土壙南小口部の積み石に接した床面より出土。全長4.3cm、巾1cm、厚さ0.4cmを測る。

〔玉 類〕

ガラス小玉（図31）

第8土壙および第36土壙より各1点出土。いずれも明るい青色のガラス小玉である。第8土壙出土の玉は、径4.5mm、高さ4mm、つりあいのとれた玉である。第36土壙出土の玉は、径6mm、高さは部位によって異なり4mm～5.5mm、歪みをみせ、断面形は台形状を呈する。

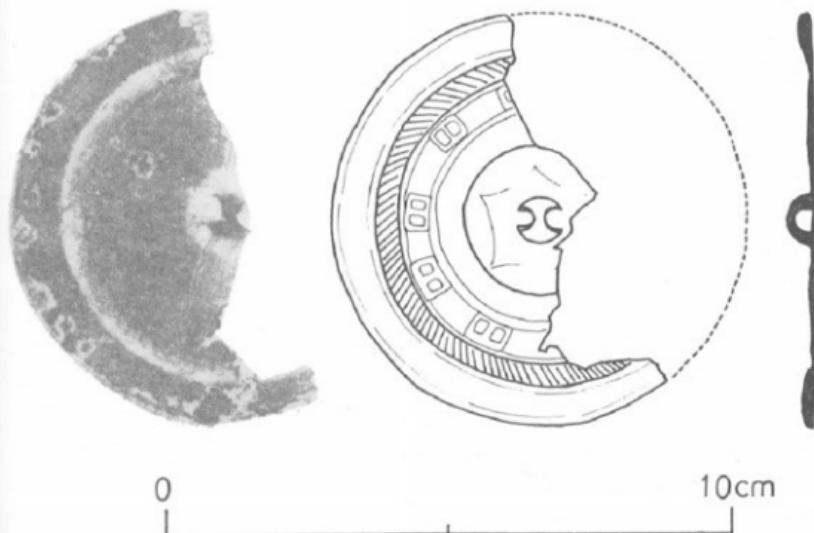
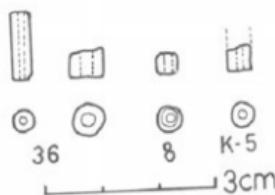
管 玉

第36土壙およびK5壺内より各1点出土。第36土壙出土の管玉は、長さ1.8cm、径3.5mm、細

身のつくりである。灰青色を呈する碧玉製で、やや粗の材質であるが光沢は有する。貫孔は一方から穿たれ、中心線からややずれている。K 5 出土の管玉は、碧玉製ではあるが風化が進み、極めてろく折損している。青白色を呈し光沢を示さない。表面はざらっとしている。現存長4mm、径4mmを測る。

(小形仿製鏡)

本遺跡の発掘調査による出土ではないが、丘陵を横断する木材搬出用の林道敷設の際、ブルドーザの掛け板によって、一面の小形仿製鏡(図31、図版15)が発見された。工事中現地に立ち合った発見者でもある佐倉氏によれば、第8土墳とA溝状造構東北端部の間位の道路西端寄りから出土した



第31図 小形仿製鏡・玉類

とのことである。鏡は磨耗が著しく、完形ではないが、背面外区に斜行櫛齒文帯を有し、時期的にも本遺構との関連が極めて深いと考えられるので、佐倉氏の御好意を得て、参考資料として記載した。

鏡は径7.25cmを測るが、破損し約2分の1強の遺存である。磨滅が著しく、その背面の文様構成は判然としない。平縁でその内側に斜行櫛齒文帯を有し、さらに内区に今一帯の文様帯がかすかに遺存する。判然とはしないが日月の銘帶である可能性をもっている。鉢は素円鉢で径1.0cmを測る。径2.5cmの鋲座を有し、5弧の花紋を有する。鏡の厚さは磨耗で極めて薄くなり、平縁部の厚さは最大で2.5mmを測るが、内区では1mm弱、鉢下の中心部では穴があいている。したがって拓本による文様を示し得ないので、模式化した実測図によってこれにかえる。

〔その他の遺物〕

本遺跡の発掘中に、上記遺物のはかにサスカイト製石錠1、磨製環状石斧片1、磨製石包丁片1の計3点の石器（図30）と、鉄滓塊數個および、永楽通宝、元豐通宝、元祐通宝、皇宗通宝の計4の古錢が出土した。いずれも表土層からの遊離した状態で出土であり、直接本遺跡とかかわりがないので、指摘するにとどめる。

5. まとめ

便木山遺跡は、なだらかな丘陵尾根稜線上の平坦部に立地する41土壙墓、6土器棺、4溝状遺構から構成される墳墓群である。遺跡の範囲は東西約45m、南北約35m、面積約1500m²におよぶ。各遺構についての特徴を列記して、本稿のまとめとしたい。

〔土壙墓〕

本遺跡の土壙は、いずれも原則として、直接地山肩に長方形に深く土壙を掘り込み遺体を埋葬するという、共通の構造を有するが、部分的には下記のような特徴と差異を示している。

A 副葬遺物を伴うもの

- ・鉄器出土 10・19・20・26
- ・玉類出土 8・36・K5
- ・土壙上に土器 10・24・26・38

B 二重掘り方をもつもの

- ・底部に段をもつもの 24・31・34・36
- ・棺側に埋土したもの 25・26

C 枕石をもつもの

- ・枕石1対 8・15・17・24・28・29・30・33・34・35・40
- ・枕石2対 14・18・19・20・25・26・27・36

D 土壙内に石組みをもつもの

- ・小口部石積み 10
- ・底部に配石 33

またこれらの土墳は、その立地および形状から、5つの支群に分けられ、次々まとまりと共に通性をみせている。

I 支群	1～7, K 3	8基
II 支群	8～16	9基
III 支群	17～26, K 2	10基
IV 支群	27～31, 38～39, K 6・K 7	9基
V 支群	32～37, K 4・K 5	8基

各土墳は一見不規則な方位を示しているかに検えるが、いずれも地山等高線に対して、直交するかまたは平行している。I 支群は、小児用と考えられる第3土墳のほかは、すべて、同大同巧に掘り込まれ、グループ間での大きな個体差を示さない。II 支群は、中に鉢器または玉を埋納する土墳を含み、枕石を有するものとならないもの、小口石積みを有つもの等の差異をもつ。III 支群は、相対的にやや巾広のプランをもち、床面に頭部を両小口において差し違えた形に複数埋葬が推定される2対の枕石をもつものが多い。なかに大型の土墳で、二重掘り方をもつものを含む。IV 支群、V 支群ともかなり大型土墳を含み、特にV 支群では配石墓となっている。

このような土壙墓および支群が、どのような関係をもって構成されたものか、明確にすることはできなかった。各支群間に時期差を示す、積極的な要素は検出せず、出土する土器からみても、ほぼ併行的に各グループの埋葬は行なわれたらしい。

〔土器棺〕

土器棺は、いずれも棺として当初から意識的に作成されたものではなく、日常の土器類が利用されたものである。K 2からK 7の6土器棺が見出され、K 3のように弥生後期初頭と推定されるもの、K 7のように群集墳盛行期（6世紀後半）と考えられるものも含んでいる。したがって本遺跡成立以前、および以後においても、若干の埋葬がおこなわれていたということができる。

〔溝状遺構〕

溝状遺構は、いずれもいわゆる溝といつよりも、抛物線上の横断面をもった大型の縱長掘り込みである。土壙内の埋土が有機質を含まない地山マサ土であるのに対して、これらの溝状遺構は、炭・灰・有機質を含む暗灰色土で埋まっている。各溝状遺構とも、底部に土器溜り状に土器片が検出され、上部まで逆離して散見された。このことは、これらの溝が意識的に被土を行なって埋め戻されたのではなく、かなりの時間的経過をもって、自然に埋土した可能性を示すものと思われる。またこれらの溝状遺構内に、当該地山に置しない人頭大の石材が散見され、部分的には意識的に置かれた状態を示していることが注目された。

溝状遺構内の土器はC遺構底出土の鼓形器台のほかは、すべて破粹された小片となって検出されK 1の特殊壺の破片が、A・D溝内でも発見されるという例も見られた。A溝出土の土器は、弥生後期と推考されるもの数片および須恵器片若干を含むが、大半は酒津式と併行する。B・D遺構は酒津式またはそれをやや降ると思われる、ほぼ单一時期に限られる。C遺構は、酒津式併行から後

期古墳に伴なう須恵器まで含めて出土するが、量的には酒津式併行の土器片が圧倒的多量を占める。これらの土器片が、本遺跡土壤群の葬送祭祀に伴なうものとするならば、造営年代を推定するうえで、大きな手がかりとなりうるものである。

溝状造構のうち、特にB造構は土壤群營造の過程で埋土し、その掘り方方にさらに土壤がつくられているが、発掘の際層位的に数個所、平面をもった朱の広がりを見出し、何らかのベースが存在したこと暗示していた。あるいは当溝状造構内に、何人かの遺体が埋葬された可能性を示すものかもしれない。

溝状造構のもつ意義および機能について検討は試みたが、結論的なものは何も得られなかった。ここでは事実資料の提供にとどめ、今後の課題とした。

〔土 器〕

本遺跡出土の特殊器台・壺の編年観からすると、向木見型と宮山型の中間、やや宮山型に近い特徴を示す。また各発掘区出土の土器片が、いわゆる酒津式土器とはほぼ併行する時期のものが圧倒的多量を示す。

〔副葬遺物〕

副葬遺物を作り理葬施設例は少なかった。また、例え埋納していたとしても、小鉄器1点とかガラス玉1個というように極めて少数である。しかし道路工事中に発見された小形彷彿鏡と合せて、全体的にみると、鏡、鉄劍、鐵鏡、鏡、管玉、ガラス小玉等を副葬し、棺外供獻物として、特殊器台・壺・載形器台等小器台・高環・壺等をセットする理葬が行なわれたことが推察できる。しかしながら各土壤がかなりの時間的経過の中で行なわれ、何時の時点と一時期を画してのそれが追求できないのが現念であった。

〔支群間の関係〕

前項でも述べたように、本遺跡の墓群は、その立地や内部構造の共通性等から、8~10基からなる5支群に分けられる。各支群が夫々独自の構成単位ごとに、他の支群と併存関係をもしながら埋葬されたのか、あるいは、全体が一つの共同体の墓地として、年代を追って墓域を拡げ本遺跡が構成されたのかが問題となる。

各支群に伴なう土器棺を一つのメルクマールとしてみると、Iに伴なうK3が最も古く、IIIのK2、IVのK6が酒津後半、ついでVのK4・K5の順となる。立地からみると、Iは4溝状造構に囲まれた中心のまとまりをもった高台に立地し、IIも4溝状造構の範囲内にある。IIIは部分的にはB溝の上に立地し、B溝の掘られた時期より後出する可能性をもっている。IV・Vはこれら溝状造構とは直接的にかかわりのない地域に存在するが、Vはその東側に対して、列石を施設して区画している。構造的には、Iが土壤間に個体差を示さず、ほぼ共通の理葬形態を示しているのに対してII~Vは夫々より大きく深い、更には小口石積み(II)、配石(V)、二重掘り方(III)等の、グループ内でより厚く葬られた被葬者の存在を物語っている。副葬遺物についてみると、I・Vは遺物な

し、Ⅱは小型仿製鏡、ガラス玉、小鉄器、特殊器台・壺を出土する。Ⅲは小鉄器を伴なうが玉を有しない、その反対にⅣは管玉・ガラス玉を伴なうが鉄器を伴なわない。

同一墓域内に埋葬されたこれらの各支群は、土壙という共通の埋葬様式をもっているが、細部についてみると、上記のような差異と特徴を示す。

このことが、夫々の支群の時期差であるのか、また併存しながらの個体差であるのかが問題となり、検討を試みたが結論は得られなかった。

土器棺は、埋葬過程の中での一時期を示すものであるため確証とはならない。各発掘区内で出土した土器片についても、酒津式併行期ないし、ややそれと後出するものであり、各支群間の決定的な年代差を表わすものは認められなかった。大胆な推論が許されるならば、Ⅰがやや先行して埋葬が開始され、Ⅱ～Ⅴは多少の早遅はあるものの併行的に葬送が行なわれたものと考えられる。

〔時期〕

個々の土壙が遺物を伴なわないとはいっても、遺物を確実に伴なう、第10土壙、第24土壙や土器棺、および溝状遺構内の土器群の特徴からみて、酒津式土器と併行するものと考えられる。出土土器のうち、疊形器台および高環等の幅年齢からすると、先に報告した用木古墳群第4号墳、および第3号墳にやや先行する。したがって本遺跡は、当該地域においてまさに定型化した古墳が発生する直前の土壙墓を中心とした遺跡であると推察する。

〔むすび〕

当遺跡の西南約300m、同一丘陵尾根鞍部（標高82m、当遺跡との比高約30m）には、当遺跡より明らかに先行する、71基の土壙群で構成される四辻遺跡が立地し、さらに南方谷水田一つへだてた丘陵尾根（標高92m～60m）上には、用木古墳群が指呼の間に望見できる。

このことは、同一地域において、古墳の発生から發展への問題、換言すれば、吉備国における前期古墳の出現と、歴史的過程を貫してとらえ得る遺跡群の一部を構成するものである。

註

1) 神原英朗「用木古墳群発掘調査概報」

岡山県當山農新住宅市街地開拓事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(1) 1971年

2) 1971年岡山県教育委員会文化課調査、中間報告近刊の予定、弥生後期および古墳期の窓穴住居址を中心とした聚落遺跡であるが、本遺跡と直接の併存関係は認められなかった。

3) 註1に同じ

4) 高橋謙「児島市向木見遺跡発見の二、三の遺物」考古学手帳12 1960年

5) 註4に同じ

6) 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」考古学研究51 1967年

7) 註6に同じ

付記

本報告書作成後、便木山遺跡の東北に接して更に方形合状墓、および土壙墓が発見された。特に方形合状墓は本遺跡C溝状遺構を共通の境界とするため、C溝状遺構出土の土器は、或いは合状墓に伴う可能性も有する。調査後稿を改めて報告したい。

惣図遺跡発掘調査概報

1. 立地

惣図遺跡（略記号Y7）は、岡山県赤磐郡山陽町大字岩田字惣図に所在する。

岡山県山陽新住宅市街地開発事業による、住宅団地が造成されている東高月丘陵地のほぼ中央部に、同造成予定地内の最高位でもあり、また用木古墳群第1号墳の立地する丘陵鞍部（標高92m）がある。この鞍部から、小さな谷によって剖析され、多くの支脈を分岐しながら、ゆるやかに下降する丘陵が広がっている（図32、図版16）。

本遺跡は、これらの丘陵支脈の一つ、南に伸びた巾狭の馬背尾根の稜線上に立地している。遺跡は標高約70mから60m、南北約70m、東西約35mの範囲にあり、眼下の岩田大池を含む谷水田との比高約30mを測る（図33）。当該地の尾根稜線の傾斜角度は平均5度、部分的にはかなり急なところもあって、堅穴式住居を含む集落としては決して悪まれた条件とはいえない地域である。

本遺跡の周辺は、まだ十分な調査が進んでいるとはいえないが、外表観察の結果、用木第1号墳の立地する山頂部から、南西方向に広がる丘陵地一帯には、弥生中後期を中心とした土器類や石器類が検出され、かなり広範囲にわたる遺跡の存在が推測される。

そのなかでも、用木第1号墳発掘調査の際、発見された墳丘下の堅穴式住居址は、標高90m、谷水田との比高60mで、高地性集落の特徴を示している。その地点から本遺跡までの、尾根稜線および南面する緩斜面には、弥生土器を多量に含む包含層が見られ、本遺跡と一体をなすものとも考えられる。さらに南方丘陵鞍部、岩田大池の北外周部の波打ちぎわでは、約200mにわたって、數十cm巾の遺物包含層が露呈し、丘陵中腹部の尾根や、斜面からは壺・甌などを利用した墓地群と推察される遺構も認められている。

また本遺跡の南端、丘陵尾根突端部には、本遺跡の遺構の一部を切って築造された、岩田第5号墳が立地している。

2. 調査前概況

当該地は、住宅団地造成計画が立案されるまでは松林であった。雑木や下草も繁り、見通しも悪いこともあって、当初の分布調査の際には、遺跡として確認できなかった。その後立木の伐採と、それを撤去するための假設林道が敷設された段階で、再度現地の調査をおこなった。

立木を切り払った現地は、花崗岩の風化土を基盤として形成され、巾狭な馬の背尾根でかなりの流土が予想され、また部分的には、地区民の採石場となり、深く掘り込まれていたり、砂防植林の段が設けられて、原地形を大きく変容していた。南に下降する尾根は、中間部にやや平坦部をもち、その南北の稜線上に直列状に数か所の低平な高まりがあることが認められた。これらは調査の結果尾根傾斜面に階段状に掘り込まれた堅穴式住居址群の床面水平部と、住居址間に残された自然地形との関係によって生じたものであることがわかったが、その時点では遺物も検出されず、



第32図 慈國遺跡周辺地形図

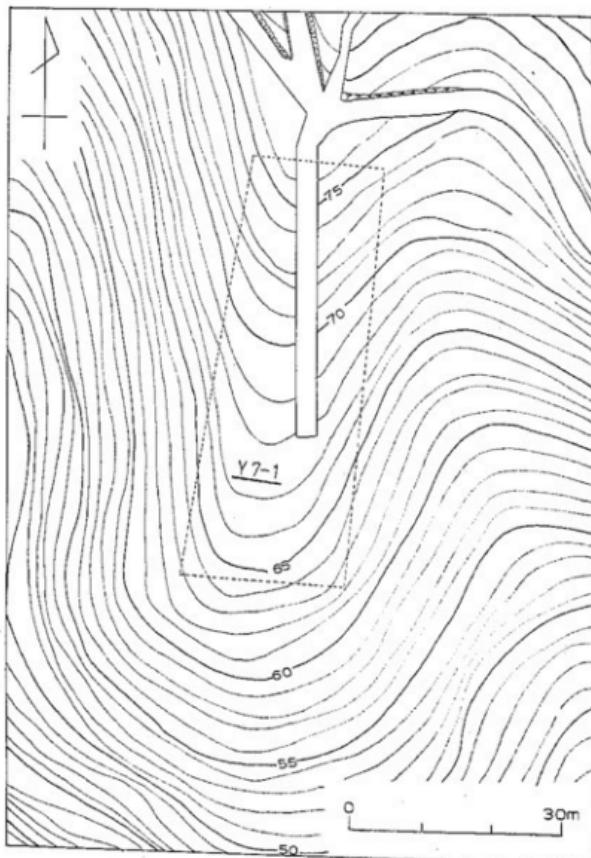
気がつかなかった。当該地が住宅団地内の中央幹線道路の敷設予定地であるため、とりあえず低平な小円墳群として、発掘調査を開始したのである。

3. 各遺構の素描

本遺跡の立地する丘陵尾根部が傾斜を増す肩部まで全掘する調査の結果、本遺跡は当初の予想と異なり、弥生中期末から後期前半にかけての、竪穴式住居址を中心とした集落遺跡と、蔽骨器に納めた、奈良時代の墓地が複合していることがわかった。

当地は前述したような、地質的・地形的条件によって、表七層の流土が著しく、各遺構の保存状態は良好ではなかった。

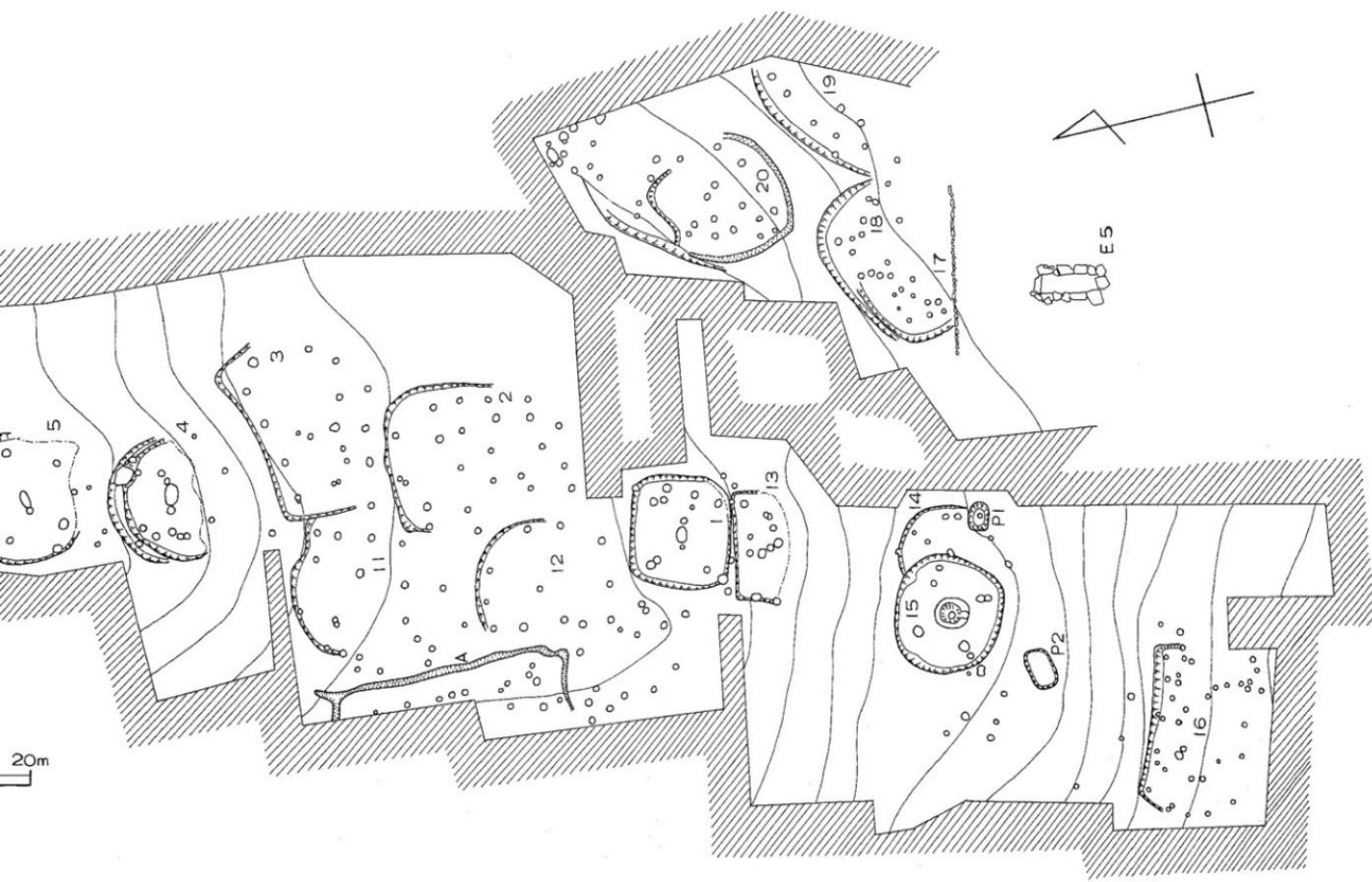
現存する地山の生き土上面で、すでに住居址床面を流失し、僅かに残る柱穴痕の配列から、はじめてそれと推察されるものもある。また竪穴式住居址壁部掘り込みや床面を残すものについても、地形の低い南半部の床面を欠くものが多く、床面をほぼ完形に保つものは、2例のみである。掘り込みや柱穴の配列等から、住居址と確認できるものは24戸分であるが、組み合せ不明の柱穴痕が多く、また岩田5号墳構築のための削平部、および、後世の採石場などによって消滅したものなど、住居の存在した可能性を考慮に入れると、実際には30戸前後の住居址群で構成されていたものと考えられる。本



第33図 慈園遺跡地形図



第34図 惣園遺跡発掘区全図



遺跡から発見された遺構は、前記住居址の他、ピット2、溝状遺構3である（図34、図版17）。

これらの住居址のうちには、その掘り込みがたがいに切り合っていたり、同一地点で建て直しが行なわれ、同心円状の二重掘り方をもつものなど、明らかに先後関係を有するものもあるが、地質的な層序がつかめず、また堅穴掘り込みの上部構造も欠損しているため、それらの時期差等について知ることができなかった。

各遺構の先後関係や年代を知る今一つの手がかりとなる、伴出遺物についても、各住居址の床面をも含めての出土が著しくて、その多くは二次堆積となり、天地が混同され、土器片や石器のほとんどが遊離して発見されるため、直接遺構と関連づけて考証できなかった。したがって本遺跡の場合、丘陵尾根上およびその縁辺部を中心に、約30戸の堅穴式住居が、あるまとまりをもって存在していたという平面的な観察しかできなかった。

なお、本遺跡の各遺構の記号は、当初トレンチ発掘、中途からグリッドによる平面掘りへと変更したこともあって、その番号がかなり入り乱れているが、遺物の整理等がねくれ、時間的に修正が間に合わず、調査時につけた仮記号をそのまま使用し、原則としてその番号に従って記述する。

1号住居址

南に下降する丘陵尾根が、本遺跡のほぼ中央部で傾斜をゆるめ、尾根巾もやや広まり、南北約18m、東西約16mのテラス状の平坦部を形づくっている。1号住居址はこの平坦部の南端に近く、さらに下降傾斜に向う肩部の尾根中心線上に立地している（図35、図版18）。

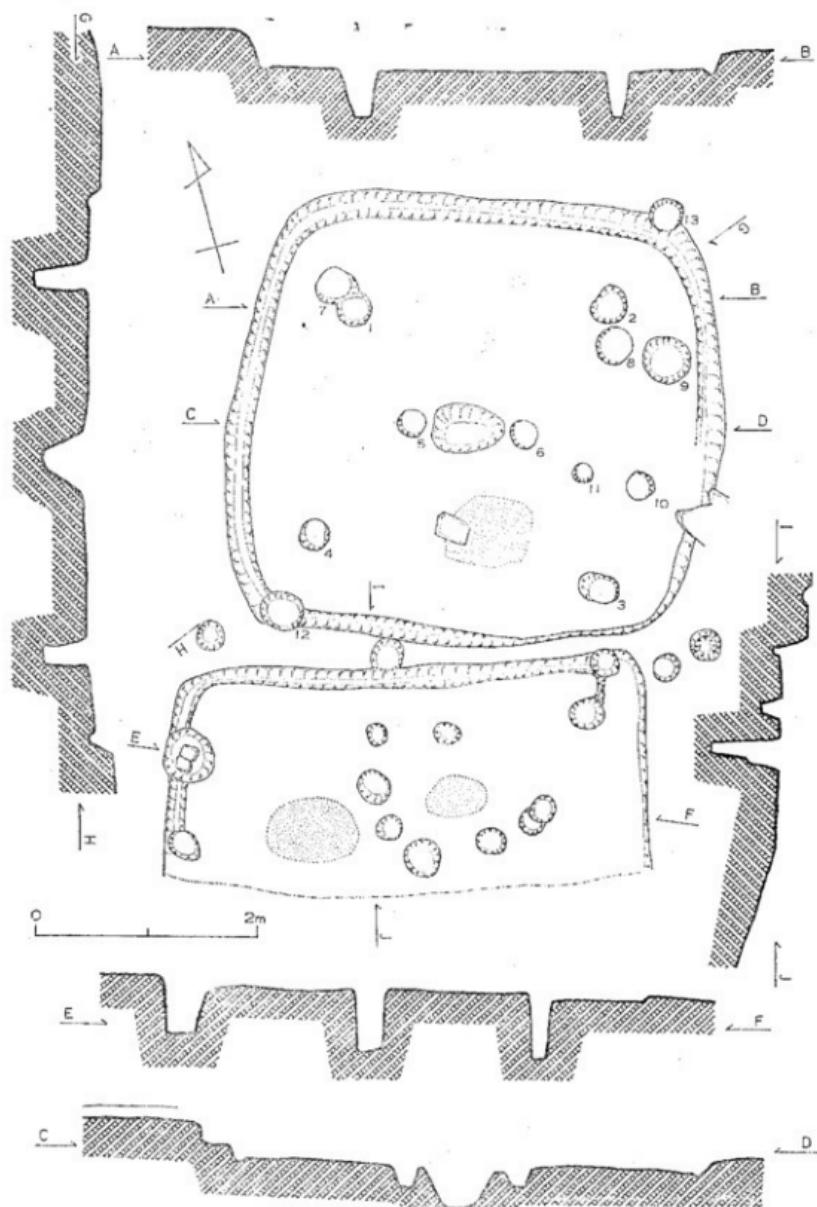
1号住居址は、丘陵尾根に直交方向に長辺を置いた、開丸長方形の堅穴住居址である。現存地山掘り込み上面で長径4.53m、短径4.03mを測る。掘り込みは部分によって多少のちがいがあるが、ほぼ垂直に近い傾斜で掘られている。その深さは、地形の低い南側では殆んど底部を流失して、堅帶構によってその輪郭を知る程度で僅か床面より4cmを測る。地形の高い北側では、現地表面から床面まで56cmを測るが、掘り込みの確認できるのは、床面から24cmまでで、掘り込みの上端を知ることはできなかった。

床面はほぼ水平につくられ、堅く踏み固められている。東南隅に近い東壁部で地山の岩盤である花崗岩を、一部掘り残しているのが注目された。床面のまわりには、巾10~15cm、深さ4~6cmのU字溝がめぐらされている。この周溝を含めての掘り込み床面の範囲は、4.20m×3.75mで、およそ16m²となる。

柱穴は、床面11、南西隅と北東隅にそれぞれ掘り込みと切り合う各1の計13が発見されたが、本住居址に直接伴なうものは、中央部長軸線上の2と、掘り込みの対角線上にある4の計6と推察される。すなわち、第34図および表5に示した、5・6・1・2・3・4の柱穴がそれにあたる。対角線上にある4つの柱穴はいずれも、それぞれの隅から約50cm~65cmのところに、径30cm~38cmの円形のプランをもって、ほぼ垂直に床面から約40cm掘り込まれ、規模や形状に共通点をもっている。また中

付表5
1号住居址柱穴計測値
(単位cm)

柱番号	床面掘り込み径	深さ
1	33×34	45
2	29×34	43
3	30×38	37
4	25×31	40
5	25×25	20
6	25×26	18
7	34×35	24
8	33×36	15
9	44×44	25
10	25×29	32
11	16×20	16
12	37×38	11
13	30×31	20



第35図 1号・13号住居址実測図

央部長軸線上の2つは、柱穴中心部間の距離1m、径25cm前後の円形プランで、床から約20cm掘り込まれた、やや小形で浅い柱穴である。本住居址は、これら中央部2本、対角線上に建てられた4本の柱の組み合せによって建てられたものと推測される。他の柱穴については規則性が認められず、おたがいの関連もつかめないため、その構成を明らかにできなかったが、10番の柱穴は、段状に掘り残された岩盤およびその部分に壁帶溝が切れていること等から、あるいは出入口に伴なう柱としての可能性をもつこと、および7・8番は同一掘り方、またはそれに近い立地で、建て直しが行なわれたことを想起させるものであることなどが注目された。

これら柱穴の他に、床面のほぼ中央部、長軸線上の2柱穴にはさまれて、長径(東西)66cm、短径43cmの楕円形プランをもち、床からの深さ37cm、断面形が抛物線状を呈する穴状構造が検出された。これは建物の構築に関しない、住居址内の貯蔵穴的なものと思われる状態であった。

炉と思われる施設は特になかったが、中央の穴状構造の南に20cm×60cmの範囲でやや不整形な長方形状に、床面が焼けて固くなっている部分があった。

住居の外部は、その一帯を全掘して調査したが、流土が甚しいこともあって、特別な施設は見られず、出入口についても不明である。

本住居址に伴なう遺物として、堅穴掘り込みから、泥板岩製の小砥石2個および高环・蓋・甕等の土器片が採集され、床面に接して若干の土器片を発見した。しかし地山掘り込みが、最高で24cm、平均12~13cmと流失し、2次堆積の可能性が強いため、直接本住居址に作出する遺物として、取り扱うには危険性が強いようである。

13号住居址

1号住居址のすぐ南に接して建てられた、圓丸方形の堅穴住居址である。地形の低い南半部は、すでに床面下まで流れ、かなりの傾斜面となっていた。長さの計測できる東西長で、現存地山掘り込み上面で4.35m、壁帶溝を含めての床面巾4.26mを測る。床面はほぼ水平につくられているが、南北長水平部は、北壁から1.7mがほぼ原状を残していた(図35、図版18・22)。

掘り込みの深さは、最もよく残る地形の高い北壁部で、現表土より床面までが42cm、現存地山掘り込み上面より床面の深さ24cmである。したがって、表土層は流失し上部構造は確認できない状況であり、また現表土層は2次堆積の要素が強い。床面現存部では、そのまわりに掘り込みにそったU字溝がめぐらされていた。部分的な差異はあるが、巾6cm~10cm、床面からの深さ3cm~6cmである。

柱穴は掘り込み内に12、掘り込み外北側に4の計16が検出されたが、規則性がつかめず、本住居址に伴なうものと確認できなかった。大きさも、大は直径46cmから、小は18cm、深さについても12cmから52cmとさまざまであり、たかが切り合ったものも存在した。1号住居址との間隔が狭いところでは、わずかに15cmしかなく、1号住居址と2号住居址が、同時に存在していた可能性はきわめて薄く、また、因縁不明の柱穴が1号住居址にもあることから、現在では痕跡が明らかではないが、この両者にまたがる建物が存在した可能性も強い。

そのほか本住居址の床面上に2か所、赤く焼けて硬く固まった面が検出され、炉あとと想定し

た。

伴出遺物については、これといって特筆するものは検出されなかつたが、掘り込み土刷および床面から若干の土器細片と、サスカイト片8片が採集された。

1号住居址と13号住居址の先後関係については、検討したが知ることができなかつた。床面比高は1号住居址の方が、12cm高位にあつた。

2号住居址付近

本遺跡のはば中央部に形成された平坦部の、約15m四方の範囲から、計107ものぼる柱穴址が見出された。この地域は現地表下18cm～20cmに地山生き土層があるが、流土が著しく地山上層部は追拂も含めて、かなり流失しているものと考えられる。したがつて、ここに住居址が存在していたとしても、その実際を確認することはきわめて困難である。

発見された柱穴の多くは、床面などからの掘り込み上端を確認し得るものは少なく、現存の地山生き土上面の精査で、はじめてその存在を知るのであって、深さも10数cmから60cmとまちまちである。柱穴の規模・形状および配列関係などから、共通性をつかみ、幾つかのグループを試みたが、あまりにも機械的になりすぎりきらいもあって、確認できなかつた。

しかし、本遺跡の中心部でもあり、最大の尾根巾をもつこの平坦地に、集中的に柱穴址が検出されることは、この集落の中心施設としての建造物の意義と、數次にわたる建て直し、および整地がなされたことを意味するのではなかろうか。

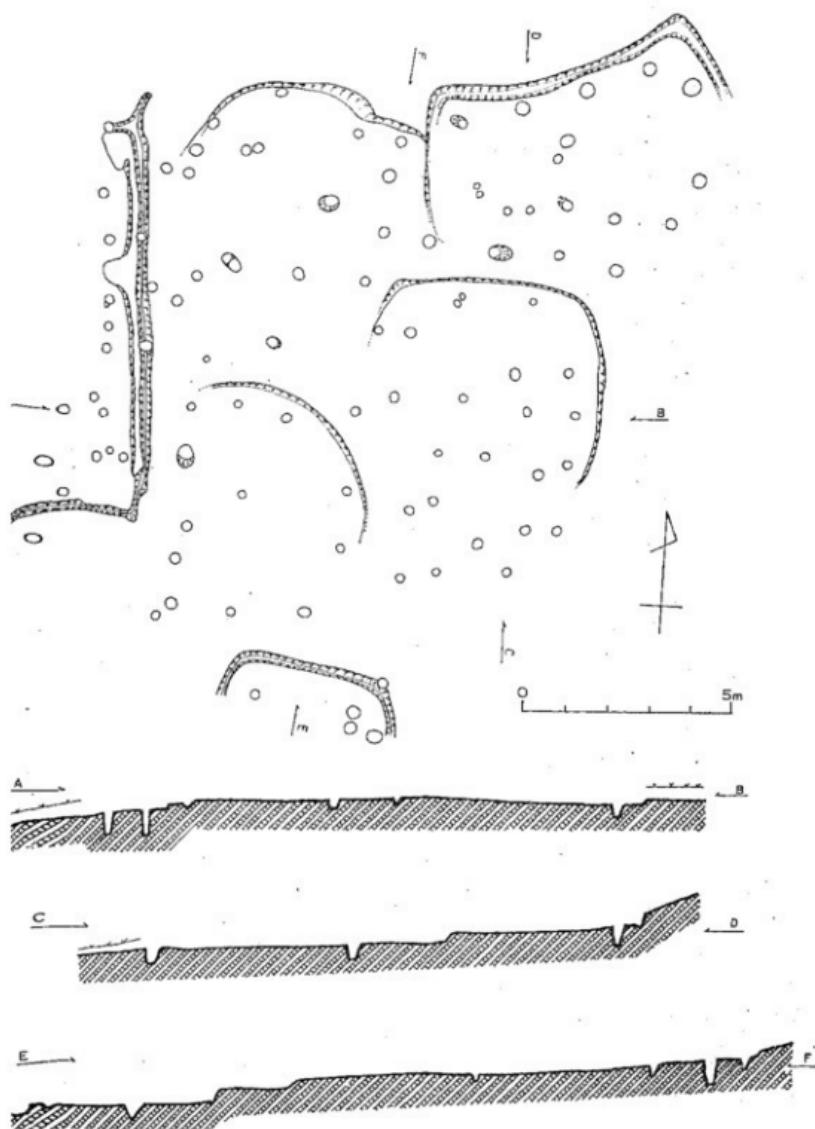
調査時において、堅穴式住居址に限らず、高床の建造物の可能性も含めて、検討をくわえたが、その確証をうることができなかつた。発掘に際して、この地域内に地山を掘り込んで、堅穴式住居の壁状の痕跡を残すものが4か所検出された。平坦部の面積なども考慮に入れて、この地域には、最低4戸の建造物が存在していたであろうと、2号住居址、3号住居址、11号住居址、12号住居址を想定した(図36、図版18・27)。

なおこの平坦部の西端、西に下降する急斜面にのぞむ肩部に、尾根稜線と平行する溝状遺構が検出された(図版27)。長さ10m、巾約30cm、深さ15cmのU字溝である。この溝の外側に棚列を思われるよう、直列状に8個の柱穴が発見され注目された。

2号住居址

1号住居の北北東約10mに、現存地山層をわずかに切り込んだ痕跡を残す。掘り込みの深さは、地形の高い北部で約4cm、東側および西側は、南に行くにしたがつてより浅くなり、西側は約1m、東側は約3mで消滅する。形状は開丸方形を呈し、東西長は床面で約5.2mを測る。床部は水平であるが、原形ではない。柱穴の配置をはじめ、諸施設については不明である。

2号住居址の範囲および周辺からは、弥生式土器片がかなりの量採集されたが、柱穴掘り方上面にもあたる、現存地山生き土上面に密着して1個体分の塊が、一括破碎となって検出された。さらに本住居址内床部およびその上層から、石歯3、扁平片刃石斧1、磨製石庖丁1、打製石庖丁2、サスカイト細片139、ならびに炭化した桃の実1個を発見した。



第36図 2号住居址周辺部実測図

3号住居址

2号住居址と接して、その北側に位置し、尾根中心線に西壁を置いて、11号住居址と並列に立地する。遺構の現存状態は悪く、北壁および東壁・西壁の一部が認められ、床面も南半部は流失し、北壁から約1.5mが水平面として確認できる程度である。

北壁の現存高約40cm、北壁部での東西長は6.87mを測る。東壁・西壁ともに約2m前後で低まり消失しているが、南に行くにしたがって低くなっており、本来の壁であるのかどうかは不明である。現存する床面のまわりには、巾20cm前後、深さ6cm前後のU字溝がめぐり、隅丸方形の堅穴式住居址であったと推定される。北壁部が多くの住居址の例に見られるように内向するのではなく、逆に外反していることが注目された。

柱穴は、この住居址掘り込みの範囲内に計17本が検出されたが、配置関係はつかめなかった。北壁外反に合せて、それと平行に直列する4本の柱穴が、それぞれ壁底部から30cm柱間隔をほぼ等距離に検出されたのと、東壁部北寄りのところに、これと同条件の掘り込みをもつ柱穴1が、直接この住居址に伴なう明らかなものである。

伴出遺物は、掘り込み内から避離して出土した土器片少量の他、床面に接して均整のとれた蛤壳石斧1が発見された。その他、軒などの諸施設については、全く不明である。

11・12号住居址

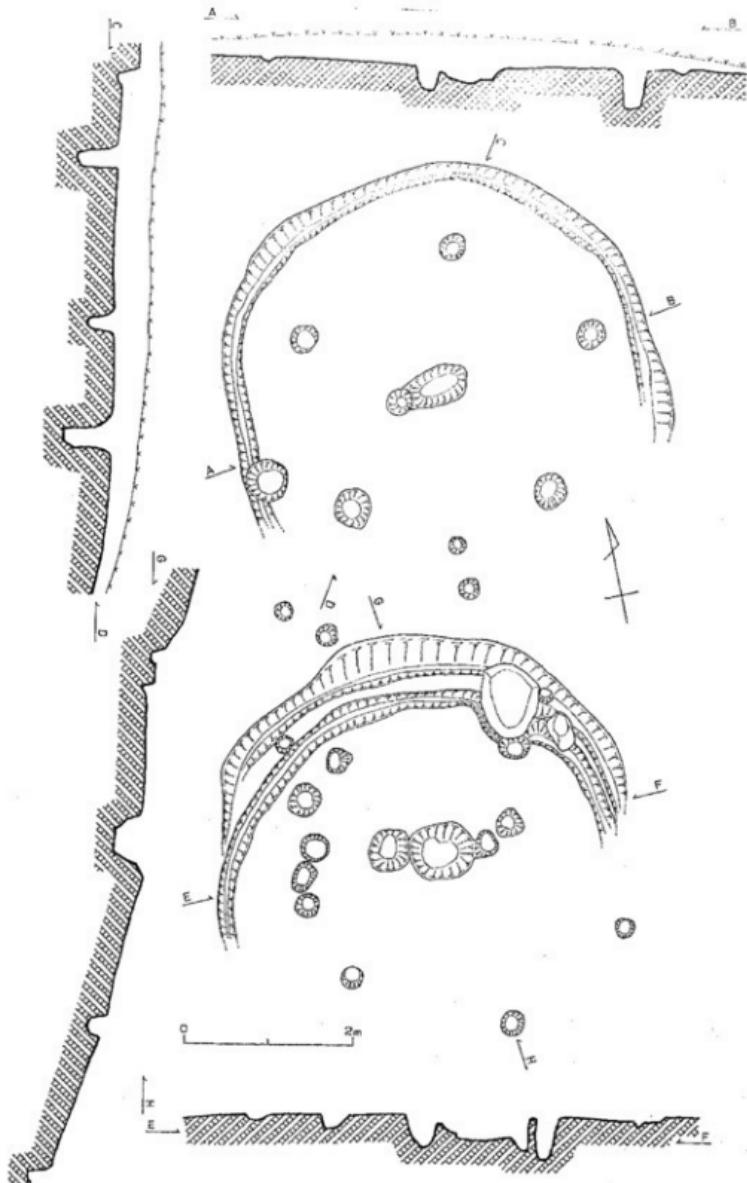
3号住居址および2号住居址の西側に接して、夫々地山に掘り込んだ形跡のある段状部が見出された。いざれも整然とはせず、掘り込みの深さもきわめて不均衡で、柱穴との関連もつかむことができなかつた。ただここでは前述もしたように、堅穴式住居址状に地山を掘り込んだ形跡が残存していることを唯一の手がかりとして、一応住居址として取り扱い、北側を11号住居址、南側を12号住居址としたに過ぎない。したがって保存状態もきわめて悪く、詳細についてはすべての点で明らかにすることができなかつた。

4号住居址

2号住居址を中心とする地域の平坦部は、3号住居址の北壁部の掘り込み付近から、尾根巾が急にせばまり、傾斜角度も強めて北に高い尾根となっている。この尾根稜線上に南から、4号住居址、5号住居址、6号住居址、9号住居址の4堅穴式住居址が、あい接して直列状に並んで立地している(図37、図版19)。

4号住居址は、同一立地で再建が行なわれたらしく、ほぼ同規模の二つの堅穴式住居址が、南北に約40cmずれた形で、二重の掘り方をみせている。いざれも南半部を床面下まで流失し、また掘り込み上端も不明のため、その先後関係は明らかにできなかつた。重なりあった二つの住居址は、地形の低い南側の住居址が、北側住居址に比して、約8cm深くつくられている。

住居址の堀部は両者とも、北から約2分の1程度認められるが、南に行くにしたがって低まり消滅している。現存掘り込み上面の様は、北住居址4.3m、南住居址4.35mで、いざれも円形プランを呈している。掘り込みの深さは、壁部が流れで斜行しているため、現存掘り込み上面から床まで



第37図 4号-5号居住址実測図

北住居址27cmを推測し、南住居址は、北住居址の床面と切り合っているため、約8cm深くなる。現地表との関連でみれば北住居址の深さ45cm、南住居址53cmである。

床面は、北住居址はほとんど南住居址の掘り込みによって切られているため不明であるが、ほぼ水平につくられていたものと考えられ、流上の影響を受けてか、南にやや低くなっていた。

床面のまわりの周溝は、床面の残存する北半部においては、両者共に認められた。いずれも巾15cm~18cm、深さ6cm~8cmのU字溝である。床面東北隅に、南住居址にまたがって、60cm×90cmの地山岩盤である花崗岩が、掘り残された形で露呈し、周溝もその部分を避けて、石材のまわりを内側に迂回させていたのが注目された。

柱穴は、住居址掘り込み内に14個存在する。床面の流失した南半部においても、地山に掘り込んだ柱穴址を確認できた。柱は尾根に直交する中央線上に2本、そのまわりを取り囲むようにほぼ等間隔に5~6本で構成されたものと考えられる。いずれも垂直に近く掘り込まれ、床面掘り込みから53cm~65cmの深さである。2住居が同一立地に複合して存在するため、柱穴のつながりの細部についてはつかめなかった。

住居址内のその他の施設として、床の残存する南住居址のはば中央部、中心線上の2柱にはきまるような形で、長楕円形のプランをもつ穴状造構が検出された。長径80cm、短径56cm、深さは床面から35cmで撫物線状の断面形を示す。さらにこの穴状造構の南床面上に、40cm×35cmの不整形な焼けて硬く固まった、炉址面が1か所確認された。

遺物は、弥生式土器片が散見された他、砥石1、石蔵2、磨製柱状片刃石斧1、サヌカイト類片38が採取された。そのほか、当地から鉄滓の小塊6を検出した。

5号住居址

4号住居址の北にあい接して、尾根中心線上に立地する。地形の低い南半部を約3分の1ぐらい流失しており、保存状況は良好とはいえないが、流失部においても柱穴址が確認され、ほぼその大要を知ることができた。

東西径5.07mの円形プランをもった竪穴式住居址である。現地表から床面までの深さ45cm、地山掘り込みの深さは、北壁部現で約20cmまで測れる。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南半は流失し、さらに上端もつかめず、保存状態はよくない(図37、図版19)。

床面は水平につくられ、残存する北半部ではよく踏み固められていた。床面のまわりに壁内側にそって、巾14cm~16cm、深さ5cm前後の周溝がめぐらされていた。このU字溝をふくめての床面東西径は4.92mで、面積は約20m²と推定される。

柱穴は、床面および掘り込み内に9個発見されたが、本住居址に直接ともなう柱は、中央部穴状造構の西にある1つと、壁底部より約80cm内側をほぼ等間隔で円形に存在する。2~6の5本の柱によって構成されていたものと考えられる。これらの柱は、いずれも40cm前後の径をもつ円形で、床面からほぼ垂直に47cm~65cm掘り込まれたものである。柱穴間の距離は、中心距離で最小2m、最大2.35mを測る。

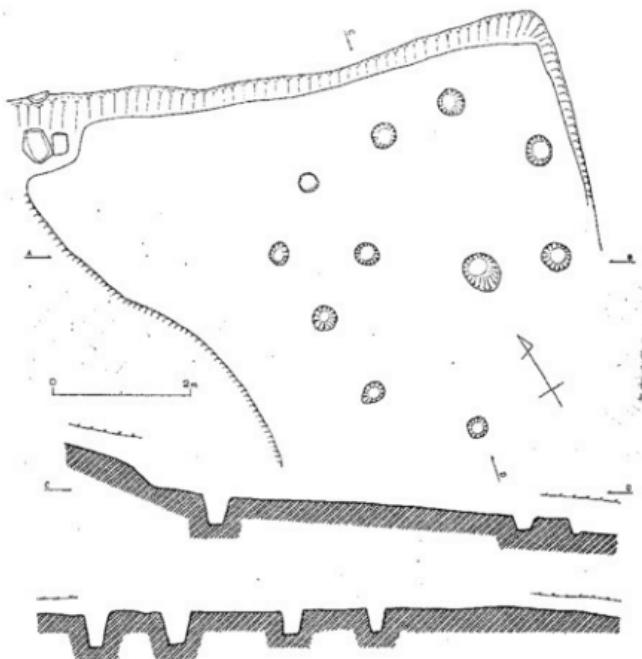
住居址内のその他の施設として、床面のはば中央部に、東西に長い楕円形のプランをもつ穴状

遺構が検出された。長径70cm、短径45cm、深さ18cmを測り断面形は拋物線状を呈する。さらにこの中央穴状遺構の南に接して、80cm×40cm程度の橢円形状に床面が赤く焼けて、硬く固まった面が検出され、炉跡を想定させる。

伴出する遺物は、少量の弥生式土器片が掘り込み土内から遊離した形で散見された他に、石鏃2、扁平片刃石斧1、石庖丁1、サスカイト細片5を発見採取した。しかしいずれも床面に密着しておらず、直接本住居址に伴なうものと断定できない弱さをもっている。また直接本遺跡と関係ないが、鉄鋤1塊を検出した。

付表6
5号住居址柱穴計測値
(単位cm)

柱番号	床面掘り込み径	深さ
1	32×34	15
2	36×40	48
3	40×44	55
4	44×47	62
5	34×36	47
6	52×54	23



第38図 6号住居址実測図

6号住居址

5号住居址の北に接して、丘陵尾根稜線上に立地する。地形の高い北側に縦状に約40cmの深さで東西に約7.6m掘り込み、その南側に小さなテラス状の平坦部をつくりだしている。この平坦部に一つのまとまりをもって、11個の柱穴が掘り込まれていることから、一応住居址として取り扱った

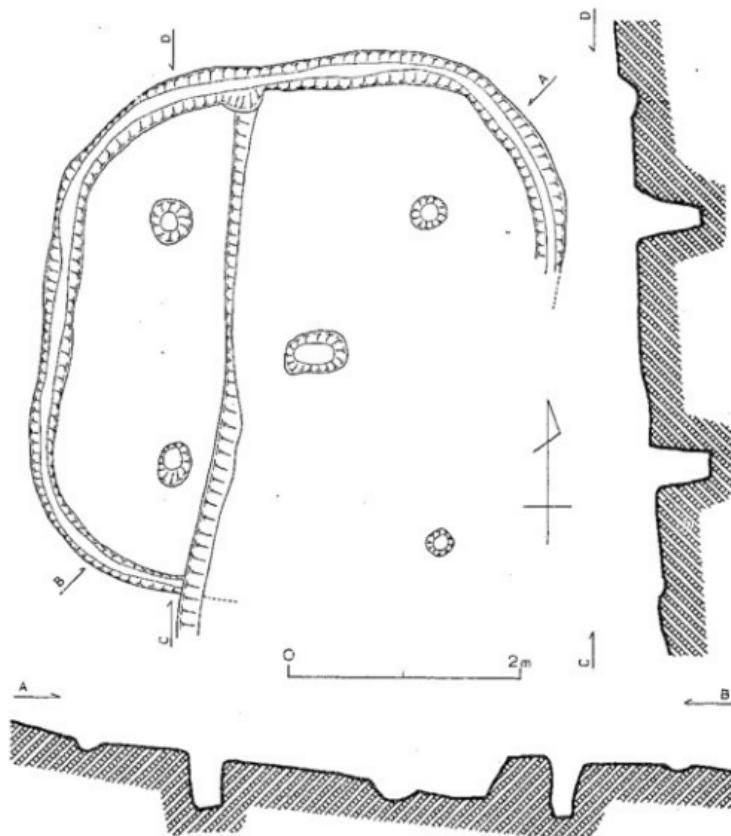
(図38、図版20)。

北側掘り込みはどちらかといえば、3号住居址の場合と同様に外反しており、柱穴の方は円形状のまとまりをみせている。床面は流失してしまったのか存在せず、竪穴式住居址に多くみられる、周溝や中央の穴状造構および焼土面も発見できなかった。したがって、掘り込みと柱穴群が、直接同一住居址として結びつくものかどうかも明らかでなく、その構造も不明である。

遺物は遊離した土器片の他は、何も検出されなかった。

7号住居址

6号住居址から北へおよそ12m離れて、尾根稜線から、東斜面に向う肩部に立地する。ここは本



第39図 7号住居址実測図

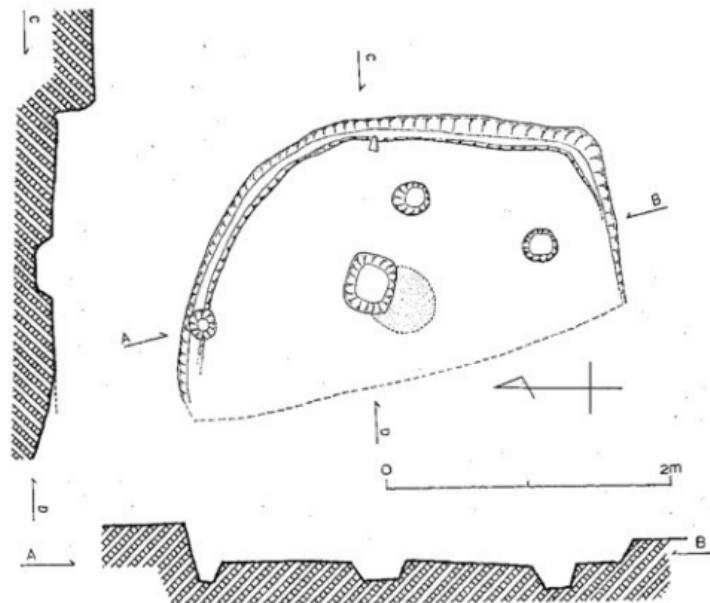
遺跡中最高位にあたり、北端でもある。造構は前述した木材搬出用に敷設された道路によって、その東部を約3分の2切断されていたが、幸い切り込みが浅かったため、周溝および柱穴痕によって、その大要を知ることができた（図39、図版20）。

本住居址は流土が著しく、わずかに床面とそれをめぐる周溝掘り込みによって、形状・規模を知る程度である。東西4.33m、南北4.3mの隅丸方形の堅穴式住居址である。床面は水平につくられたと思われるが、現状では、南にやや低くなっている。周溝は残存部の西溝で巾14cm～17cm、深さ6cm前後のU字溝である。柱穴は、対角線上に夫々の間から約90cmぐらいのところに計4個が存在する。いずれもほぼ同口径大で、直面に近く掘り込まれている。最も原記に近い保存を保つと思われる北西隅の柱穴で、径35cm×41cm、やや重んだ円形フランで、深さ55cmを測る。

柱穴のほか床面のほぼ中央部に卵形の穴状造構が検出された。床面が流失している部分であるため、掘り込みの全容は不明であるが、現存上面で東西径50cm、南北径36cm、深さ13cm、床面の現存する西北隅からの比深43cmを測る。伴出遺物、その他の施設については、保存状況が極めて不良のため、確認できなかった。

8号住居址

7号住居址の西方約3m、西に向う斜面に立地する。地形の低い西半部を、壁および床面とともに流失した、小形の堅穴式住居址である。掘り込みフランは南壁部では、隅丸方形状、北壁部では円



第40図 8号住居址実測図

形状を呈しているが、隅丸方形とするのが妥当のようである（図40、図版21）。

掘り込みの大きさは、計測可能な南北径で、現存地山掘り込み上面が3.17m、周溝部を含めた床面3.1m、深さは、最も保存のよい東壁部で、床面から28cmまで確認できる。床面はほぼ水平につくられているが、南半部は流失し、東壁から1.75mまでが現存している。床面の残る部分のまわりには、巾7cm～12cm、深さ4cm～6cmの周溝が掘られている。調査の際、この床面一帯から、炭化した木材が見出され火災による放棄を想定させたが保存の状態は不良で、詳細はつかめなかった。

柱穴は壁にそって3個検出されたが、いずれも東壁部のものであって、全体を知ることはできなかった。柱穴のほか東壁から約1m南北壁の中央部に、南北35cm、東西45cmの隅丸方形のプランをもち、深さ14cmの穴状造構と、それに接して南西側に径45cmの円形状に、床面が赤く焼け固まったが址が検出された。

伴出遺物は、床面に接して葬生式土器片2と、東周溝内から、打製石槍1が発見された。

9号住居址

6号住居址のすぐ北側の一段高まった尾根稜線上に立地する、小形の隅丸方形の堅穴式住居址である。そこは、かなりの傾斜面であるため流土が著しく、地形の低い南半部はすでに流失して斜面となっている（図版21）。

計測可能な東西で、現存掘り込み上面巾2.9m、床面巾2.78m、深さは北壁部で36cmを測る。床面はほぼ水平につくられているが、南は流土の影響を受けてやや低くなり、現存長1.3mである。周溝、柱穴、穴状造構、炉址などはすべて認められなかった。掘り込み理土中から炭化した桃の実1個が見出されたほか伴出遺物は存在しなかった。

10号住居址

9号住居址の東方約9mのところに立地する。そこは尾根から谷頭に向う、南東面の緩斜面でもある。地形の高い北および西に縫の手に地山を掘り込み、その東南部に平坦な小テラスを造り出している。10号住居址はこうした平坦部に掘り込まれた堅穴式住居址である（図41、図版22）。

南東に向けて下降する傾斜面につくられた住居址であるため、地形の低い南東部は床面をも含めて流失していた。また本住居址の西半部は、7号住居址と同様、林道仮設により削平され、その上部構造を破壊していた。したがって、本住居址の保存状況は極めて悪く、約2分の1残存する床面構造と、南東流失部に残る柱穴痕によって推定せざるを得ない。

本住居址は、残存する掘り込みの形状から推して、直径5m前後の堅穴式住居址と考えられる。掘り込みの深さは、掘り込み上端が難認できないため不明であるが、最も深く残る北壁部で21cmを測る。壁部はかなり斜行しているが、それは流土の影響によるものと推察される。床のまわりには巾15cm～20cm、深さ6cm～12cmのU字溝がめぐらされている。

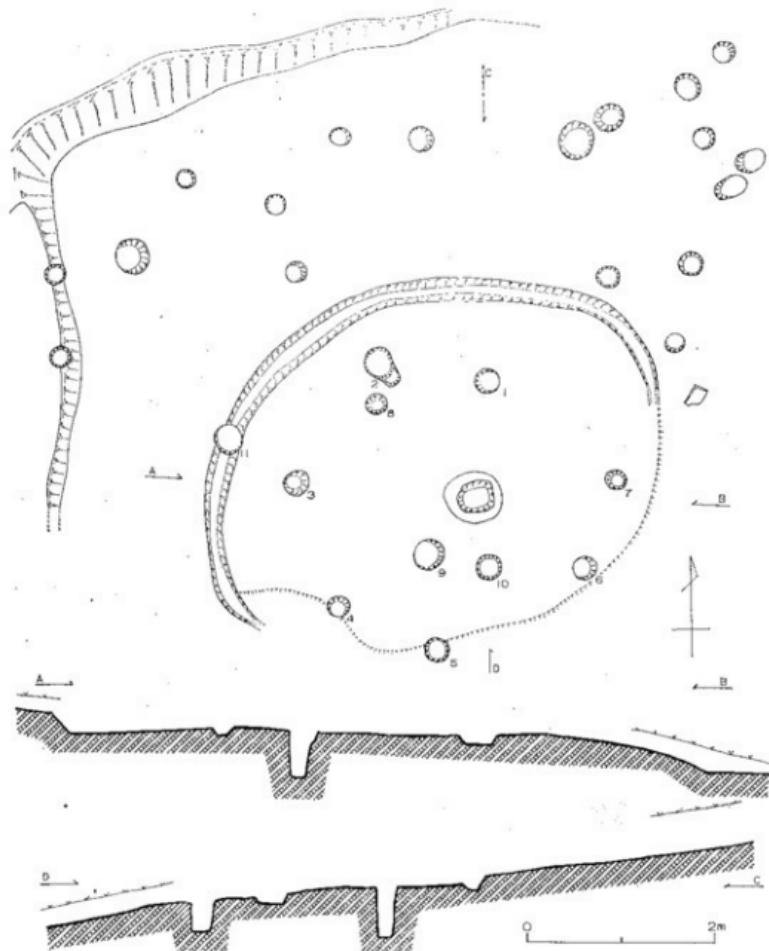
柱穴は、住居址掘り込み内から11個が検出されたが、そのうち各壁部から約50cm～80cmではほぼ等間隔で円形に存在する①～⑦が直接本住居址

付表7
10号住居址柱穴計測値
(単位cm)

柱番号	床面掘り込み径	深さ
1	25×27	56
2	34×35	44
3	25×26	50
4	19×20	20
5	25×25	19
6	24×26	46
7	21×21	32
8	55×66	10
9	33×33	28
10	27×30	36

に伴なうものと思われる。床面中央やや南寄りに、ほぼ東西に並ぶ⑨～⑩の2柱穴は、中央より南にずれており、他の住居址に多くみられる中央柱として、取り扱えるかどうか疑問がある。

柱穴のほかに、床面ほぼ中央部に隅丸長方形プランをもち、鉢形に掘り込んだ穴状遺構が発見された。これは単なる掘り込みだけでなく、その周囲を地山マサ上で、巾約10cm～15cm、高さ2cm～



第41図 10号住居址実測図

3cmの隆起を縁堤のごとくめぐらしていた。堤の外縁での長径62cm、短径56cm、穴掘り込み上端での長径40cm、短径35cm、深さ12cmを測る。径にくらべて浅いこと、およびその形状から推して、明らかに柱穴としての機能を果すことができない。なお本住居址残存床面からは、焼土面すなわち炉の痕跡は認められなかった。

次に本住居址との関連において、検討を要するものとして、本住居址の北および西を囲むような形で掘り込まれた段と、その間に存在する18個の柱穴群がある。

北側の掘り込みは、等高線に沿ってほぼ東西に、長さ約6m、平均の深さ約60cm掘りさげている。掘り込みの角度は垂直ではなく、地山傾斜にあわせて、約60度である。西の掘り込みは、地形の低い南になるにしたがって浅くなり、約4.5m、本住居址中央線付近でその掘り込みは消える。本住居址掘り込み上端との距離は、北掘り込み2.8m、西掘り込みまで1.5mである。この掘り込みは、柱穴の配置から考えて、独立した住居址とするよりも、10号住居址が傾斜面に立地する関係もあって、別にこれといった根拠はないが、それを建築するための整地として掘られたと理解する方がより妥当のようである。

住居址と、段状掘り込みの間に検出された柱穴は、これといって定まった配置状況は示していない。また東方今までの広がって、21号住居址周辺の柱穴群と連なるため、それらと合せての検討が必要であろう。ここでは、総体的に柱穴の深さが浅いこと、10号住居址よりのものには住居址の尾根構造もしくは外部施設と考えられるもの、あるいは、棚列的な色彩を示すもの等を列記するにとどめる。

本住居址および段状掘り込み周辺からは、土器片が遊離して出土したほか、小形磨製石斧1、始刃石斧（破片）1、石礫2、サヌカイト細片54を発見した。なお本住居址床面、中央部穴の西約25cmに、床面下約10cmにおよぶ土壌を掘り込み、奈良時代と思われる歳骨器壺が一基発見されたが、本遺跡と直接のつながりがないため、実測図の上では記載を省略した。

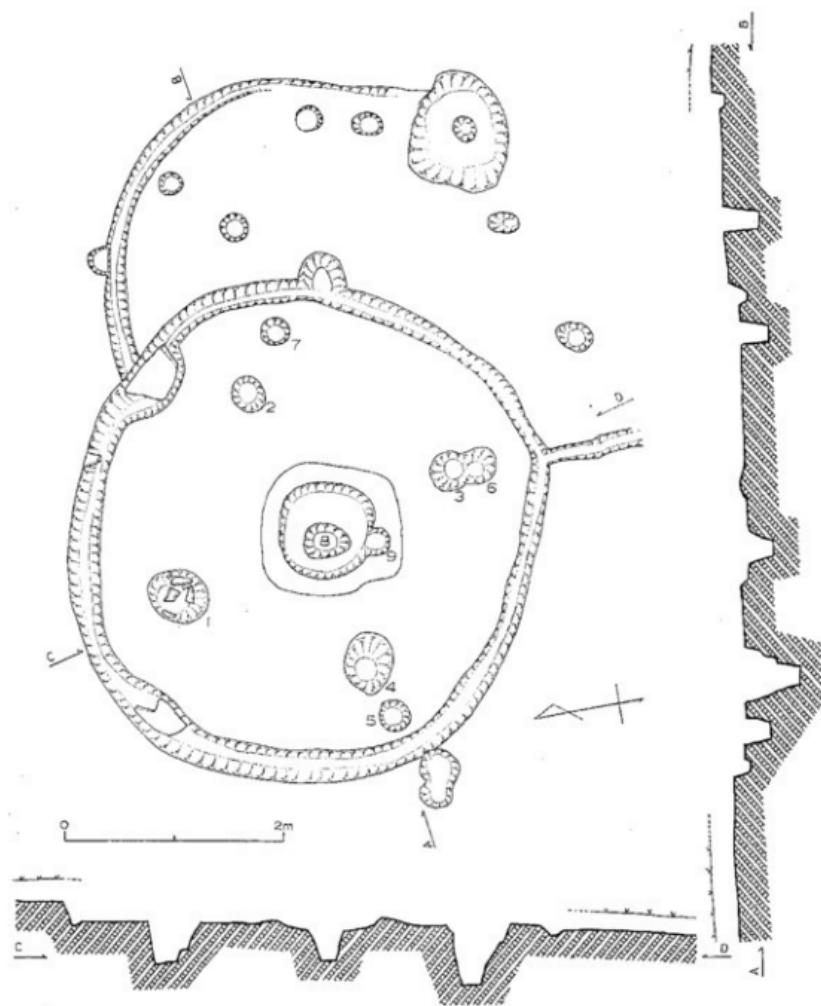
14号住居址

13号住居址の南約5m、比高にして約1m下方で、丘陵尾根がやや平坦となっているが、そこに、14号住居址と15号住居址が切り合った形で立地する。14号住居址は15号住居址によって、西半を切られ南東船部には、これまた14号住居址を切って、第1ピットが掘り込まれている。したがって、本住居址は東北部にあたる約4分の1しか遺構を残していないかった（図42、図版23）。

残存する掘り込みの形状から推して、本住居址は直径4m前後の円形プランをもつ竪穴式住居址と推定される。掘り込み上部はすでに流失しているらしく、最も深い北壁部で18cmを測り、垂直に掘り込まれていた。

床面は、残存部で見た限りでは水平につくられ、15号住居址の床面より約15cm高い。床のまわりにめぐらされた周溝は、巾14cm前後、深さ4cm前後のU字溝である。

柱穴は、本住居址内に5個検出されたが、15号住居址内の1個と合せて、基本的には4本柱で構成されるものと思われる。本住居址のほぼ中央部、15号住居址東掘り込み線に切られた部分に、穴状の遺構が存在する。長径は不明であるが、短径40cmの稍円形プランで、鉢状に掘り込まれ、最深



第42図 14号・15号住居址実測図

部が15号住居址床面にまでおよばない浅いものであるところから、本遺跡の他の住居址に多くみられる中央穴状造構と推察した。上記の他の諸施設については不明である。

15号住居址

14号住居址を切り込んで、その西側に立地する円形の竪穴式住居址である。本遺跡住居址群の中では、最も保存状態の良好なものである（図42、図版23）。

現存地山掘り込み上面の径、東西4.65m、南北4.35mのやや歪みをもった円形プランを示す。掘り込みはほぼ垂直に掘り込まれ、地形の低い南側に行くにしたがい浅くなり、南壁部ではやっとその痕跡をとどめる程度である。これは傾斜地に掘り込み、床面を水平にしたことから、そうなったか、あるいは、その後の風化流尖によるものかは不明である。掘り込みの最も深く残る北壁部での、地山掘り込みの深さは、現存で19cmを測る。

床面は水平につくられ、よく踏み固められているが、張り床などの施設については不明である。床面のまわりをめぐる周溝は、巾10cm～18cm、深さ6cm前後のU字溝である。掘り込みの東北隅と西北隅に夫々50cmぐらいの丸味をもった、地山花崗岩が掘り残されて、床面に張り出して露呈していたが、その部分ではU字溝を内側に迂回させていたこと、地形の低い南側でこの溝は、壁部を切って、南方へ約90cmぐらい延ばしていたことが注目された。このことから、住居址内をめぐる溝は、排水の目的をもつてつくられたものと推定される。周溝部を含めての床面積は、東西4.33m、南北4.1m、床面積は約14m²となる。

柱穴は、掘り込み内から合計9個が検出された。直接この住居址に伴なう柱穴は、①～④の4本と考えられる。④と⑤、③と⑥のように近接して掘り込みを有する柱穴については、別個の建物とするよりも、同一立地での建て直しと理解した。柱穴の深さは28cmから58cmとまちまちであるが、いずれも上面掘り込み部は広く、底に狭く掘られていてその断面形はほぼ垂直である。①柱穴にのみ、花崗岩の割り石を4個つめていたのが注目される。

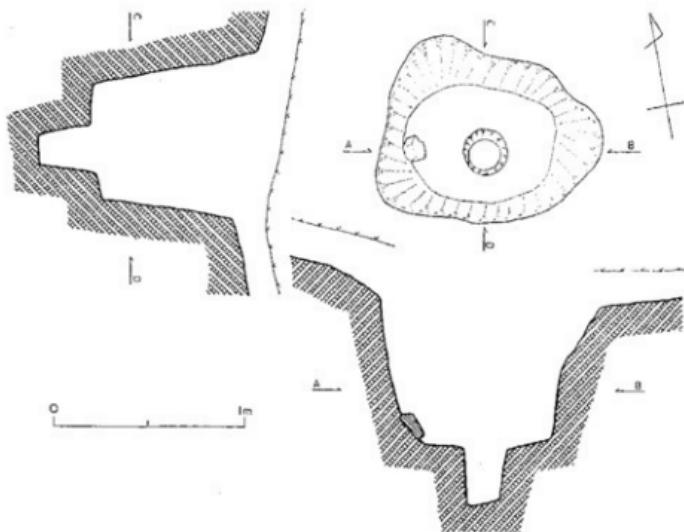
床面のはば中央部に、南北128cm、東西120cmの梢円状に、巾18cm前後、高さ4～6cmの縁堤状の高まりがある、その中にはば円形に近いプランの浅い穴状の掘り込みがある。穴状造構は、上面で東西径90cm、南北径85cm、底部で東西径73cm、南北径74cmを測り、深さは、縁堤上位から約6cmで底部は平らである。この穴の底面一面に炭を含む灰が広がっていたが、床面はきして焼けていなかった。さらにこの穴の中央に、径40cm前後、深さ約24cmの柱穴状の造構が見出された。この柱穴状の造構の中には灰を含まず、その上面に灰層が存在したことから、柱としても穴状造構に先行し、同時性ははさないものと考えられる。灰面を有する穴状造構がつくられる以前の住居址の中央柱として、存在していたものと推察される。

14号住居址、および15号住居址の床面に密着する土器片は、ともに検出されなかった。埋土中に遺留した土器片およびサスカイト細片が15個採集された。弥生式土器片のほかには、15号住居址北

付表8
15号住居址柱穴計測値
(単位cm)

柱番号	床面掘り込み径	深さ
1	23×29	42
2	14.5×17	29
3	17×19	58
4	22×29	49
5	15×15	24
6	15×17	24
7	13×14	28
8	17×22	24
9	10×13	12

壁に近く、一部は周溝直上にかけて、刀子1、須恵器坏、須恵器小壺1の計3点が、床面上約6cmに浮いた形で一括して検出された。これらの土器は、その特徴から奈良時代後半のものと推定される。住居構造、第2ピット内の土器、および10号住居址内の藏骨器、岩田第5号塚などの関連から推して、後世の遺跡との複合と考えるのが妥当のようである。



第43図 第1ピット実測図

第1ピット

14号住居址の東壁部を切るようにして掘り込まれたピット状遺構である。掘り込み上面はかなり不整形であるが、底部に近づくにつれて、小判形に整った形状を示す(図43、図版24)。長軸線を地形等高線に沿って、ほぼ東西においている。地山掘り込み上面で、東西径116cm、南北径90cmである。掘り込みは、底部になるにしたがってやや狭まるが、ほぼ垂直に近く、現存の深さ-80cmを測る。底部はほぼ水平面を有し、東西80cm、南北62cmの楕円形を呈している。この底面中央部からさらに深く、柱穴状の掘り込みが検出された。径23cm×25cmの円形プランで、深さ約30cm直下に掘られている。ピット内に堆積した塵土は、均質の地山マサ土で、底部中軸線上西隅に接して、7cm×10cm×12cmの花崗岩角礫が1個見出されたほかは、作出遺物は皆無であった。

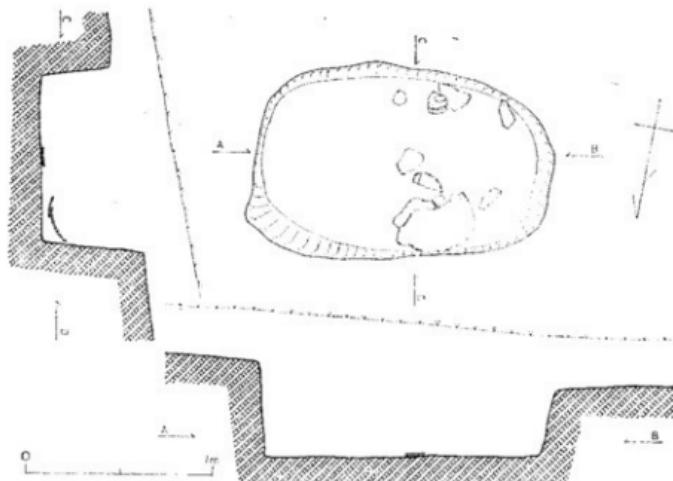
構造的にみて、ピット中央に1本の柱を安定した状態で建て、その柱のまわりに「物」を入れ、地表面に柱を心柱として葺き流した屋根の存在を想させる。これと類似する遺構は、現在調査進行中の、Y7遺跡第2地点でも1基発見されており、食物などの貯蔵穴としての機能を果していたものと推定される。

第2ピット

15号住居址の南西約1.5mのところに掘り込まれた、ピット状の遺構である。そこは平坦部の緩傾斜がまた角度を増して下降する肩部にあたる（図44、図版24）。

東西に長い小判形に掘り込まれ、底部は水平面をもっている。掘り込み上面での長径162cm、短径100cm、床面の長径150cm、短径91cm、深さは現存51cmを測る。壁部はほぼ垂直に掘り込まれていた。

床面から、かなり大型の甃が破砕した形で一括して検出したほかは、角礫2個を検出したのみである。



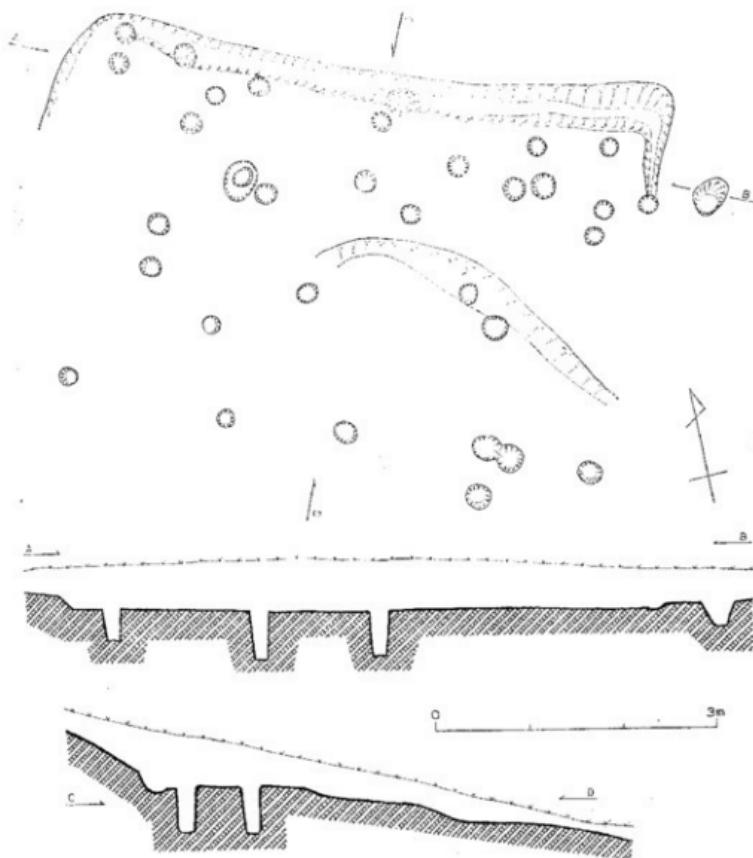
第44図 第2ピット実測図

16号住居址

第2ピットの南は、かなりの急傾斜となっているが、約4mで傾斜をゆるめ、やや平坦なテラスとなっている。そこは木造跡の南端にあたり、丘陵突端部でもある。

等高線に沿ってほぼ東西に、長さ約6m、深さ約30cm掘り込み、その南に巾狭ではあるが、平坦部をつくり出している。したがって、その掘り込みの東と西は、南に浅くなりながら約1.2m、コの字状の掘り込みとなっている（図45、図版25）。掘り込みのある部分では、平坦部との境に、巾20cm前後、深さ6cm前後のU字溝が掘られ、いわゆる窓穴式住居址周溝と壁との関係と共通する。

遺構のうち、特に床面にあたるところは施土が甚しく、水平面を保つ部分は南北で1.4mしか残存していない。また掘り込み部で検出された柱穴が38個の多数において、規則的な配列関係がつかめないとあって、その形式を定めることはできない。傾斜地の地形の高い部分を掘り込んで平



第45図 16号住居址実測図

垣地を設け、その周間に排水用の溝をつくり、柱を越てる。こうした一連の構造から、16号住居址として取り扱った。

掘り込みの形状からみれば、円丸方形とも考えられるが、東西の掘り込みは外反しており、3号住居址、6号住居址の場合と類似している。これは、尾根稜線上に立地することから、ほぼ等しい深さに掘れば、より高位にある中央部が内側に若干張り出した形となるのかも知れない。発見された柱穴は、東西掘り込みにそって直列状に6個、またその間に、円形状に組み合せられる6個等、揃つかの可能性が考えられるが、あまりにも機械的推考となるので、指摘するにとどめる。

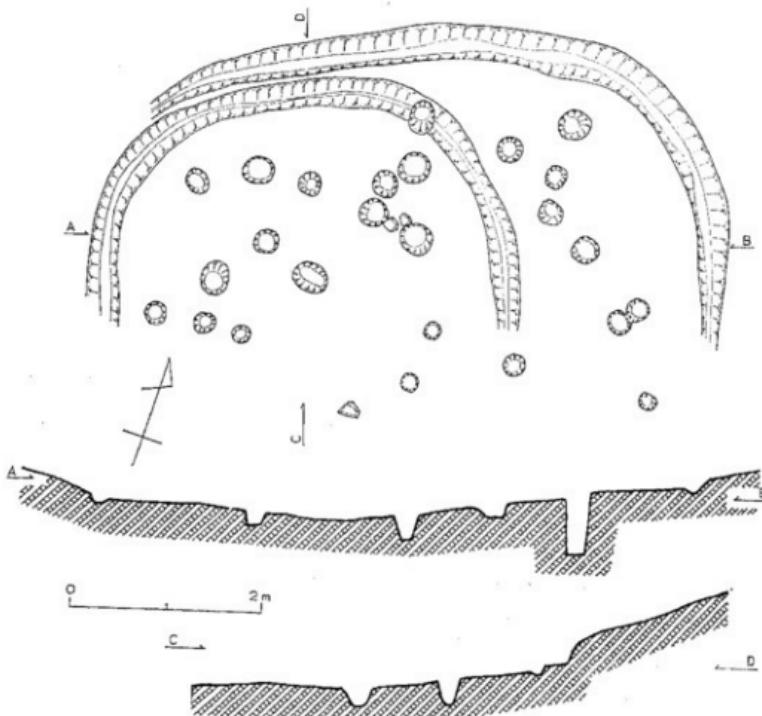
同地域からの伴出遺物は、周溝内から土器片1片と、床面上に石鉄1のほかは、すべて埋土中に遊離した土器片と、石鉄1、打製石斧1、サヌカイト細片25である。

17号住居址周辺

1号住居址の立地する尾根平坦部から、南東に向う傾斜面となるが、1号住居址の東約8.5mのところから、地形の等高線に沿って北東方向に、約7mばかり地山を大きく掘り込んで、その下方にやや平坦な面をつくりだしている。この地域は、かつて地区民による採石場ともなっていたことがあり、その西部である14号住居址にかけては、大きく地山を掘り崩して崖状を呈している。さらに南部には岩田5号墳が立地し、古墳構築の塵の盛土等によって一部を切られたり、墳丘下となっている。したがって、保存状態は極めて悪く、その全容はつかめなかった。しかし調査の際に柱穴がグループをなして検出されたこと、および竪穴式住居址のものと推察される掘り込み跡が数条認められたことから、これらを組み合せて、17号～20号住居址を推定した。

17号住居址

18号住居址と複合した形で、その西に位置する。地形の低い南半部は床面も含めて流失し、さらに岩田5号墳の築成によって切られている。北および東と西にコの字形の掘り込みを残し、隅丸方形の竪穴式住居址の面影をとどめている(図46、図版26)。現存最大深は北壁部で22cmを測る。床は



第46図 17号18号住居址実測図

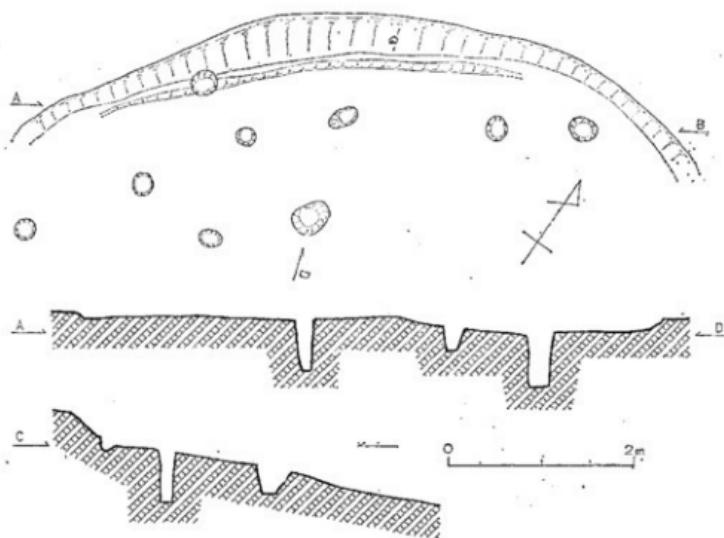
ほぼ水平につくられていたと思われるが、現状では南にやや低くなっている。掘り込みの残る部分では、巾10cm～20cm、深さ5cm前後の断面U字形の周溝がめぐらされていた。溝を含む床面の東西径は4.25mである。

柱穴は、掘り込み内から計17個が検出されたが、18号住居址との複合を考慮に入れても、必要数をはるかに越える。住居址の構造、規模から推しても、4本または6本であろう。現状では、柱穴址が複雑になっているのでその配列はつかめなかった。掘り込みのほぼ中央部に、長径40cm、短径28cm、現存深18cmの卵形の穴状構が検出されたほかは、諸施設とも不明である。伴出遺物は炭化した木の実1のほかは、すべて遊離した土器片で、床面等に密着したものは発見できなかった。

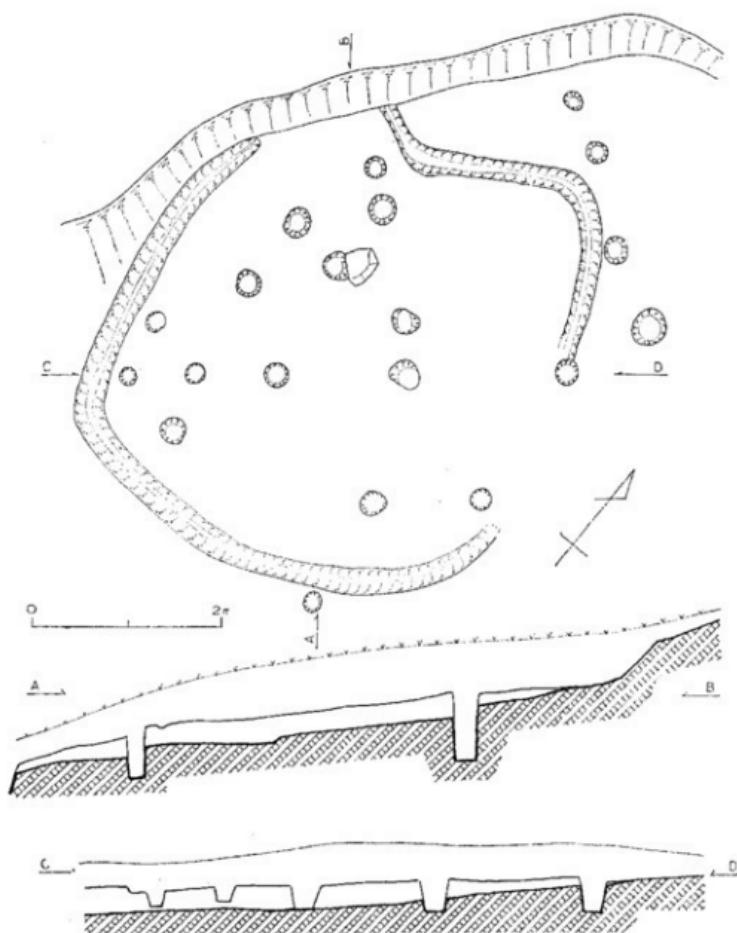
18号住居址

17号住居址を東北方向から圓むような形で掘り込みをもつ。現存部は4分の1程度で詳細は不明であるが、掘り込み壁と床面の間に周溝を有し、一応住居址として取り扱った。掘り込みの深さは現存最大部で20cmである。形状は開丸方形とも見えるが断定できない状況である。

柱穴は18号住居址掘り込み内に10個、17号住居址北と合せて27個となる。柱穴の分布は複雑であり、直接本住居址に伴なうものを検出することはできなかった。伴出遺物の出土状況は、17号住居址と同様すべて遊離していたが、中に石器2およびサスカイト細片25を見出した。



第47図 18号住居址実測図



第48図 20号住居址実測図

19号住居址

18号住居址の東掘り込み部から、更に北東方向にむけて、円弧状の掘り込みが検出された。その大半は流失してくわしいことはわからないが、かなり大型の竪穴式住居址の可能性ももっている。部分的にではあるが、床面状の平坦面をもち、掘り込み内側にU字構を残す。また柱穴も配列関係はつかめないまでも、9個存在していることから、竪穴式住居址として取り扱った(図47)。

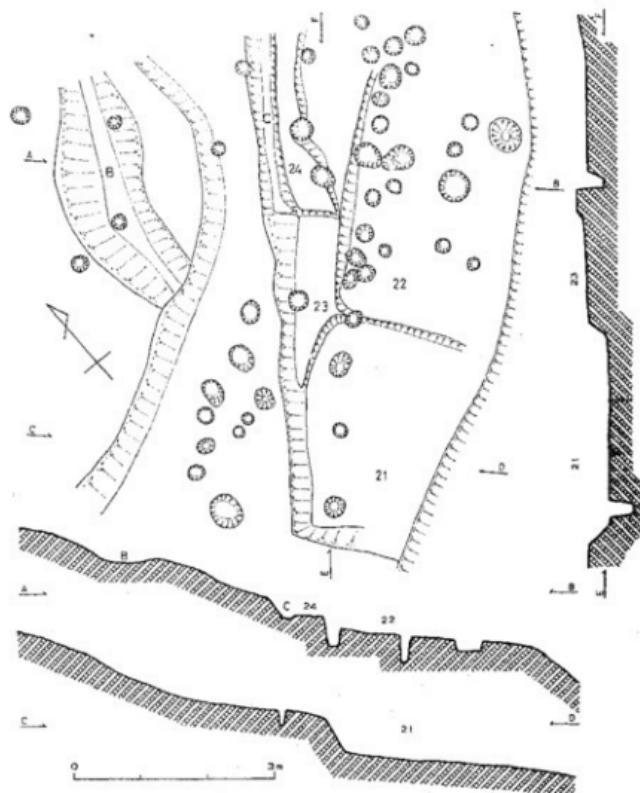
20号住居址

18号作居址の北、段状に大きく地山を掘り込んだ崖部に近く、開丸方形状に溝をめぐらせた造構があって、その範囲内に柱穴15個が存在している(図48)。当該地は、二次堆積による埋土が深く、部分によっては、1.2mにおよぶところがある。柱穴の確認された掘り込み上端も地山層でなく、こうした埋土層の中に、踏み固められた面があって、その面から掘り込まれていた。地山上面は、この柱穴掘り込み面から約20cmである。

構の外周には、いわゆる壁にあたる掘り込みを確認できなかった。二次堆積層の中に掘り込んだために検出を失敗したか、あるいは流失したものか確認できなかった。

いずれにしても、こうした周溝状の造構の中にだけ集中的に15の柱穴を有し、床面とまでいかないまでも、水平面をもっていることから、竪穴式住居址と想定した。

一辺4.8m前後の開丸方形を示し、溝は段状掘り込み部からはじまって、地形の低い東南部で、



第49図 21号～24号住居址実測図

約1.7mにわたって切れていた。柱穴の配置関係およびその他の施設については現状では不明である。

有機層による埋土が深いこともあって、土器片は多量に採集されたが、この住居に直接伴なうものとして比定できるものは存在しなかった。土器片のほか、炭化した桃の実1、釘状をした鉄器1、打製石庖丁1、サスカイト細片24を発見した。

20号住居址からさらに東北方にかけて、計18個の柱穴状ピットが存在する。溝とか掘り込み跡をもたないため、くわしいことは不明である。中には住居址中央の穴状遺構のようなものもあり、今次の発掘区よりさらに東にのびる可能性ももっている。Y7第2地点との関連において検討を要する地域である。

21号住居址周辺部

10号住居址から北東方向へ向けての東南に下降する斜面に、10号住居址とほぼ等しい高さをもって、数条の掘り込みと柱穴群が存在する。掘り込みの集まる範囲は等高線にそってほぼ8.5m、巾3mである。柱穴は密集しており、掘り込み内に37個、10号住居址北からこれら掘り込みの上位に存在する41個を加えると、実に78個の柱穴群となる(図49、図版26)。掘り込みはたがいに切り合ひ、その上地形の低い南東部を流失しているので詳細は不明であるが、いずれも等高線に沿って一辺をわいた圓丸方形状を呈し、その部分にはU字溝を掘っている。検出した柱穴があまりにも多く、グルーピングができないため、掘り込みとの関連がつかめないけれども、一応これらの掘り込みを頼りに、南から21・22・23・24号住居址と定めた。

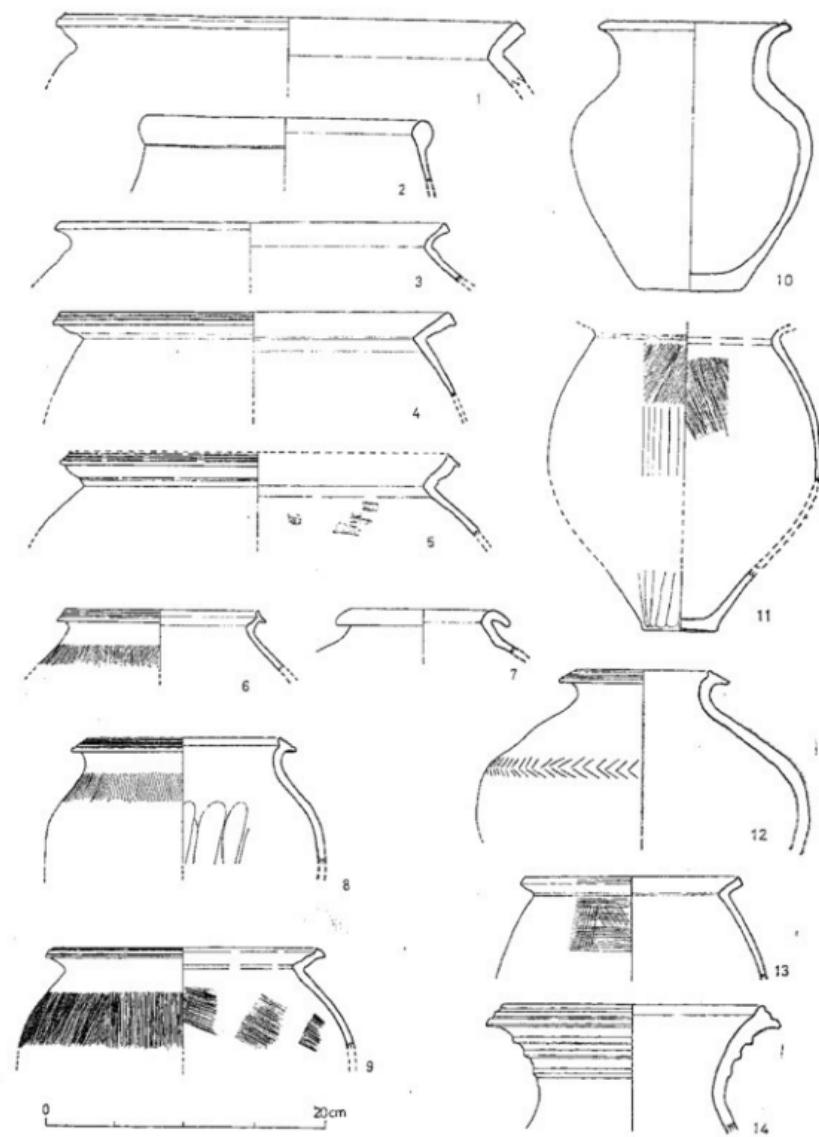
保存状況もきわめて悪く、さらに北東谷頭部に向けてのびている可能性が強いため、引き続いで行なわれる予定のY7第2地点の調査と合せて検討することとし、ここでは、その事実概要を述べるにとどめる。

4. 出 土 遺 物

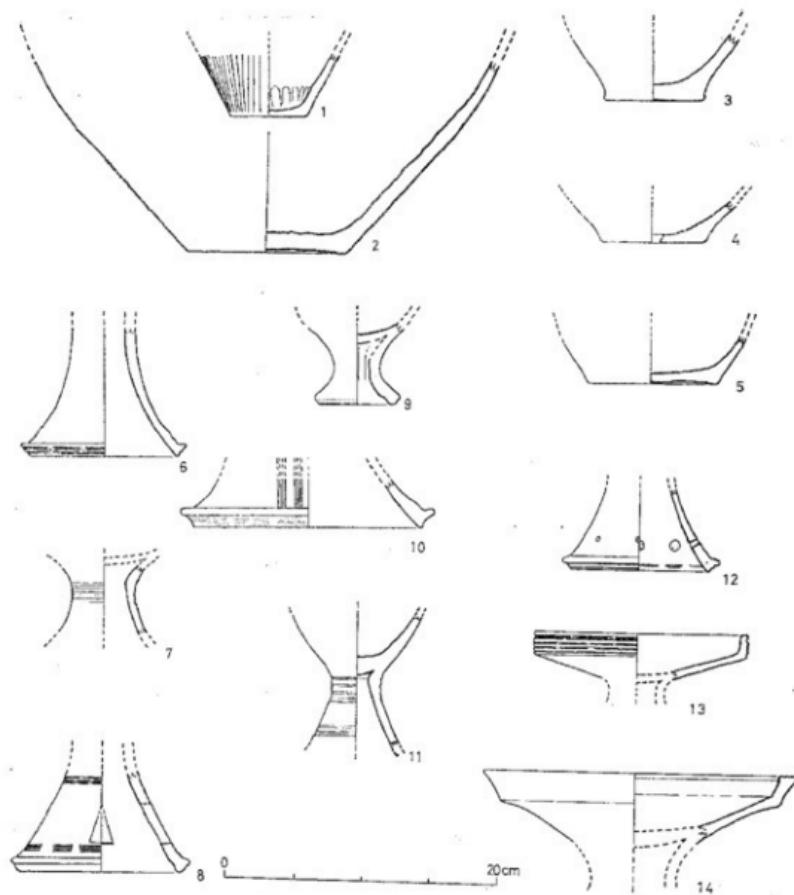
本遺跡の場合、各遺構がかなりの傾斜面に立地しているため出土が著しく、遺物もそれに伴なって二次堆積化したものが多い。例え住居址床面に接していても、それが果してその住居に伴なうものかどうか確言できない状況であった。また検出された土器片の特徴から大きな時代巾をもたず、ある限られた時期のものであることもあって、ここでは一括して、代表的なものだけ概観することとする。採集された土器片は35×75×9cmの整理箱約20枚いとかなりの量にのぼるが、いずれも磨耗した細片が多く、接合等による復元は不可能である。また土器のほか多量にわたる石器、およびかなりの量のサスカイト片も検出された。

1) 壺・壺(図51・52)

壺の口縁径は10cm~20cm、主に頸部がやや長いものと、口縁部が屈曲するだけのものもある。口縁部および頸部に数条の凹線をめぐらしたものが多い。図示できなかったが頸部下端に1本の凸帯をめぐらすものや、口縁部に円形浮文や張り付け文を有するもの、頸部に綾衫文をもつもの等が若



第50図 患 団 遺 跡 出 土 土 器



第51図 慈國遺跡出土土器

平例見られた。

2) 高杯(図52)

杯部の破片は磨耗度が著しく、あまり詳細には検討できなかった。口縁径が15~20cm前後のものが多いが、中には30cmを越すものも若干存在した。口縁部が直立し、四線をもつものが多い。脚部は細くてやや長い筒状の裾が拡がったものと、低い台状のものがあり、ともに脚端は拡張されて立ち上りをつくり、四線がめぐらされているものが多い。脚上部に細くするといへら状工具による数本の線を画いたもの、脚下部に三角形のすかしや円孔を有するものもある。杯の内外は細かくへら

磨きかげ施されている。

これらの中には、夫々四線を用いた文様が主体となり、装飾性の少ないものである。多少の時間的な傾向があるとしても、ほぼ同時性を示しているとみてよく、当地方における弥生中期末、すなはち、畿内第Ⅳ様式にほぼ併行する時期のものと見てよいであろう。

3) 石器(図52・53)

発見された石器の個体数は、さして多くはなかったが、多種の工具・農具を中心とした各器形を含んでいる。

(1)の骨質鋸歯刃石斧は、均整のとれた砂岩質のもので、全長13.2cmを測る。刃先に若干の刃こぼれの痕跡があるが、使用によるものかどうかは不明である。3号住居址の床面に接して発見された。(2)の磨製柱状片刃石斧は、粘板岩系の変成岩で硬質の材質である。刃部に一部の欠損と、頭部に叩き痕が認められ、タガネの機能をもつ工具と考えられる。片刃とはいえ、刃部の先端は両面ともかなり内方向に磨かれている。断面形は方形を示す。長さ10.4cmを測る。4号住居址北壁の掘り込み縁外約10cmの地山直上に接して発見された。(3)の小形扁平片刃石斧は緑泥片岩製で、全体的によく磨耗している。長さ4cm、巾3cmと小形である。2号住居址内から遊離して発見された。(4)の小形木玉状石斧は、砂岩質の磨製である。原則的には片刃であるが、刃先は両面から砥ぎだされ、両刃状を呈している。長さ5.4cm、巾1.4cm、厚さ1.1cm、断面形は方形を呈し、のみ的機能を果すものと思われる。10号住居址床面よりの出土である。このほか、サスカイト製の打製石斧と思われる(10)(11)2点が、16号住居址、21号住居址から各1点出土している。

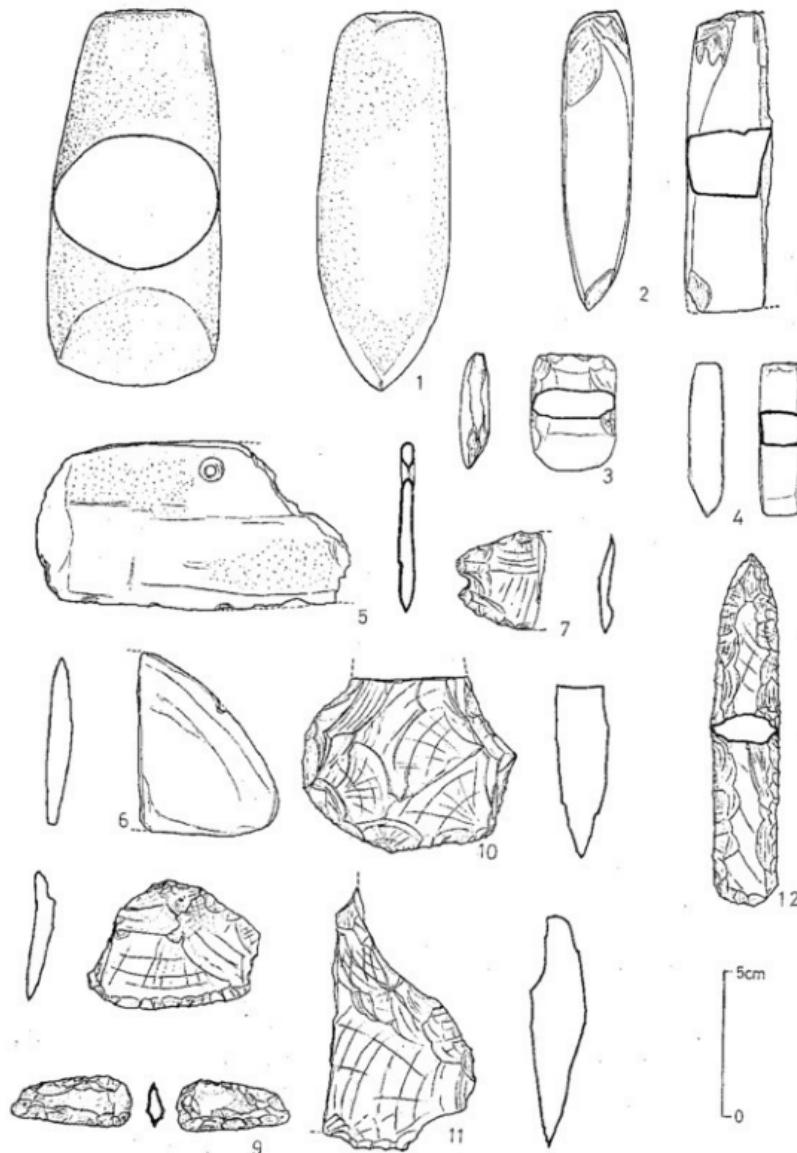
石刀(丁)は、磨製のもの2、打製のもの2の計4点が出土したが、サスカイト製の石器の中に、こうした機能を果したであろうと思われるものが數個検出された。(5)は粘板岩、(6)は泥板岩でつくられた磨製型のものであるが、いずれも半欠している。とともに2号住居址よりの出土である。

8号住居址の堀帯溝内から出土した、サスカイト製の石槍頭は、均整のとれた精巧なもので、長さ11.9cmを測る。石鎌は計14個が発見されたが、いずれも三角形状を呈し、長さ1.7cm~3cmである。このほか発掘区より、サスカイト細片が多數採取された。このことは当地において、原石から石器が製作されたことを物語るものであろう。

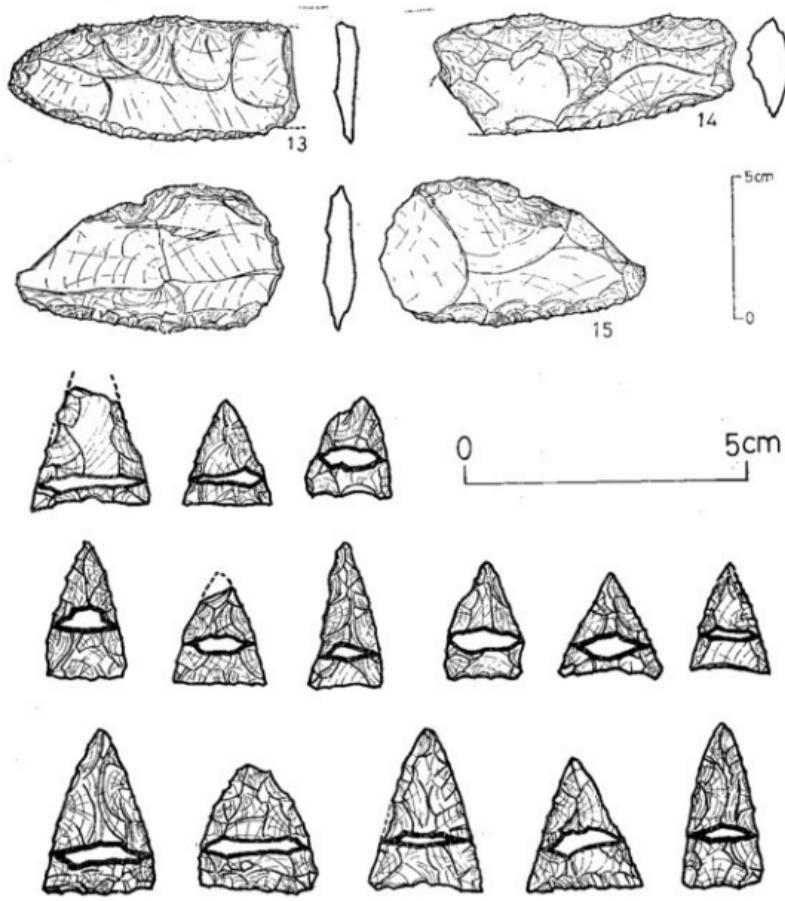
4) 須恵器その他(図54)

本遺跡の発掘区より、若干数の須恵器片と藏骨器を含む奈良・平安期の土器が出土した。岩田第5号墳から當道跡内に立地すること等もあって、これらの土器は、本遺跡と直接的なつながりをもつとするよりも、後世のそうした遺構とたまたま複合して立地したものと考えるのが妥当であろう。代表的なものを実測圖に示した。

(1)は藏骨器で、10号住居址床面にまで達する小土壤内に置かれ、中に火葬骨が納められていた。器形の特徴から奈良時代の所産と考えられる。(2)(3)は、15号住居址掘り方内に流れ込んだ状態で検出されました。(4)は、24号住居址付近の表土層内で発見された壊であるが、当地方須恵器の中では古式に属するのである。



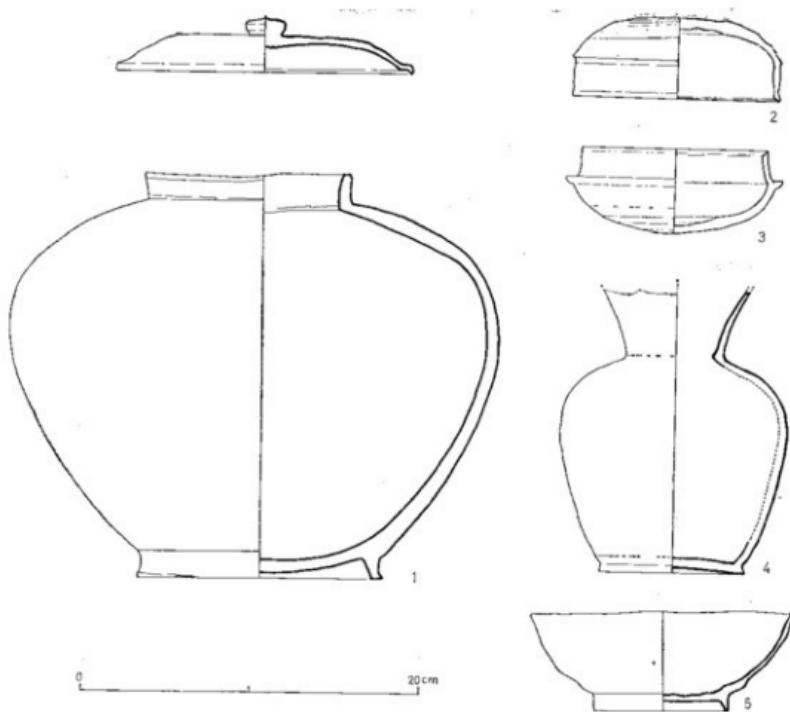
第52図 惣 国 遺 跡 出 土 石 器



第53図 慈國遺跡出土石器

5. まとめ

1. 本遺跡は、標高60m～70m、眼下の谷水田との北高30mのかなりの下降傾斜をもった、巾狭な丘陵尾根上に立地する、約30戸前後の竪穴式住居址群を中心とした集落遺跡である。
2. 当該地が、風化の進んだ花崗岩の風化土を基盤としているため流失が著しく、各住居址とも地形の低い南半部は床面も含めて流失し、掘り込みの上端を原形で残すものはなかった。そのため、たかがいに切り合っている住居址についても、その構造上の特徴等から先後関係を明らかにすることはできなかった。また作出造物についても、流土によって二次堆積となっている部分が多い。



第54図 懸囲遺跡出土須恵器

く、土器片等も擾乱され、個々の住居址と結びつけての時期的確認はできなかった。

しかし、発見された土器片は総合的検討の結果、弥生時代中期末の所産であり、本遺跡各住居址は、比較的限られた短かい期間に當なまれたものであると考えられる。このことは、複合したり再建された痕跡のある住居址について、建て直し回数が1回ないし2回程度までしか確認できないことからも裏付けされる。

3. 遺跡が小規模の丘陵尾根上に立地することもあって、遺跡範囲を全掘した結果、一つのほぼ完結した集落址としての資料を得ることができたといえよう。

4. 発掘された住居址は、いずれも円形もしくは隅丸方形プランをもった竪穴式住居址であるが、そのうち、計測可能な18例についてみると、径3m前後の2例の他は、すべて径4.5m内外の小形のものであり、ほぼその規模を一にする。住居址群中に中心的なより大形の住居をもたない特徴を示す。

5. 類斜面に竪穴式住居をつくるため、あらかじめ、地形の高い部分を段状に掘り込んで、その下方に平坦面を造りだし、そこに居を構えたと考えられるものが、4号・6号・16号住居址等、數

例あり注目された。

6. 本遺跡から出土した石器は、多種の工具・農具を中心とした、各器形を含んでいる。弥生時代中期末から後期初頭という、限られた時期における、生産用具の一括資料として、その発展を考察するうえで貴重な資料である。
 7. 本遺跡住居址掘り込み内の発掘に際して、炭化した野生の桃実5例を採取した。このことは、水稻栽培のみでなく、野生とはいえ、桃などの果樹を弥生時代中期末の段階において、食用に供していたという事実が明らかとなつた。現在桃の主生産地である当地域において、すでにこうした果実を利用していたということは興味深い。
 8. 発掘調査を行なった各住居址のうち、火災等により焼け落ちて焼棄されたものは、8号住居址のみである。また流土が著しいとはいえ、延べ2400m²におよぶ全面発掘にもかかわらず、完形土器はおろか、復元可能な一括土器はついに検出できなかった。このことは、当集落に居住する集団がより適地を求めて発展的に移住したものと考えられないだろうか。
 9. 山崎町における弥生式時代前期の遺跡は、当東高月丘陵群の東に広がる、砂川流域の沖積平地の旧砂川自然堤防裏の下市遺跡と、沖積地南端部の南方前池遺跡が知られている。いずれも自然灌漑の可能な湿地であり、遺跡範囲はさして広くない。また後期の遺跡としては、沖積平地に望む丘陵裾部から谷口にかけての一帯に、大規模な集落が存在する。团地造成予定地縁辺部だけあってみても、熊崎遺跡、門前池遺跡（Y2・3）、岩田大池遺跡（Y1）があげられる。
 10. 大胆な推論が許されるならば、当地域における水稻耕作は初期の段階の砂川流域自然堤防裏の低湿地とか、谷尻の湿地の利用から、比較的自然灌漑の可能なゆるやかな丘陵間の小谷を切り開いて耕地化し、その上方の南面する緩斜面を選んで居住区を構えた時期が惣園遺跡である。やがて深耕・土木の生産技術の発展と生産の拡大を求めて、再び谷口および沖積地へとその開拓が進むにつれて、当遺跡の集団もより適地を求めて、丘陵裾部の沖積平地との接点でもある岩田大池遺跡等の低地大集落へと発展的に移行して行ったと考えられないだろうか。
- そのために、本惣園遺跡は、ある限られた時期に限定される集落遺跡なのである。

註

- 1) 神原英明『丹波古墳群発掘調査概要』1971年
- 2) 1971年5月、本遺跡に隣接して工事中に発見された。現在工事を中断して調査中
- 3) 本書後章「岩田古墳群第5号墳発掘調査概報」
- 4) 註2に同じ

岩田第5号墳発掘調査概報

1. 立地

岩田第5号墳（略記号E5）は、岡山県赤磐郡山陽町大字岩田字惣岡に所在する。

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴う、住宅用地予定地はゆるやかな起伏をもつて広がる丘陵地である。本古墳はそれらの丘陵文脈の一つ、用木山（標高92m）を起点として、南へ下降しながらのびる丘陵尾根の突端部に立地している。当地は谷水田に対して張り出したような地形を示し、先に報告した惣岡遺跡の南端部である。墳頂部の標高63m、眼下の谷水田との比高約30mを測る。

本古墳からの眺望視野は、同丘陵地内の他古墳に比してあまり広いとはいえないが、南方に広がる高月の沖積平地、およびその平地に造られた全長192mにおよぶ高宮山古墳（前方後円墳）を望見できる。

2. 調査前概況

本古墳の立地する丘陵一帯は、調査直前まで松林であった。当地は丘陵尾根上とはいえ、かなりの下降傾斜をもった巾狭のやせた馬の背尾根である。さらに基盤である地山は風化の進んだ花崗岩の媒乱土で構成され、かなりの流土が予測された。墳丘は長年の自然作用の影響を受けて流失し、分布調査時の段階ではよほど注意しないと見過ごす程の状態であった。

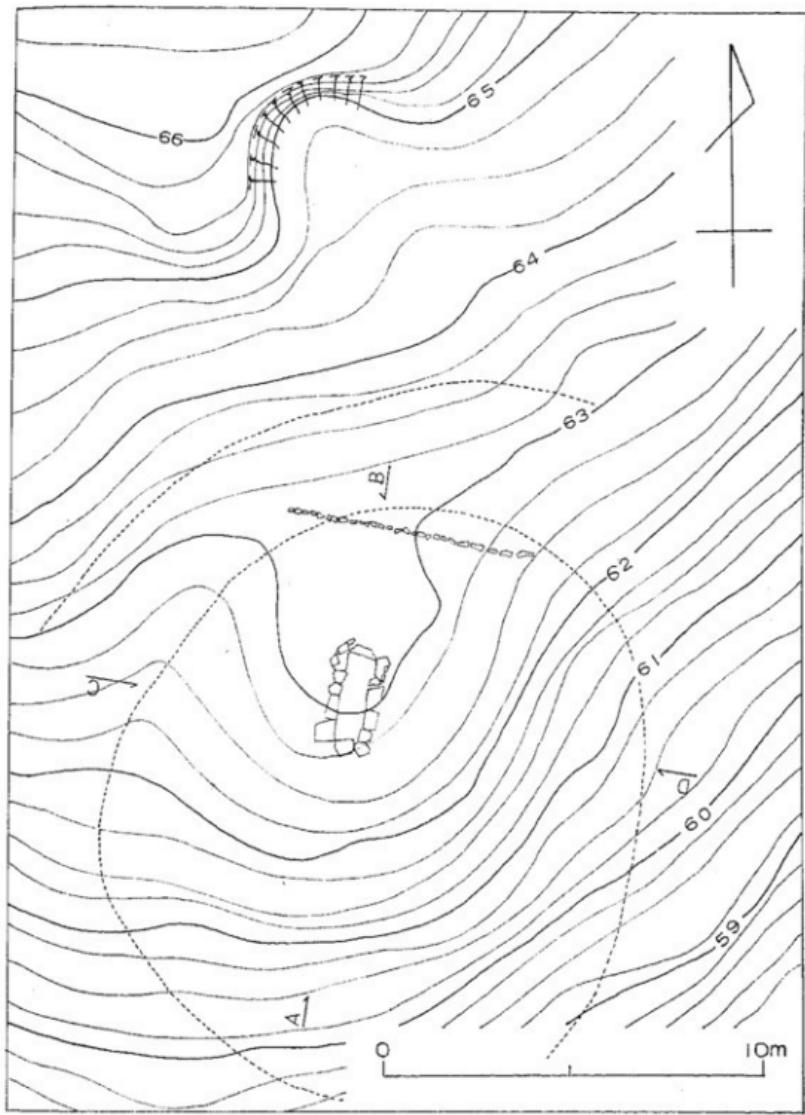
地形の高い北側墳端部では、地山斜面がやや傾斜をゆるめ平坦面をみせる程度で、いわゆる墳丘としての高まりはほとんど示さない。また地形の低い南側墳端部も封土が流れで墳端部を確認できない状態である。しかし南墳斜面のほぼ中央部には現表土層に葺石を思わせる山石による角礫が散見され、尾根稜線方向に長軸をもった平面形で、梢円形状の小円墳と推定された。

流土の影響で墳丘はかなり原形を損なっているが、盃形壇等は認められず、内部主体は原状を保つものと推察される。

3. 外形

封土の流失が著しく、本古墳の外形を明確にとらえることができなかった。地形の低い南側墳端部は、流土による二次堆積の被土を想定され、かなり張り出した形となっていた。発掘調査前の地形測量の段階では、尾根稜線に沿った南北に長軸をおいた15.3m×13.4mの梢円形の平面プランを示し、高さ平均1.5m前後の円墳と推定された（図55、図版31）。

発掘の結果、地形の高い北側墳端部に尾根稜線に直交して、巾約2.5m、深さ20cm前後の浅い周溝状の溝状遺構が検出された。この溝の掘り込みは、地形の高い外周部では円弧状を呈し、墳端に近い内周部は直線状を示していた。さらに溝内縁部に近い墳端には6.5mにわたって、角礫を直列状に一直線に並べた列石が発見された。この列石状の石列は、他方面の墳斜面においては明瞭には



第55図 岩田第5号填地形図

遺存しなかつたが、西側墳端部および南側墳斜面で、かつてはそれであったであろうと考えられる角礫が崩れた状態で検出された。特に南墳斜面においては、原位置を保つと思われる石材も何個か存在し、北墳端部と同様、直列状に立て並べた石列があったことが想定された。

北と南において見出された石材間の距離は約10.2mあり、少なく見積っても、8m×10mの長方形形状に列石をめぐらせていたことが推定される。

すると、本古墳の規模からみて、円墳にこれだけの方形列石を組むことにかなりの無理を生じ、あるいは方墳であったかも知れないという可能性ももつてゐる。

4. 外 部 施 設

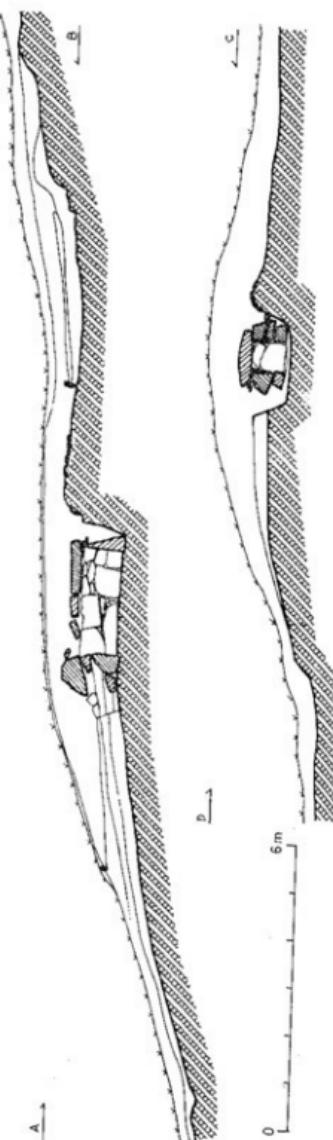
前項で記述した列石の他は、埴輪の周縁等の外部施設は認められなかった。

列石は最もよく遺存する北墳端部では、面を外側（北）に向け、天をほぼ水平に揃えて直列状に整然と立てならべられていた。現存石列の長さ6.5m、26個の割り石で構成されている。石材は地山岩盤である花崗岩の割り石で、巾10cm～15cmの平石を縦長に用い、下半部を土中に埋めて立て並べている。葺石とするよりも墳域を廻すための列石としたほうがより妥当である。

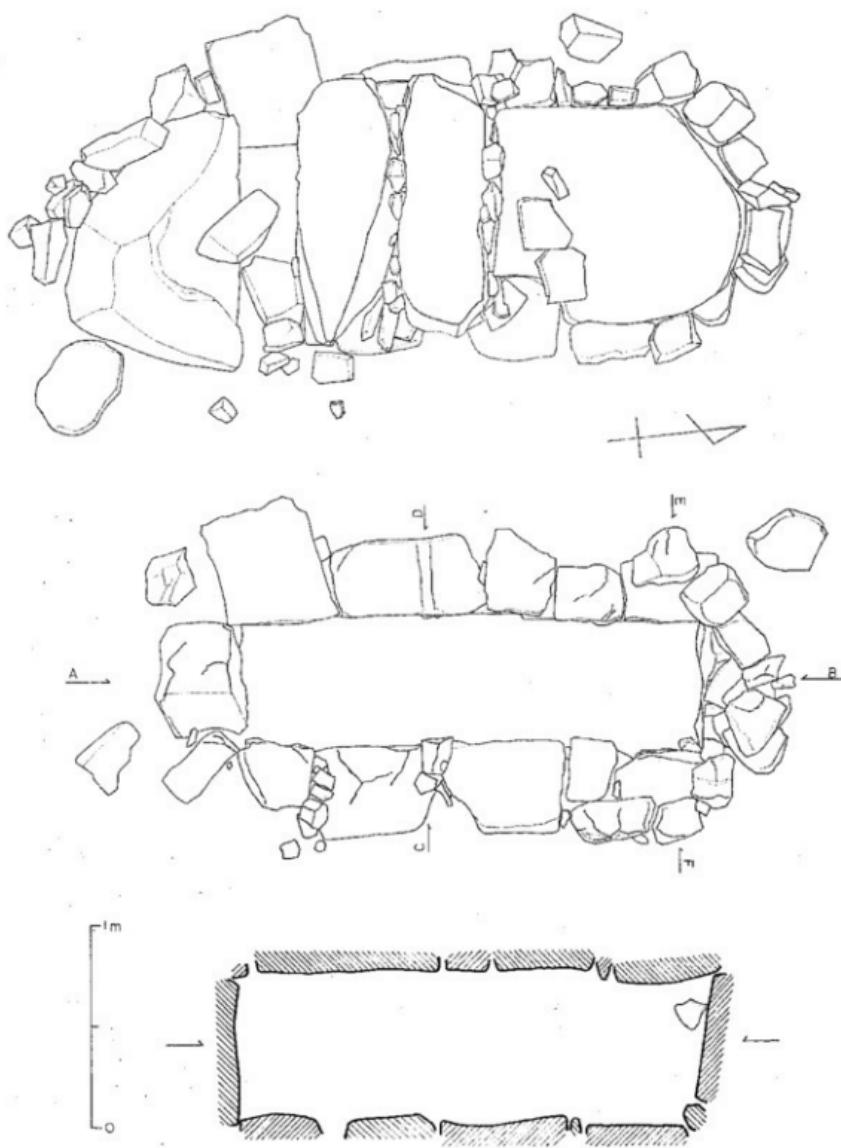
そのほか、外部施設ではないが、南墳斜面の石材の間から頭部を欠損した須恵器壺と破片となつた須恵器甕が一括して見出された。これらの土器はいずれも鎌倉時代初頭のもので、直接本古墳には関連しないが、あるいは後世になんらかの祭祀が行なわれ、供獻されたものかも知れない。

5. 内 部 構 造

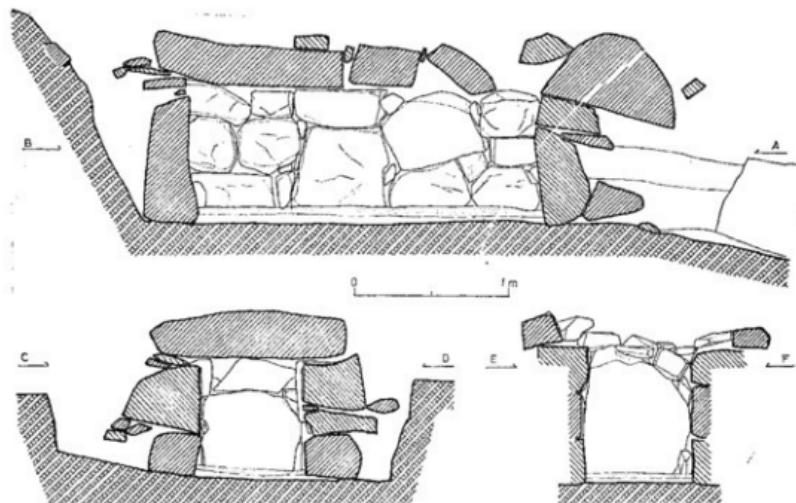
本古墳の内部主体は竪穴式石室である。墳丘のほぼ中央部に、尾根主稜に沿てN7°Wに長軸をおいて構築されていた。石室の深さは、現存墳頂より床面ま



第56図 岩田5号墳墳丘断面図



第57図 石室(平面図)



第58図 石室（側面図）

で175cm、天井石上面までは部分によって多少の差異はあるが、平均して約70cmを測る（図57・58、図版31・32）。

石室は、きれいに面取りされた角型の切り石で、直方体の箱形に整然と構築され、各側壁とも垂直に積まれている。床面には、約3.5cmの厚さで、木炭を含む黒色の灰が一面に敷かれており注目された。石室の大きさは、床面の長さ287cm、巾74cm、側壁高80cmを測る。

石室の積みは、小口部壁はそれぞれ鏡石状に立て、東西の側壁は原則として、2段積みで築かれ壁裏の柱え積みは施されていない。横穴式石室というよりも古墳終末期に多くみられる横穴式石室に類似する構築法に近い。石室上面は側壁部に対して、直角に面取りされた角材を用い、全体として水平面を保つように組まれていた。

天井石は4枚の板石で構成されていた。地形の高い北側からの3枚は、いずれも上下面とも面取りされた厚さ20cmぐらいの切り石で、南端の1枚は下面のみ面取りされ、上面は丸味をもった自然石であった。石材はすべて側壁と同じ地山岩盤である花崗岩を用いていた。これらの天井石は、側壁部との隙間および天井間の空き問には、花崗岩の小砾を充填して、粘土質の土をもって目張りを施していた。

発掘調査の際、南端の天井石は地盤の低い南へ約28cm移動して、その部分は天井が切れた形となっていたが、その直上部に盗掘痕等は検出されず、地形の関係で生じたものと推察された。したがって調査時に石室内は、天井のずれた部分では上端まで他の部分では側壁上端から10cmの高さまで埋土していた。

石室の構築法が、横穴式石室の積み方と類似することから、あるいは横穴式石室ではないかとの

疑問もいたが、石室調査終了後墳丘に十字形のトレントを設定して、盛り土関係を調査した際、石室は地山に直接掘り込まれた土塙穴の中に組まれており、堅穴式石室であることが確認された。

6. 遺 物

本古墳の石室内には、現存する副葬遺物は何も検出されなかった。床面上に遺骸の一部と思われる風化した有機質が棒状に僅かに残っていたのみである。床面上に残る遺体の痕跡、および炭層の状況から推して、当石室内は原状を保つものと推察され、もともと現代まで遺存するような副葬遺物の埋納は行なわれていなかったものと推察される。

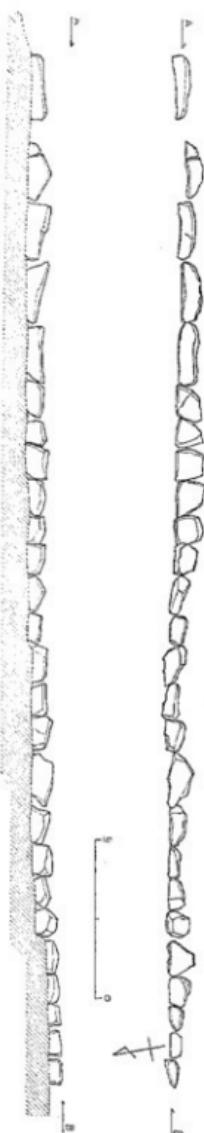
墳丘南斜面列石の間で検出された土器は、2個体分であるが、大形の甕と思われる分は破碎され復元できず、実測することができなかつた。表面に格子目、内面には青海波状のたたき文様を有し、奈良時代のものと推測された。今一つの小形甕（第60図）は、底部は平らで糸切り底である。頸部を欠損しているため、その全高は計測できないが、頸部までの高さ7.8cm、胴部最大径10.3cm、底部径7.3cm、頸部径3.8cmを測る。胎土に砂礫雲母を含み、色は青黒色、焼成は良い。ロクロの目は時計回りを示す。焼成および器形の特徴から古伊部焼に近く鎌倉時代初頭の所産のものと考えられる。

なお、封土内より多数の弥生式時代の土器片が散見採取されたが、これは本古墳が前記記述の惣園遺跡の一角に立地し、その包含層を切って盛土しているためである。弥生式土器については、惣園遺跡の報告で取り扱ったので、本稿では省略する。

7. 墳 丘 の 築 成

本古墳は、いわゆる盛り土によって高い墳丘を築いたものではない。内部主体である堅穴式石室も原地表下に構築されている。古墳の縦横断面図（図56）から、その築成過程を想定すると下記のようになる。

①まず地形の高い北側尾根稜線を掘り込み段状部を作り、その南にほぼ平らな面をつくりだす。②次に、そのほぼ中央部に尾根稜線に沿って長軸を南において、長さ4m、巾2.35m、深さ北1.1m、南0.6mの長方形の土塙を掘り込む。③土塙内に堅穴式石室を構築し、床面に炭を敷き、遺体を安置して天井石を載せ、粘土を使って目張りをする。④地形の高い北側から西にかけて、周溝状に溝を掘り込み、



第59図 北墳丘端列石

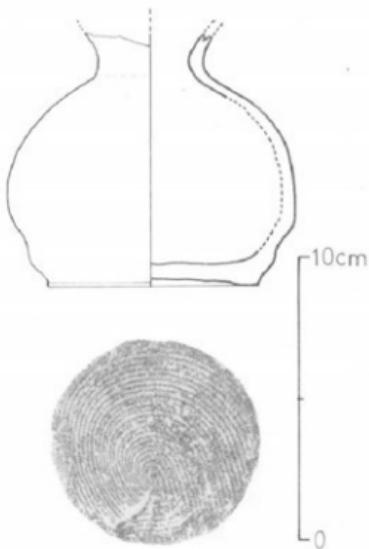
その土砂を用いて、石室を覆うとともに墳丘を盛りあげ整形する。③最後に石室を取り囲むように、墳端部に長方形状に列石（図59、図版33）を立て並べ、墳域を画して本古墳の築成を完了する。

なお本古墳に伴なう葬送儀礼の行なわれた遺構および方法や段階については、確認できなかった。

8.まとめ

1. 岩田第5号墳は、丘陵尾根突端部に立地する径12m前後的小円墳もしくは方墳である。
2. 外部施設として、方形に一列の列石をめぐらすという特徴を有する。
3. 内部構造は、長さ287cm、巾74cm、深さ80cmの箱形に組まれた竪穴式石室であるが、上面取りされた切り石で構築され、その積み方は横穴式石室のそれと類似する。当地方では古墳時代の終末期に、横穴式石室ではあるけれども、棺は天井石をはずして上から納めるという、小規模の石室の例がみられるが、本古墳もそれに類するものと推察される。
4. 本古墳の年代については、内部主体から遺物の出土をみなかったので明確に把握することができない。墳南斜面石列の間から出土した土器も鎌倉時代初頭のもので、本古墳の造営時期とは直接的には結びつかない。石室の構築法および割り石の状況から古墳時代終末期のものと推定した。

惣園遺跡第10号住居址床面および第24号住居址東北部から出土した蔵骨器が、奈良時代のものであるので、あるいはこれらと伴なう可能性をももっている。



第60図 墳丘表土出土土器

岩田第3号墳発掘調査概報

1. 立地

岩田第3号墳（略記号E3）は、岡山県赤磐郡山陽町大字和田字東山に所在する。

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう、住宅団地造成予定地のほぼ中央部に、野山古墳群の立地する丘陵鞍部（標高86.3m）がある。この鞍部を起点として、いくつかの支脈を分岐しながら、南へゆるやかに下降する丘陵が広がっている。本古墳はこれらの丘陵支脈の一つ、岩田大池を含む谷水田に面した丘陵尾根突端部に位置している。当地は南下してきた尾根が僅かではあるが再び隆起し、鞍部状となっている。現存墳頂部で標高63.9m、眼下の谷水田との比高約30m、高月地区との比高約40mを測る。

本古墳からの眺望は広く、南に高月地区の沖積平地を一望できる。なかでも、備前最大の前方後円墳である阿波宮古墳（全長192m）をはじめ、その陪塚群を眼下に収める位置にある。

住宅団地造成予定地内発見の57基の古墳の大半は、門前池・中池を含む谷水田を取り囲むように丘陵尾根稜線上に10基ないし16基が密接しながら支群を形成しているのに対して、この南面する丘陵部では、尾根突端部に単基で立地し、その分布密度も薄い特徴をもつ。

本古墳から東へ谷水田一つへたてた尾根上に、本古墳と同様立地で岩田2号墳（E2）が指揮の間に存在する。両墳の距離は直線にして約100mである。また西へ尾根支脈2つを越えた300mの地点には、同じく尾根突端部に岩田4号墳（E4）が立地している。

2. 調査前の概況

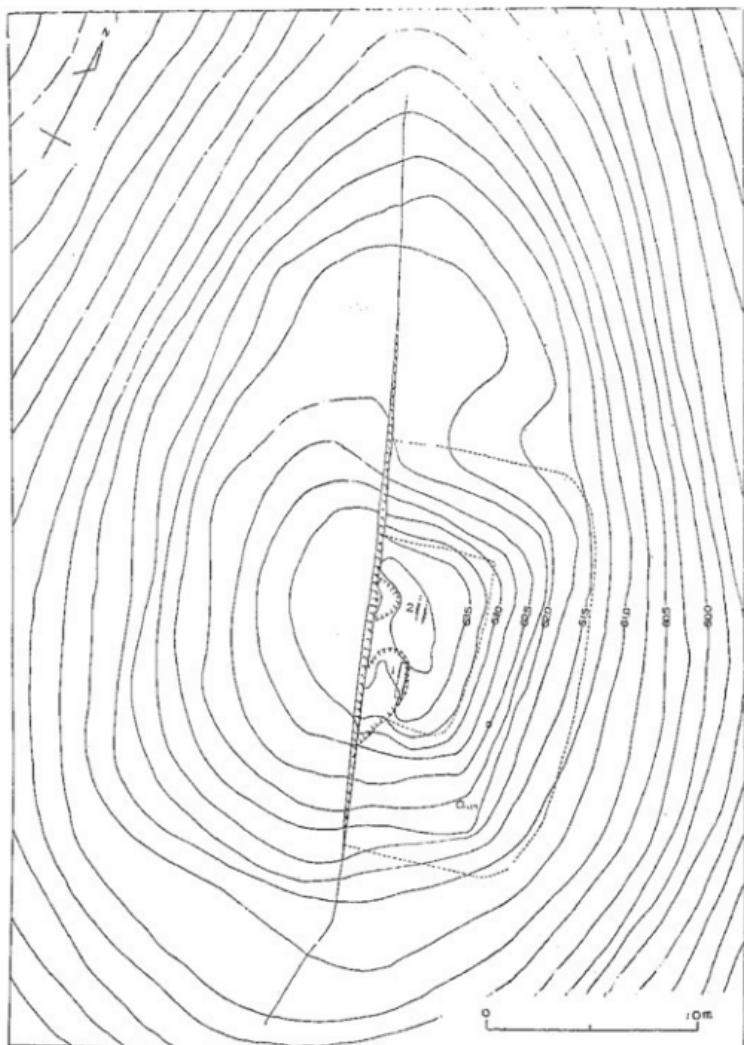
本古墳は尾根稜線上に立地し、古墳も含めて尾根稜線を境界として土地所有者が異なり、その様相も違っていた。東半部は雑木林で、墳斜面および墳端部はほぼ原状を保っていた。南北の墳端部は直線を示し、稜線も明瞭に確認でき、方墳としての面影を残している。西半部は土地所有者によって戦後開墾され、境界でもある墳頂部で約50cm地下げをし、墳丘を削平整地し果樹園（ぶどう畠）となっていた。したがって西半部の原状は大きく損われ、古墳の西墳端部と思われるところに、開墾の塵掘り出された葺石と推定される角礫や埴輪片を数個所所積みしていた。

墳丘の残存する東半部では、墳頂部に平垣面があつたことが遺存しているが、南から墳中央部に幅2mほどの盗掘痕がうがたれ墳頂部は亂されていた。また地形の高い北側墳外の尾根を稜線に対して直角に巾約3mの周溝状掘り込み跡が認められた。

以上のことから総合して、本古墳はすでに盗掘にあい破壊されているが、南北21m東西推定18m、高さ約2.5m前後の大きさで、墳頂部に約6.5m平方の平坦面を有する截頭角錐形の方墳であるといえる。

本古墳についての聞き込みによると、今から約60年ばかり前、村の青年達の手によって発掘され、碧玉製勾玉9個をはじめ、玉類、鏡、鉄器片が数多く出土したと伝えられているが、現在所有

者は不明である。昭和27年12月発行の『吉備考古』85号に梅原末治氏が「岡山県下古墳発見の鏡」の中で、赤沢乾一氏蔵として、赤磐郡高月村和田東山出土の平縁鷹文帶変形四獸鏡（径3寸4分）および平縁内行花文鏡（径1寸9分）の二面を記載されているが、あるいは本古墳出土のもの



第61図 岩田第3号墳外形状図

であるかも知れない。

また戦後当地を開墾された、土地所有者である山陽町岩田在住の横田二郎氏は、その際に地において径8cm前後の古鏡一面を発見されたが、また土中に埋め戻したそうである。（埋めた地点に案内していただき発掘したが確認できなかった）。さらに雨あがりなど畑の表面に、青色に光るガラス製の小さな玉が時折散見されたとのことである。

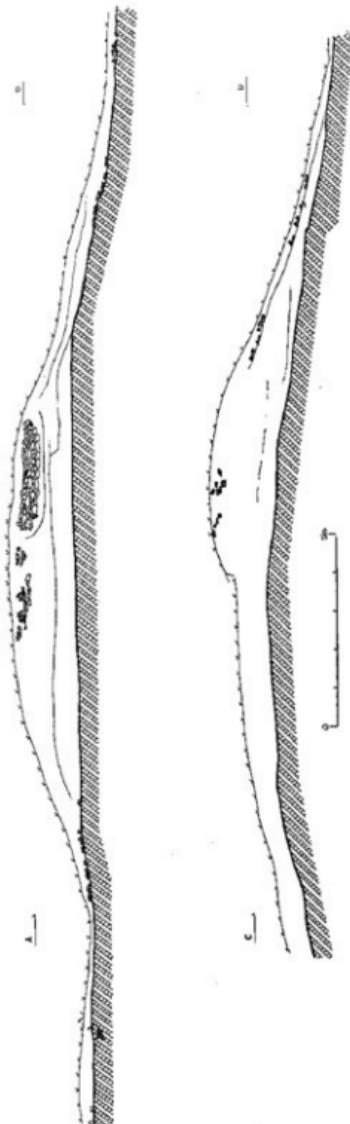
3. 外形・外部施設

本古墳の外形は、調査前の外面観察のとおり方墳である。形状および計測値等については、外部施設の記述後ふれる。

墳丘の遺存する東半部の表土を全面剝土した結果、本古墳の外表面には、葺石および埴輪が外部施設として用いられていることがわかった。

葺石は、東墳斜面においては墳頂平坦部肩から高さにして約1.1m下の斜面と、墳裾部に帶状に葺かれていた。封土の風化運動に伴なってかなりの乱れをみせているが、上段の葺石は約80cm巾、下段埴輪部の葺石は約1.2mないし1.5mの巾で、方形に隣接していたものと推察される。石材は花崗岩の割り石がその大半を占め、なかに若干、砂岩および粘板岩質の変成岩が用いられている。石材の大きさは一定ではないが、平均して10cm～15cm角ぐらゐの扁平なものが多く用いられ、上段葺石にやや大形の石が目についた。

葺石のふき方には特別にこれといった配慮の跡は認められなかった。下段埴輪部葺石は傾斜度も緩く、墳外表面に一枚ならべに敷きつめただけのようである。盛り土部分の墳斜面にあたる上段葺石は、部分的にではあるが、段状に積み重なるものを検出した程度である。下段埴輪部葺石の東北隅および東南隅の、いわゆる方墳接線の下端にあたる角では整然と直角の角度をもつてふかれ、本古墳の墳形およびその大きさを知るために大きな助けとなつた。全長の計測できる車埴輪部の葺石外法長は18.8mで



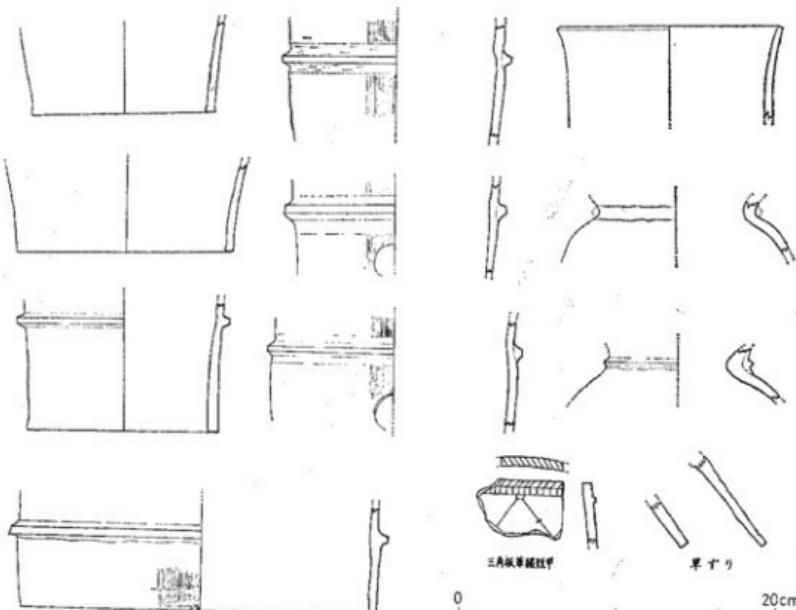
第62図 墳丘断面図

ある。

埴輪は、墳丘の残存する東半部において、調査区の全域にわたって、埴輪面中腹部から埴輪部葺石の間にかけて、集中的にその破片を見出するという共通の出土状況を示した。また、原位置を保つと考えられる円筒埴輪基底部が、東南陵線の中腹部とそれと同一レベルで北に4mよった東埴輪面の中腹部において発見された。その位置は上段葺石の下縁部にもあたり、埴輪片の出土状況と合せて少なくとも上段葺石の下縁に沿った埴輪列の隣接があったことが想定されるが、その密度については不明である。

この埴輪基底部を絶ぶる同一レベル上に破片とはなっているが、土師器高杯（H5）1と、土師器盃2（H3・H4）が検出され、あるいは埴輪とともに埴丘をめぐっていたのではなかろうかと想起させ注目された。

埴輪の位置について、このほかの部分での状況は不明である。埴頂部は盗掘の際に擾乱され難易でしかなかった。また埴輪部において発見した埴輪片を検討した結果、多種の器材埴輪片が含まれ注目された。いずれも少數単位の小破片となり、復元も不可能で原形を知ることはできないが、家、きぬがさ、短甲、草すり、武装人物等の存在が確認された。なかでも、三角板革縫短甲は、本古墳の築成年代を定めるうえでも重要な資料である（図版39・40）。したがって本古墳には、その配置関係は明確ではないまでも埴輪円筒のほかに高杯・盃および器材埴輪が樹てられていたといえる。



第63図 ハニワ

円筒埴輪もすべてが小片で、接合による復元も不可能なため、各部分についての特徴だけ記すこととする（図63）。

基底部は、原位置を保つと思われる2個体が発見された。東南稜線上に発見された埴輪（H1）は、基底部径45cmと大きく、下段タガまでの高さは約10cmと低い。また腹部および口縁部片がこれに見合うカーブを有するものが見あたらないことから、おそらく器材埴輪の台部と考えられる。

そのほかの基底部は、破片のもつカーブから推して、下底径24cm～28cm、下段タガまでの高さ13.5cm～15cmのものが多く、個体差はあまりない。表面は一度刷毛目が施された上をへらで削って仕上げている。器壁の厚さは下底部が最も厚く1.4cm～1.6cm、下底から約3cm上方からは安定して1.1cm～1.4cmとなる。

腹部は部位によって計測値が異なるが、タガの部分で計測し得た。径30cm～32cmである。器壁の厚さは1.1cm～1.4cmのものが多い。タガの断面形は稜線の鋭い台形を呈する。腹部に通例として見られる透孔は、確認できた限りではすべて円孔である。その大きさは外法で径5cm～6.5cmのものが多いが、完全な円形のものは少なく、若干のひずみをもった稍円形を呈したものが多い。円孔の部位および数は小片のため明らかにはできなかった。

上縁部は出土例も少なく、確実なことはいえないが、推定径約28cm～32cmのものが多く、大きく外反するものは認められなかった。

円筒埴輪のうちに、いわゆる壺形埴輪といわれるものの、くびれ部を数個体分検出した。しかし、破片数がわずかであるため、全形を知ることができないので図64に示すにとどめる。

これらの埴輪片はいずれも赤褐色を呈し、焼成も良好である。胎土には石英などの砂粒を多く含み、大きなものは径5mm位のものも認じる。

その他、外部施設といえないかも知れないが、地形の窪い北側墳外に、尾根稜線と直交して、周溝状の溝が掘り込まれていた。掘り込み巾は約4.5m、深さは最深部で現存30cmである。尾根稜線を掘り込み墳丘に盛り上げることは、墳丘の高まりと幅員を同時に拡大することにもつながる。

葺石の広がりから本古墳の規模を想定すると、その外法で南北長18.8m、東西長は尾根稜線でもあり、内部主体が構築されている部分を中心線と考えて復元すると16.4mを測る。北側掘り込み部でみると、墳端は今少し葺石より外方にのびているので若干加算して、本古墳の規模は南北長20m、東西長18m前後の尾根主軸にそってや長方形のプランをもった方墳とするのが妥当のようである。墳高は見る角度によってかなりの差異をもっているが、東墳端の葺石外法から見て約2.5mの高さを有する。葺石上面の埋土が約20cmにおよんでいることから、かなりの埋土が予想され、もとは3m以上に高くそびえ威容を誇っていたものと推察される。

4. 内部構造

墳丘の南北中心線上に直列状に構築された二つの竪穴式石室が本古墳の内部主体である。いずれも盗掘を受け、徹底的に搅乱・破壊されており、原況は大きく損なわれていた。

1) 南主室

墳丘の南斜面から墳中央部に向けて掘り進まれた盗掘溝は、石室床面よりもさらに45cm深く、南

壁および西側壁をその盗掘溝の中へ崩し落とす形で掘られていた。したがって石室の東側壁はほぼ完形を保つものの、蓋石をはじめ、他の壁はその殆んどを掘り崩され、床面も擾乱されていた（第64図、図版35）。しかし、北壁および西側壁の下段石積みの一部が掘り残されて原位置を保ち、盜掘溝内に天井石と思われる板石が遺存したこと等から、本石室構造の大要を知ることができた。

石室は、一度盛り上げられた封土を再び掘り込んだ土壤内に構築されていた。石室の北壁内法は墳丘中心部から約80cmにあたり、長軸線をN15度Wにおいている。土壤の深さは現存墳頂下約95cm、石室床面は同約80cmに位置する。

側壁の最もよく遺存する東側壁部によると石室の構築は、面取りのされた10cm×30cmぐらいの角砾を横長に用いて、内法面を削えて小口積みしている。側壁高は約40cmで3段ないし4段で、ほぼ垂直に積み上げ上端面を削っていた。石積みの間隙には、粘質土を充填し、部分的には朱の遺存が認められた。側壁上面は板状の石材で約80cmの巾で長方形に整然と敷き積め、平面部を作り出しているのが特徴的であった。側壁部にはこれといった控え積みはなく、側壁部裏を埋め戻した後、上面敷石を施したものと考えられる。

石室妻部にあたる北と南の壁でも、石室上縁の敷石は存在したらしく、北壁部外方にその痕跡が若干認められた。東側壁南端部で側壁が垂直に面を削え、約12cm外法に控えて積まれ、極のはめ込み状をみせている部分が検出された。さらに盜掘溝の中に、それに合致する330cm×50cm、厚さ約10cmの長方形の板石が発見されたことから妻部の壁は、あるいは板状の石を立てていた可能性もある。

天井石の状況は、石材が持ち去られているため不明であるが、盜掘溝の中に厚さ12cm、巾65cm、長さ83cmのほぼ長方形の板状の石が検出されたことから、こうした板状の石材数個を用いて天井を構成していたものと推測される。

床面は擾乱されており、廻葬遺物も含めて施設の有無は不明である。

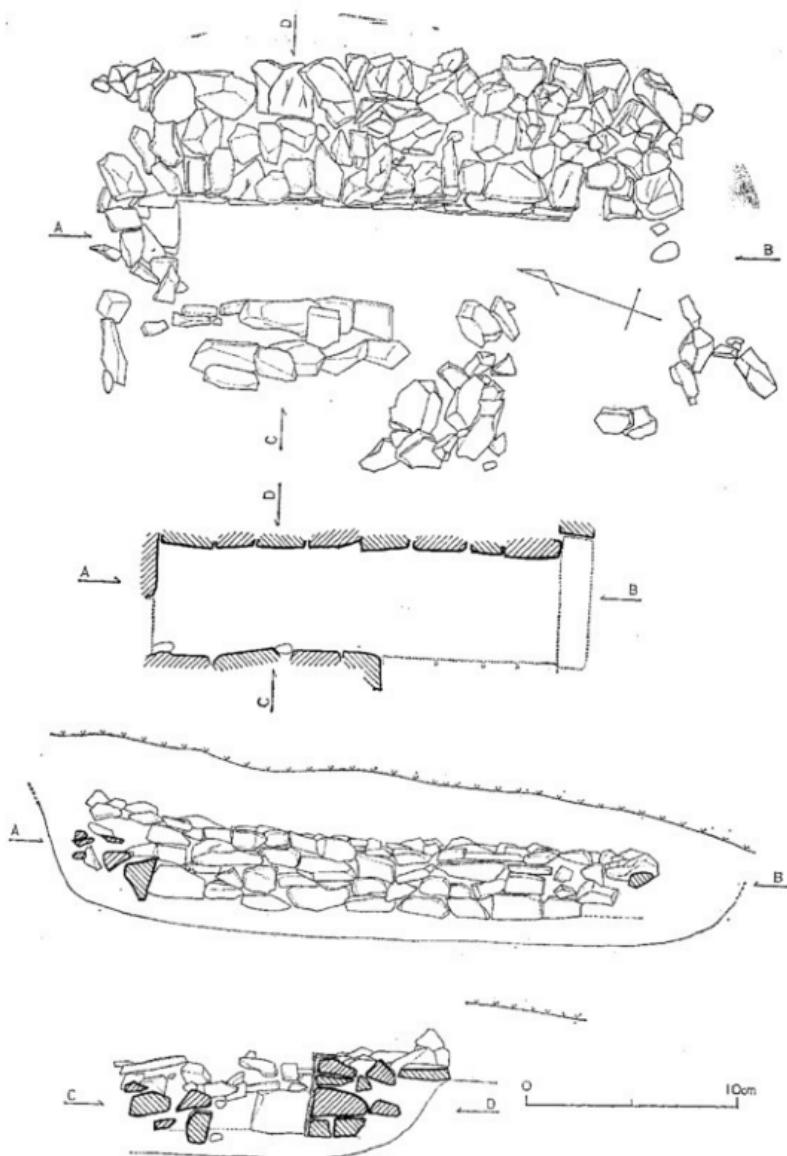
以上のことから総合して、本石室は床面内法長192cm、巾約50cm、側壁高約40cmの小規模の竪穴式石室であるといえる。石室に用いられた石材はいずれも付近の山で採取される、花崗岩および粘板岩質の変成岩が使用されていた。

2) 北主体

南主体の北方に、盜掘の際に石室の石材を取りはずし投げ捨てたと思われる状態で、多くの石が散乱していたが、その下方で平行に二列に並んだ石列が検出された。南主体長軸線上で同一方向を示し、東側の石列は2個の石材で80cm、西側の石列は4個の石材で46cm、両者間に内法巾38cmを測る（図65、図版36）。

石列の配置から、小規模の竪穴式石室の最下段石積みの一部であろうと推定した。石材は付近の山に産する丸味をもった山礫である。小口面を削えて控え方向に長く用いており、南主体に比して石材、構築とともにその起きを異にする。石室巾38cmおよび石積みの状況から推察して、被葬者一人がやっと納められる程度の石室であったであろうと考えられる。

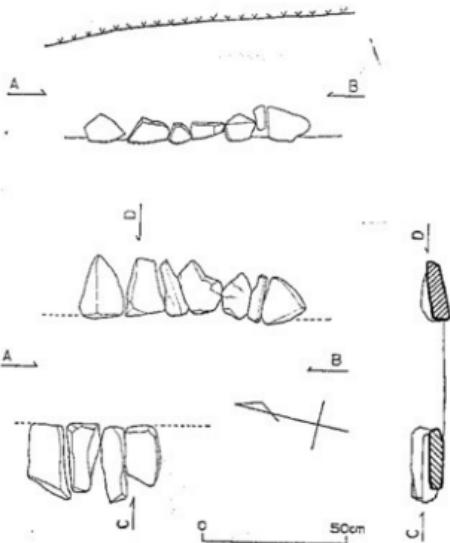
現存石組み南端部と南石室北壁内法との距離は1.7m、床面の高さは北主体の方が30cm高い構造、および立地からみて南主体が北主体に先行するものと思われる。



第64図 第1主体石室

5. 遺 物

本古墳の副葬遺物は、両内部主体とも盜掘の際に徹底的に搅乱・破壊されているため、原位置を保つものは皆無である。両主体の盜掘溝内に朱と混じって、滑石製小玉およびガラス製小玉が検出されたことから、石室内の埋土を捨てたと思われる土砂をふるいにかけて水洗するという方法によって、玉類と、鐵器片および遺体（骸16本）を発見した。かつての盜掘の際、勾玉9個、銅鏡をはじめ多くの出土物のあったことが伝えられていることから、今回の出土はそれら副葬遺物の一部に過ぎない。またそれらの遺物が南北いずれの主体に伴なうものかについても不明である。ただ感じとして、両主体に近い部分においてより多くの出土をみたことを付記するにとどめる。



第65図 第2主体石室

〔玉類〕

勾玉 (図66-1, 図版39)

淡緑色の良質な碧玉製、頭部に一部きずがあるが、均整のとれた形状を示す。高さ3.6cm, ①2.25cm, 厚さ頭部1.1cm, 尾部0.85cm, 孔径4~6mmを測る。貫孔は片側からなされ、孔口に磨耗痕が認められる。

管玉 (図66-2・3)

青白色の碧玉管玉2個。いずれも径4mmの細形である。表面は滑沢をもたず、風化しやすい粗質の材を使用している。貫孔はいずれも一方から穿たれ、両端面は平滑である。長さ②2.8cm, ③1.85cmを測る。

琥珀製小玉 (図66-4・5)

赤茶色の琥珀製小玉2個。いずれも脇部が丸味をもって外に張った扁平なものである。④径8mm, 高さ4.5mm, ⑤径5.5mm, 高さ3mm, 貫孔は一方からなされている。

ガラス製小玉 (図66-6)

完全形44個、細片2個体分、計46個が発見された。内濃紺色2, 青白色21, コバルト色16, 黄緑色7で、色毎にはば同大のグループに分類される。濃紺色のものが最も大きく、径4.5mm, 高さ3.5mmである。青白色の玉は平均径3mm, 高さ2~3mm, コバルト色は径2mm, 高さ1~1.5mmで

ある。黄緑色の玉が最も小さく、径2mm弱、高さ1mmを測る。いずれも丸味をもった彫ぶくらみ、両端部は水平面を有する。貫孔は上下端に對してほぼ垂直にあけられている。

滑石製小玉（図66—7・8・9）

完全形1275個、細片約40個体分、計約1300個におよぶ多量の出土をみた。色は青白色のものと、青灰色の二種類に大別される。形は径が大きく高さの低い、いわゆる圓形のもの、その反対に径が小さく高さの大きいもの、側面形態が丸味をもったものが最も多く、方形を示すものもかなりある。また側面中央にそろばん玉状に棱線を有するものも若干みうけられた。これらの玉は径4mm、高さ3.5mmのものを最大、径2mm、高さ1mmのものを最小にして分布するが、径3mm前後、高さ2.5~3mmのものが圧倒的に多量を占める。孔は比較的中央に穿たれ、ほぼ垂直に貫孔している。

ガラス質小玉（図66—10・11）

赤褐色をしたガラス質の小玉である。計155個が発見された。前述のガラス質小玉に比して、表面は不透明でガラス特有の光沢を示さない。あるいは鉄石英質の石材であるかも知れないが、細片の断面がガラス光沢を示すことから、一応ガラス質としてあつかった。

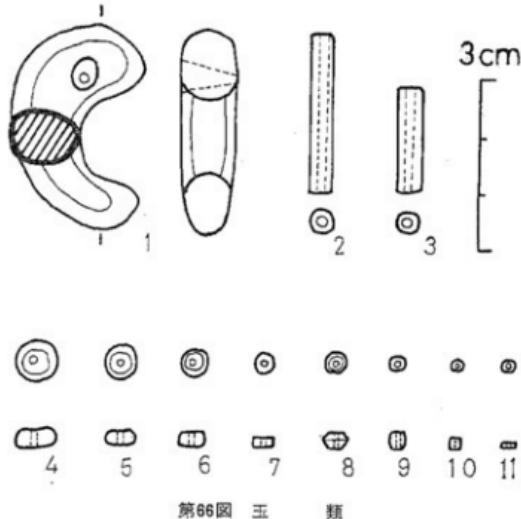
形状および大きさは、個体によってかなりの差異が認められるが、すべて同形のものである。径2.2mm~3.2mm、高さ2mm~3mmのものが大部分をしめる。最大的もので径4mm、高さ3.5mmを測る。孔は中央部にほぼ垂直にあけられ、その径は0.8mm~1.4mmを測る。一般に扁平なものが多く、側面形はやや外ふくらみの長方形を呈するものが多い。これと同質同形の玉が、津山市六つ塚古墳群第5号墳から出土しているが、その発見数は実に9600個以上と膨大な量であった。

〔鉄器〕

笠掘横穴および畠地内石積みの間から、数片の鐵器片が見出された。しかしいずれも銹化が著しく、原形をとどめてないため、実測および計測はできなかった。破片の中に直刀および鐵鎌の一部と考えられるものが含まれていたことを付記するにとどめる。

6. まとめ

1. 岩田第3号墳は、南面する丘陵尾根突端部に立地する方墳で、一辺約18m×20m前後の古墳で



第66図 玉類

- ある。全長 192m の墳丘に広大な溝をたたえた西宮山古墳を眼下に望む位置に所在する。
2. 墳丘には葺石および埴輪を有する。埴輪列のはかに壺、高杯、器物埴輪が樹てられていた。器物埴輪は家、きぬがさ、短甲、草すり、武装人物等多様である。中でも三角板革縫短甲は、本古墳の時期を限定する意味でも貴重である。
 3. 墳中央に一直線に並ぶ二つの竪穴式石室があり、鏡、鉄器のはかに装身具が多く、特に赤色玉類は特徴的な遺物である。
 4. この古墳の時期は、5世紀中葉から後半にかけての時期と推定され、墳形等から想定される西宮山古墳の時期と相似していることが注目される。
 5. 岩田第3号墳の被葬者は、その死後に、墳丘にまで短甲類、きぬがさ等の器物埴輪をたてたことに代表されるように、首長眉を構成する有力な人物と想定される。
 6. 岡山県下で方墳の調査報告例は、その量に比して少ないが、旗臺古墳、沼6号墳⁽²⁾に次ぎ、しかも各種遺物が豊かな報告例をここに加えることができた。また砂川流域の4～6世紀にわたる古墳群全体の考察を進める上でも、貴重な資料となるものである。⁽³⁾

註

- 1) 津山市川崎地内所在内部主体は謙稿、報告書は近刊の予定
- 2) 「岡山市史・古代編」岡山市、1962年
- 3) 今井亮、神原英朗他共著「津山市沼6号墳調査報告」「古代吉備」第6集1969年

あとがき

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう、住宅用地造成予定地内の埋蔵文化財調査概報第2集を遅ればせながらやっと刊行する運びとなった。工事工程による時間的な制約と、調査体制の不備と相まって、必ずしも十分な発掘調査であったとはい難い。また継続的に次から次へと調査にかかり、発掘調査遺跡の提起する諸問題について検討、および論及する間もない状況である。

先に報告した第1集「用木古墳群発掘調査概報」が、いわゆる外観上の概報となり、多くの方々から、具体的遺構、遺物等に関する問い合わせが寄せられ、調査概報といえども生きた資料として、活用に堪えることのできるものでなくてはならないことを痛感した。したがって、今回の調査概報は、論考はさておき、事実報告に重点をおき、具体的且つ詳細に記述し、広く資料として活用し得るものとなるよう努力したつもりである。諸兄姉の御批判、御叱正をいただければ幸せである。

住宅用地造成予定地内、すなわち、東高月遺跡群も用木古墳群、便木山遺跡、慾団遺跡、四辻古墳群、四辻墳墓群……と調査が進み、その全容と特徴を明らかにしてきつつある。と同時にまた、これらの遺跡が減平消削することにつながる。目前で大型スクレーパーが遺構を消していくのは、見るにしのびないものがある。

発掘調査および本書の作成にあたっては、多くの人々の励ましと助言を得た。記して厚く謝意を表し、あとがきとする。

1971年7月25日

神 原 英 朗

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報
第 2 集

昭和46年7月31日発行

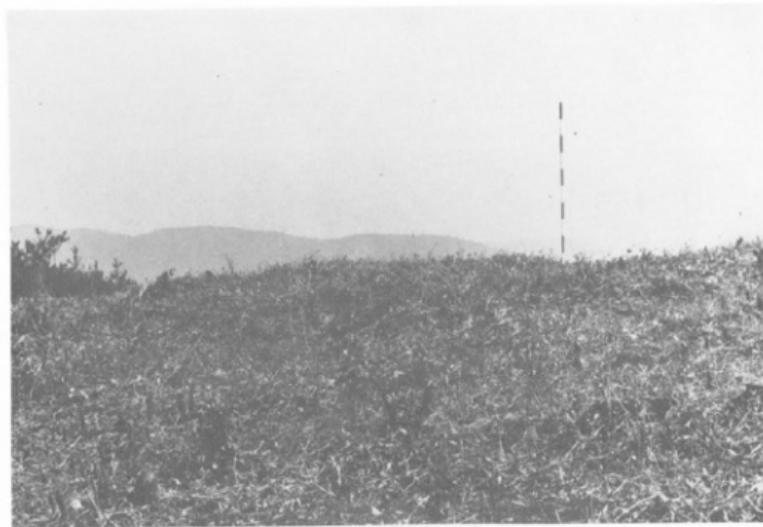
発 行 山陽団地埋蔵文化財発掘調査団

岡山県赤磐郡山陽町上市108
山陽町教育委員会内

印 刷 西 尾 総 合 印 刷 株 式 会 社
岡山市駅前町2丁目5-23



1. 便木山遺跡調査前外観（東南から）



2. 便木山遺跡調査前外観（南から）



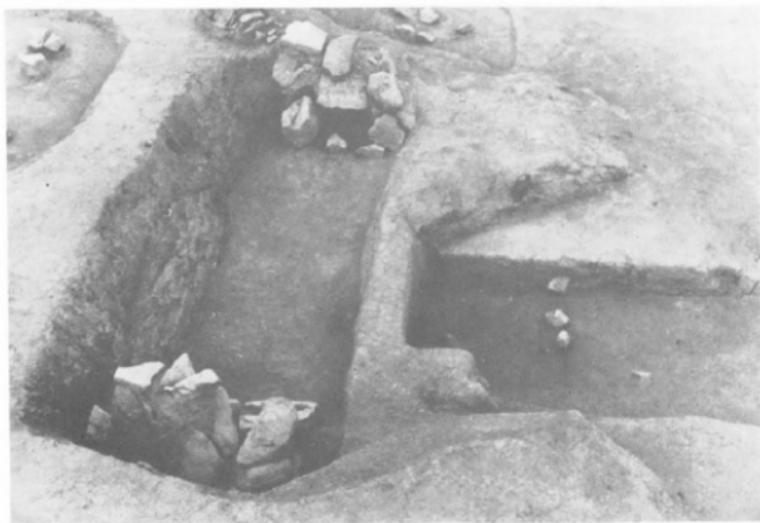
1. 発掘区全景（西G 3古墳から）



2. 土塹群出土状況



1. 1~7号土塙出土状況



2. 9·10号土塙出土状況



1. 24号土塙周辺部出土状況



2. 17~20号土塙出土状況



1.
25号土塚出土状況



2. 26号土塚遺物出土状況



1. 33号土塙出土状況（東から）



2. 33号土塙出土状況（北から）



1. 30・31号土塙出土状況



2.
34・
35号
土塙
出土
状況



1. A 溝状遺構出土状況



2. B 溝状遺構出土状況



1. C 溝状遺構出土状況



2. D 溝状遺構出土状況



1. C溝状遺構底土器片出土状況



2. 24号土塙直上土器出土状況



3. K-I特殊壺出土状況



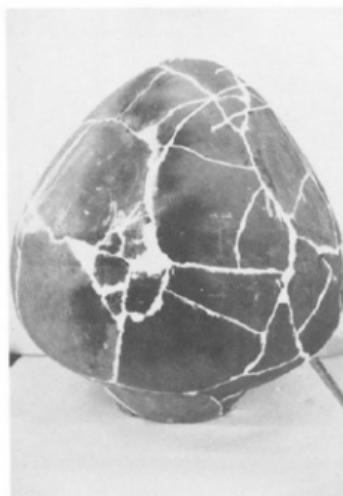
1. K2土器棺出土状況



2. K3土器棺出土状況



3. K6 土器棺出土状況



1. K 6 土器棺壺



2. K 2 土器棺壺



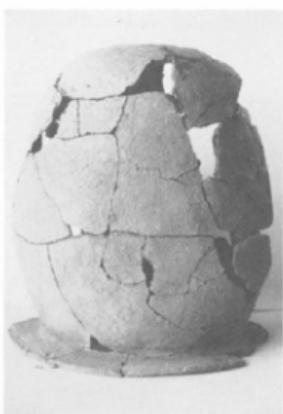
3. K 6 土器棺（蓋）鉢



1. K7土器棺出土状況

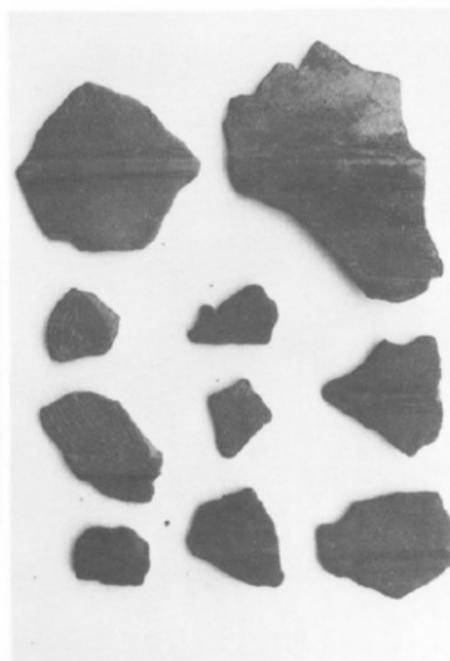


2. K7伴出环



3. K7土器棺甕

1. D溝状遺構出土特殊器台片



2. C溝状遺構出土鼓形器台





(1) 8号土塙付近出土鏡



(2) 26号土塙出土鉄器



1. 猿団遺跡遠景（西南から）



2. 猿団遺跡近景（南から）



1. 発掘区景観（7号住居址以南）



2. 発掘区景観（1号住居址以南）



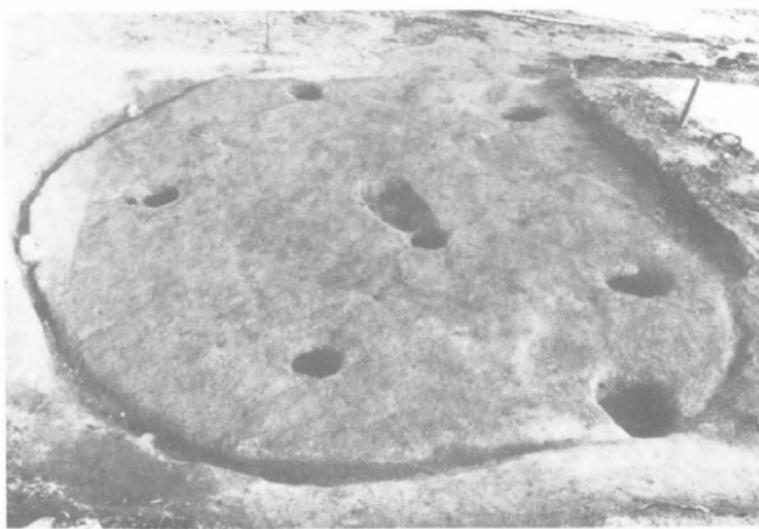
1. 1・13・15号住居址出土状況



2. 2・3号住居址出土状況



1. 4号住居址出土状況



2. 5号住居址出土状況



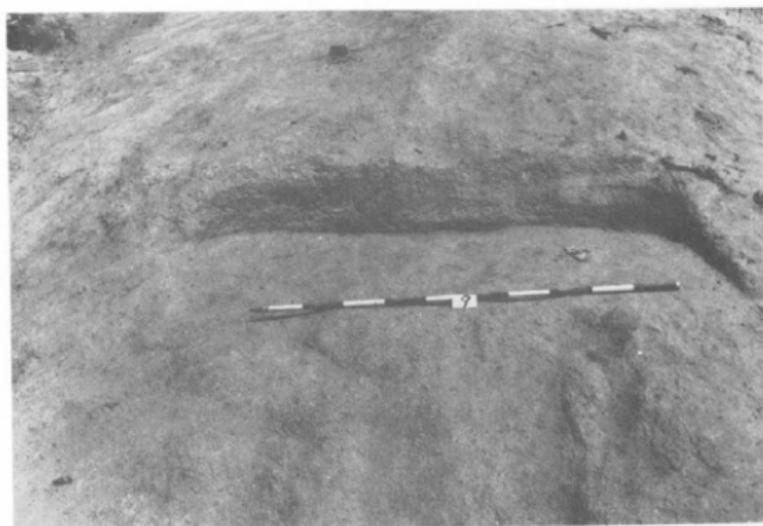
1. 6号住居址出土状況



2. 7号住居址出土状況



1. 8号住居址出土状況



2. 9号住居址出土状況



1. 10号住居址出土状況



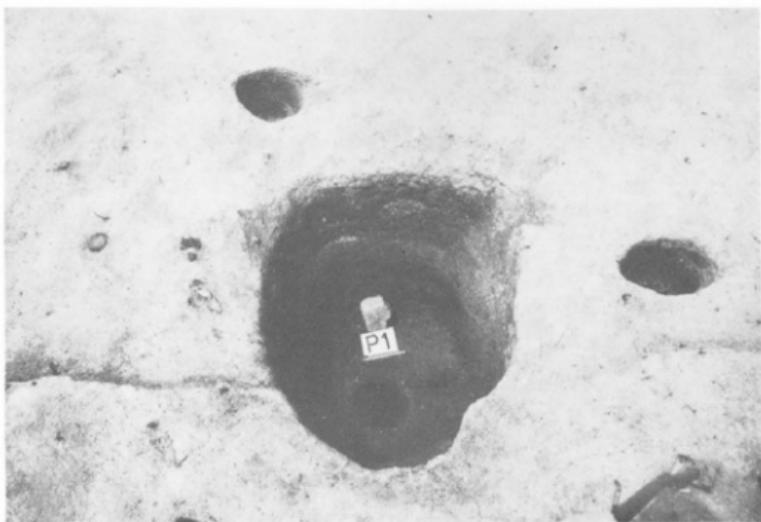
2. 13・14・15号及びP 1・P 2出土状況



1. 14・15号住居址出土状況（南から）



2. 14・15号住居址出土状況（北から）



1. 第1ピット出土状況



2. 第2ピット出土状況



1. 16号住居址出土状況（南から）



2. 16号住居址出土状況（東から）



1. 17~20号住居址出土状況



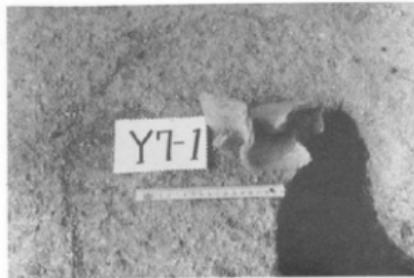
2. 21~24号住居址出土状況



1. 2号住居址付近平担部



2. A溝状遺構



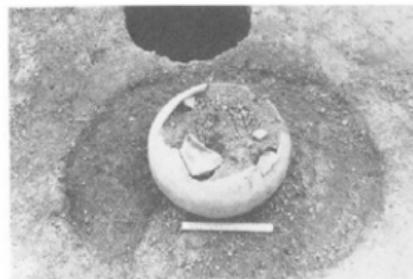
1. 1号住居址土器片出土状況



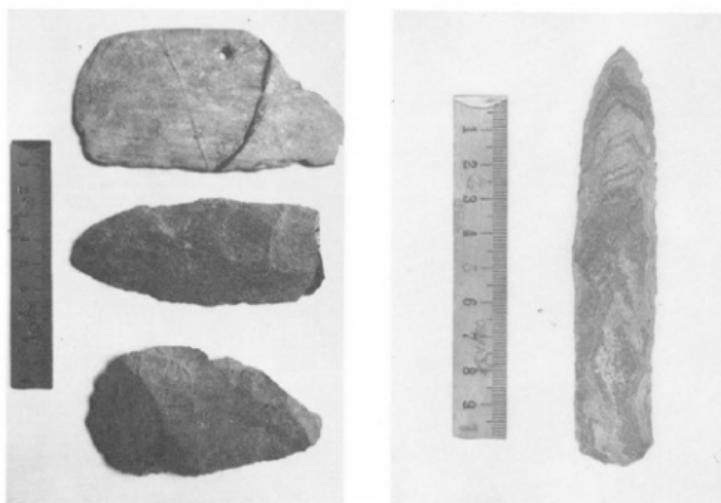
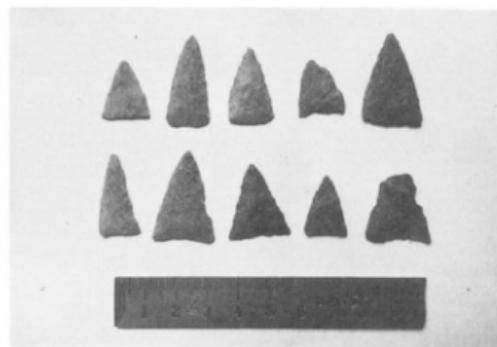
2. 2号住居址土器片出土状況



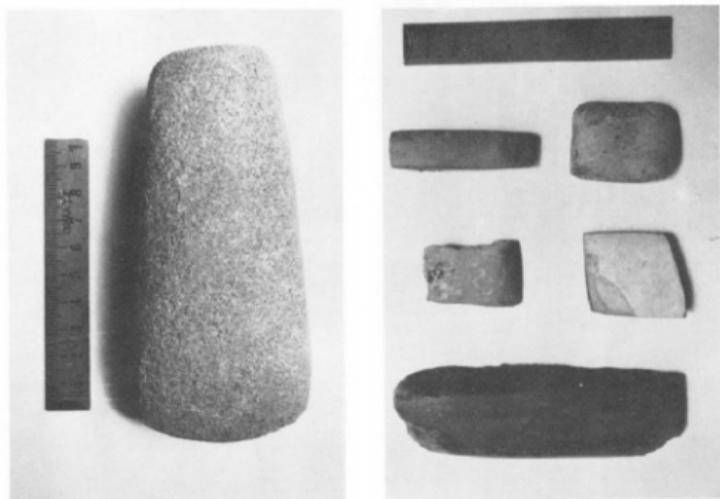
3. 蛤刃石斧出土状況



4. 10号住居址内藏骨器出土状況



惣団遺跡出土石器



1. 猿岡遺跡出土石器



2. 猿岡遺跡出土桃の実



1. 岩田第5号墳調査前外観（東から）



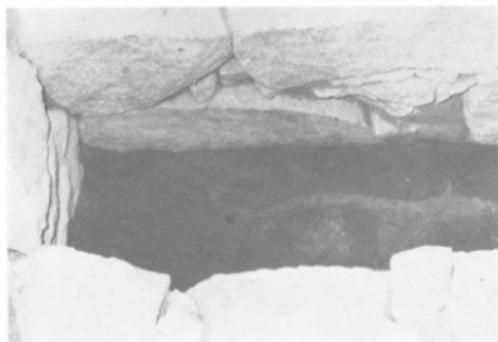
2.
北墳端部列石



1. 石室天井石出土状況



2. 石室出土状況



1. 側壁構築状況（西壁）



2. 小口壁構築状況（北壁）



3. 石室・列石関連状況



1. 岩田第3号墳全景（北から）



2. 3号墳墳頂部発掘状況